凡例

一　本書は諸學校入學試驗に應ずる者の爲に編纂したりと雖も、通常の問答書とは、大に性質を異にするものあり、所謂問答なるものは、速成を主とする一時的書籍なりと雖も、此の書は、別に一の教科書として、確實なる歴史の知識を授けむとをも目的とす。

一　程度は中學校卒業生を標準とせり、然れとも記述稍説明的に傾きて、教科書の趣を備へざるは、獨學者の便利を慮りてなり。去れば本書は、尋常師範學校、中學校、高等女學校等の教員の參考者として、亦遜色なきを信ず。

一　問題は總て解答にして、其の解答も亦孤立ならむ

とを勉めたれど、斯くの如く爲すは、徒に紙數を増加するのみなれば、前後の問題に命脈を縛ぎたるもの甚だ多し。是れ讀者、殊に受驗者の豫め心得置き給はむとを乞ふ所なり。

一　問答は必ずしも此の書に掲げたるものを以て盡きたるに非ず。否數百千の問題は提出者によりて、自由に製造せらるべし。去れば讀者は、此の書より更に數多の問題を考案して、其の解答を作るを怠るべからず。

一　本書の上古に於ける固有名詞は、英國の發音に從ひ、中古以後に至りては、各國の發音に從へり。これ上代にありては、英音のみに從ふも不便なしと雖も、近世に入りては、人名上などにて紛雑混同を生ずるの懼れあればなり。

例へばチャールスといふも、單に此の音のみにては、英人か獨人かを定め難しと雖も、チャールス、カールと言へば、前者は英人にして、後者は獨人なると、一目瞭然たり。これ記憶上甚だ便なり。

一　本書の編纂に當りて、四五の原書及び教科書を參考したれど、之れを記するの必要あらざるべし。次に讀者諸君の參考書として、予が編纂せる『通俗世界歴史』フリーマン氏の『歴史地圖』二書を掲げ置く。

三十五年八月

博文館編輯局にて

長谷川天渓識

こを勉めたれど、斯くの如く爲すは、徒に紙數を增加するのみなれば、前後の問題に命脈を縛ぎたるもの甚だ多し。是れ讀者、殊に受驗者の豫め心得置き給はむことを乞ふ所なり。

一　問答は必ずしも此の書に掲げたるものを以て盡きたるに非ず。否數百千の問題は提出者によりて、自由に製造せらるべし。去れば讀者は、此の書より更に數多の問題を考案して、其の解答を作るを怠るべからず。

一　本書の上古に於ける固有名詞は、英國の發音に從ひ、中古以後に至りては、各國の發音に從へり。これ上代にありては、英音のみに從ふも不便なしと雖も、近世に入りては、人名上なぞにて紛雜混同を生ずるの懼あればなり。

例へばチャールスといふも、單に此の音のみにては、英人か獨人かを定め難しと雖も、チャールス、カールと言へば、前者は英人にして、後者は獨人なると、一目瞭然たり。これ記憶上甚だ便なり。

一　本書の編纂に當りて、四五の原書及び教科書を參考したれど、之れを記するの必要あらざるべし。次に讀者諸君の參考書として、予が編纂せる『通俗世界歷史』フリーマン氏の『歷史地圖』二書を掲げ置く。

三十五年八月

博文館編輯局にて。

長谷川天溪識

特62
243

目次

總說(十二問)……一
古代史(百三十九問)……八
中古史(七十六問)……八七
近世史(百三十六問)……一三七
最近世史(四十問)……二〇〇
年表……二一一
官立諸學校入學試驗問題……二三三

新撰

西洋歷史問答

長谷川誠也編

總說

一 歷史とは何ぞや

答 歷史とは、連絡ある過去の物語なり。これを一國につきて見るに、其の國の發達せる跡を究むるもの歷史なり。これを世界につきて見るに、世界の發達の跡を辿るもの、即ち眞の歷史なり。過去の世界には、幾多の國民ありき。然れども歷史は、一切の國民、一切の人間の行動を記載せず。これ國民或は人物には、世界或は一國の發達に貢獻せざるものあるが故なり。換言すれば、不用の國民、或は人物は、歷史の上に書せられざるなり。此故に歷史なるものは、恰も身体の組織の如し。四肢は言はずもあれ、五臟六腑等其他如何なる部分と雖も、身体全部にとりては

不必要なるは莫きが如く、歷史上の記載は、そのいかなる部分と雖も、歷史全躰の一に必要缺くべからざるものならざる可らず。從つて國家にして、世界大勢の文明發達に盡す所なきに至らば、歷史は其の盛衰を問はざるなり。

二　西洋歷史とは何ぞや

答　西洋歷史とは西洋文明の發達を記述せるものなり。世界の歷史を見るに、往時は、東西兩洋の發達は、別々なりき。東洋は東洋、西洋は西洋として、特別の發達を成したる傾あるが故に、便宜上之れを區別すべし。されど現今にありては、既に兩洋接近したるが故に、今後には此區別は、自ら消滅すべし。

（イ）往昔には東西の關係なしと言ふべきか。

兩洋の關係は絶對的に無しとは言ふを能はず。アレキサンダー大王の印度征伐の如き東西交通、接近の好例なりとす。然れども今迄の所にては、兩者の發達が、大躰に於いて別途をとりしが故に、歷史記述の方便として、これを區別す。

三　歷史の研究は如何なるべき乎

答　歷史の研究は、事件の原因結果を主とすべし。單に事實を羅列するは、歷史本來の面目を發揮したるものに非ず。而して事實の探究を必要とする所以は、事件の原因結果又は變轉の眞相を知るための方便に過ぎず。

四　世界史上の重なる人種を擧げよ

答　史上重要なる位地を占むる人種は、チュラニアン、アリアン、シエム、ハム等なりとす。而してチュラニアンとは所謂黃色人種を含むものにして、その活動せる舞臺は重に東洋なりとす。又その他の三人種は西洋史上に活動せり。

五　アリアン人種に屬する種族を擧げよ

答　アリアン人種は數多に分れたり。左に此れに屬する種族を掲ぐ。

六　シエム種にて史上重要の位地を占むる民族を擧げよ

答　シエム派にて活動せしものは、アッシリア人、バビロニア人、希伯來人、フエニシア人、アラビア人等なりとす。

七　ハム種にて史上有名なる國民を擧げよ

答　ハム派にて活動せし國民には埃及人あり。

八　アリアン、シエム、ハム三人種の特色を略記せよ

答　アリアン人の特色は智力の優秀なるに在り。その一族は歐洲大陸に分散して、今日の文明の中心となれり。比較言語學者が、アリアン人分散の時代以前の文明を、言語の方面より研究せる所に依れば、此の人種は夙く發達して決して、野蠻の狀態にあらざりしが如し。

シエム族の特色は、宗教を生じたるに在り。猶太教、基督教、並に回々教の三大宗教は實に此の種族の産物なりき。その人種の根據地は、チグリス、ユーフラテス兩河の沿岸亞剌比亞、シリア地方なりき。

ハム族の根據地は、ナイル河口に在り。その特色は大建築物を遺したるに在り。

九　アリアン人の分散せるさまは如何

答　此の人種が元は一所に集り居りしは明かなり。されば其の時代の言語は、皆な一なりしとも明白なり。これ今日歐洲各國民の間に、同一なる言語の存在するによりて推知すべし。例へば父、母、兄弟等の語の如し。去れど各がそれ〴〵の方向に分散せし以後は、言語互に變化を生じ、遂には互に解する能はざるに至れり。

儕て此の一大人種が、各部に分離せし時代、並にその狀況は、今より知るべからず。されど其の分散の狀況を推察するに、次の如し。その養源地はバクトリア地方にして、先づ人民は二大部に派れたるならむ。その一は東方組とも言ふべく、これ亦亞細亞組とも名付け得べし。即ち東南の沃野に向つて進み、波斯人並にヒンドス人の祖となりしもの是れなり。印度に於ける哲學、及び宗教は、全く西北より侵入し來れるアリアン一派の手に依りて發達せるものといふべし。第二は西方組或は歐羅巴組といふべく、これ養源地即ち本土を出でゝ西方に向ひ、今日の歐羅巴人の祖先となりし者なり。

一〇　歐洲に於けるアリアンの分散せる跡を語れ

答　アリアン人の他地方に進むや、常に土蠻を征服して、勝者の地位に立てり。而してその歐洲に向ひしものは、左の如く派れたり。

一　歐洲の中央部に突入せし者をケルト種とす。此の種族、後には他のアリアン一派の爲に逐はれて、歐洲の西端部に蹐蹐せり。今日の英吉利島、西班牙の西部等に其の一族あるは、その進路の變遷を示すものなり。

二　その南方に入りしものは、希臘並に拉丁の二派とす。この人種は、始めは一致して活動せるが如し。これ兩者の言語甚だよく似通ひたるを見て知るべし。

三　歐洲の西方に侵入したるはチユートン種なり。今日の獨逸、英吉利等の國民の祖先となれる者なり。而して文明史上、重要なる位地を占めたるは後代なり。

四　歐洲の北部に進みたるはスラヴ種にして、露西亞の祖なり。その文明史上に貢獻せるは近世に初れり。

固より此れ等の人種の進入せし時代は詳ならず。又其の更に分派せし時代も、甚だ不明なりとす。但し進入者中、最も古きはケルト種なるは明白なり。

一一　西洋史の區分は如何

答　歷史の區分は便宜上のものなり。西洋史は通常左の如く分かたる。

上古史　太古より耶蘇紀元後四七六年、即ち西羅馬帝國の滅亡に至る。

中古史　西羅馬の滅亡より一五一七年、即ち新大陸發見に至る。

近世史　宗教改革より維也納會議（一八一五年）に至る。

最近世史　一八一五年以後今日に至る。

（イ）西洋史上の紀元は、何に因て定められたるか。

西洋紀元は、キリストの降誕を以て元年と定めたるものなり。往古は各國皆特定の紀元を立てたりしが、世界史を編纂する上に、彼我の對照困難なるが故に、遂に是れを一定する事とはなしぬ。その必要を說きたるは、伊太利の天文學者リクシオリにして、グレゴリー曆に基きて紀元前後の區別を造れり。

（ロ）グレゴリー曆とは何ぞや

グレゴリー曆とは、ジユリアス、シーザーが埃及曆を基として制定せる曆を、羅馬法王グレゴリー第十三世（一五八五年歿）が改正せる者を謂ふ。

一二　歷史以前の時代は如何に區別せらるゝか

答　人類が地球上に生存し出したるは、何時なりや知るべからず。而して歷史なるものは必竟文字ありて後に傳はりし者なれば、歷史以前の事は知るべからず。文字の發明たる、既に人類の非常なる進歩にして、その以前には、文明に種々の階段ありしや明也。されば學者は、彼等太古の人類の遺物につきて、その文明の階段を大別す。（一）石器時代（二）青銅器時代（三）銕器時代の三者これなり。

石器時代 { 舊石器時代 遺物は洪積層 地中に在り / 新石器時代 遺物は沖積層 地中に在り } 石器を用ひたるが故に此の名あり

青銅器時代 { 青銅を利用せるが故に此の名あり }

鐵器時代 { 鐵を利用したるが故に此の名あり }

古代史

一 歷史は如何なる點より始まるか

答 書契以後の歷史は、いかなる點より始まるやといふに、其の各國民の相互關係に始まると、總論の歷史の定義に依りて明かなり。

二 古代に於て最も早く關係せし國民は如何

答 古代に於いて最も早く交通を開けるは、埃及、フエニシア、及びヘブライの三國民なりとす。今其の顚末を錄さむに紀元前二千一百年頃に當りて、シリア地方に住せる未開の一族。埃及地方の豐沃なる野を慕うて、來襲し、これが爲めに埃及の南部は一たび獨立を失ひたり。然るに埃及人奮起して、遂に彼等を國外に逐ひ、更に驅足を延ばして、

亞細亞の西部及びシリア、アラビア等に侵入し、是に於いてかメソポタミアの文明と相接するに至れり。

三 埃及國の最古文明たる所以如何

答 埃及が西洋史上に於いて、最古の文明國として名ある所以は、全く自然の恩賜なりといふべし。即ちナイル河の賜なり。本來埃及の國たる赤道附近なれば、地味の耕作に適せざるは勿論なるべきに、ナイル河は毎年期を定めて汎濫し、その水の減ずるや、兩岸に泥土を殘留して、茫々たる曠野を造れり。これより百般の事物發達するは、多言を用ひずして明白なり。

四 埃及の建國年代並に上古の國狀を略記せよ

答 埃及の建國は紀元前三〇〇〇年頃なりといふ。その上代の國狀なりといふを聞くに全國は上下の二部に分れたり、上埃及とは全國の南部を指し、テベエー府を以て其の首府と定め、下埃及とは地中海沿岸の地にしてメムフヒス府を首都とせり。

五　埃及史の區分如何

答 埃及の歴史は通常三段に區分せらる。建國より紀元前五二五年、波斯のために征服せらるゝ迄には、王朝三十ありき。上史とは建國よりヒクソス人來襲の時代迄をいひ、中古とは紀元前一六七〇年頃、埃及人のヒクソスを國外に驅逐したる時代迄を指し、是れより以後國家の滅亡までを下史と稱す。

六　埃及上古の歴史を略記せよ

答 上古史中にて特に大書すべきは、第二王朝に屬するセノフエル王なりとす。此の王の力によりて、全國は大に進歩し、今日に傳へられたる建築物も起れり。下つて第六王朝の時に當り、埃及の威風四隣を畏縮せしめたり。更に下つて第十二王朝に至つて、文物燦爛として輝き、げに世界史上最古の文明國たるを失はざりしが、此の頃、既に諸部落の間に軋轢を生じ、勢威將に衰へむとするに乘じて、北方より進み來り、メソス人なりとす。

七　ヒクソス來襲とは何ぞ

答 ヒクソス人は、埃及の威力、將に衰退せむとするに乘じて、北方より進み來り、メムフヒス府を陷れ、デルタ部の東部ダンスに府を定めて、埃及全土を支配せり。これを紀元前二〇〇〇年頃の出來事とす。然るに、ヒクソス人なるものは、元來遊牧の民なりしかば、腕力にこそ富みたれ、智力乏しく、所詮は埃及全土を支配するの力なかりき。加ふるに埃及人は國家の恥辱を雪がむとを、一日も忘れざりしが故に、遂に兵を擧げ、紀元前一六七〇年頃を以て、彼れ等を國外に放逐するを得たり。

八　埃及下史を略記せよ

答 從來埃及人なるものは、溫和主義の國民なりしが、ヒクソスと戰ひてよりは、氣風全く尚武的となり、戰鬪を好むに至りぬ。されば平和なる國内に跼蹐するを厭ひて、他國に遠征を企て、剽奪掠取を專らとするにヒクソス人なるものは、元來遊牧の民なりし益す多端とはなりぬ。偖て此の期の歴史中、特に注意すべきは、ラムセス第二世（紀元前一三八八年――一三二二年）の世なりとす。此の王の時代こそ前後を通じて、埃及の極盛期なれ（是れより後は以下の問答を參照せよ）

九　埃及王は如何にして無限の權利を有したるか

答 元來埃及は、自然の恩澤に由りて文明を進めたる國なり。乃ちナイル川の汎濫に依りて、大なる利益を得たるなり。然るに此の河の出水するや、人民の土地の境界は、恒

に流失して、いづれを其れと分ち難く、爲に土地私有の爭生じて止まず。此の場合に是れを規定せむには、國王の力を借らざるべからず。次にナイル川を利用して、運河を通ずる場合の如き、亦王の力を要せり。更にナイル河畔の沃野を葢うて、來襲する外敵を防ぐにも、亦王の力を要せり。此の三原因は、埃及王が他の古代の諸國王に比して、多くの權利を有し、日の神の子と迄、敬はれたる所以なり。

一〇　埃及の階級制度を記せ

答　國民は、僧侶、武士、農民、商工、牧畜者の五階級に分れたり。其の別嚴格にして上下相交らざる程なりしが故に、遂には國民協同の精神を失へり。僧侶は宗教の敎理を述べ、その儀式を司り、文學科學を研究するを專務とせり。其の他の階級は、名の如く各其の職務に從事しぬ。

一一　埃及の宗敎は如何なる性質ぞや

答　埃及人は、自然の力によりて養はれたるが故に、自然物を崇拜するに至れり。日月星辰は言はずもあれ、自然の作りし物として動物迄も尊敬せられたり。次に全國人は古より靈魂の不滅を信じ、一旦死すと雖も、其の靈魂は將來に於いて、再び身体に入ると說き、これより死躰を木乃伊に製するの術を得たり。木乃伊は藥種を用ひて、屍を干し固めたるものなり。

一二　埃及人の文字は如何なるものぞ

答　埃及人の文字は所謂象形文字にして、物の像を模したるものなり。而して其の中にも形其物を模したるそ、符號的に發達したるものその二種あり。

一三　埃及人の學術は如何に發達せしか

答　埃及人の發明にして、特に記すべきは、數學なり。從つて天文學も進歩せり。天文學の發達の結果は、太陽曆の發明となれり。天文

(イ)　太陽曆は如何にして發明せられたる乎

太陽曆發明の原因はナイル川なり。先づ此の川の汎濫せる日の太陽の位地を、(イ)點とすれば、太陽は之れより廻轉して(ロ)(ハ)二等の點を通過し、再び(イ)點に歸るや、川水汎濫す。即ち太陽の位地と河水汎濫の期との符合を知る。次に河水汎濫の間を數ふれば三百六十餘日なるを知り、偖て此の日數を以て一年と定む。之れ埃及人の考案せし所なり。

一四　埃及人の作りし建築物はいかなるものぞ

答 埃及人が今日に傳へたる建築物には、金字塔、方尖碑、螺旋堂、女面獅子像等あり金字塔は國王の墳墓、螺旋堂は宮殿、方尖碑は神殿前の塔なり。女面獅子像は、柔和剛勇兼備の必要を示したるものなりとか。

一五　フエニシヤ人の史上に於ける功績如何

答 フエニシヤ人が、歴史上重をなす所以は、當初の商權を握りたるに在り。元來全國はレバノン山脈と地中海との間に在る狹小の土地なりしが故に、農業を營み難く、從つて國民は、航海の業に當り、諸國と有無を交換したり。實に上代の唯一の貿易業者はフエニシヤ人にして、遠くは今の英吉利海岸に至り、或は印度に渡り、内地の産物たるシドンの硝子、チロスの紫染料等を輸出せり。亦紀元前十四世紀頃よりカルセーヂ、ユーチカ、カデス等に殖民地を設けたり。

一六　フエニシヤには國家的統一ありしや否や

答 此の國の特色は、統一的國家を成さざりしに在り。各市は一個の政府を有して發達したる儘にて、全國民を支配する政府あらざりき。而して其の市の大なるものをチロス及びシドンの二者となす。

一七　フエニシヤの盛衰を略記せよ

答 紀元前一〇〇〇年頃にはチロス市、全盛を極め時の王をヒラムと云へり。紀元前八八七年に至りて、王位の爭生じ、市内混亂を極めたるに際して、アッシリア兵の入寇を蒙り。全市民カルセーヂに難を避けたり。全七二〇年遂にアッシリアに降服し、次でバビロニアの征服する所となり、それより後は、波斯、希臘二國の手に渡り、紀元前六二年を以て羅馬の範圖に加へられたり。此の間シドン市一たび奮ひ起つて商工業を興し、波斯に反抗したれど、却て波斯の併呑する所とはなりぬ。

一八　フエニシヤ人の宗教は如何なりしや

答 フエニシヤ人の宗教は天眛の崇拜にして、此れがためには動物の犧牲を備へ、嚴格なる儀典を行へり。太陽及び月星等を尊敬するは、此の國人の宗教なり。

一九　フエニシヤ人の文明上に於ける大功績とは何ぞや

答 アルファベットの發明これなりたるに始る。彼れ等の此の發明をなせるは、商業貿易上の必要に迫られたるが故なら

む。此の文字はカドマスに依りて希臘に傳へられたり。

二〇 希伯來人の埃及を去りし顚末如何

答 元來希伯來人なるものは、カルデヤ地方に居住したりし民族なりしが、紀元前二十世紀頃に於いて、其の酋長なるアブラハム、一族を率ねてユーフラテス河を渡り、カナン（別名パレスチナ）に來り、此處を居住地と定めたり。然ろにカナン土着の民族は、日月星辰を拜するパール宗徒なりしが故に、一神を奉ずる希伯來とは和合せず、爭鬪恒に生じ、希伯來人は非常なる迫害を受けて、將に滅亡せむとしたる時、埃及王彼等の急を救び、導きてナイル下流の地に移住せしめたり。

彼れ等は埃及王の保護の下に、ナイル下流沿岸の地にて、安穩に居住したりしが、紀元前一三〇〇年頃に至り、埃及の勢力衰退し、外敵の侵入を懼れて、今のスエズ地方に一大城壁を設くるの計畫立てられ、希伯來人は、此れが建設に從事すべきを命ぜられたり。されど彼れ等は、元來一神（即ちエホバなり）を奉じて、其の命令の外は、如何なる者の嚴命と雖も、應ぜざるの覺悟ありしかば、何んぞ埃及王の命に從はむや。既に命を奉せず。兩者の間に軋轢生じ、埃及王は壓制手段を以て、彼れ等を服さむとし、希伯來人は、死すとも之れに從はずと決心し、モセスなる者を推して酋長とし、モセスは全民族を率ゐて、埃及の地を去れり。時に紀元前一三二〇年なりき。

二一 モセスの撰定したる土地及び其の占領の顚末を記せ

答 全民族を引率して、辛くも埃及を遁れ出でたるモセスは、アブラハムが曾て居住地とせるカナンに向へり。一行のカナンに到着するや、モセス死してヨシヤなる者代つて首長となれり。此の時カナン土着の人種間に不和ありて、外來者を擊退すること能はざりしかば、希伯來人は容易に此の地に突入するを得たり。

二二 希伯來人間に國王の撰ばれたる由來を略記せよ

答 元來希伯來人間には、一致協力の念乏しかりき。そのたゞ一致するを得たる所以は宗教の力のみなりき。ヨシアのカナンの地に入るや一民族を十二派に區別して、各部に割據せしめたり。されど此の時には、未だ政府なるものなく、各派は神意を本として其の國内を治めたりき。さはれ一民族の統一には中心たる政府、若しくは人物なからざるべからず。況や外敵四境に迫るに於てをや。此の故に此の種族間には、常に大人物出でゝ各派の心を統合するに力を盡したりき。耶蘇教經典の舊書に、士師又は預言者とあるは、即ち此の種の人物なり。これ然しながら國家を泰山の上に置くべき方法に非ず。故に人民は、預言者サムエルに迫つて、國王を撰定し、彼れをして内を平和に保ち、外は勁敵を防がしめむことを願へり。サムエル意を決し、ベンジヤミン族（十二派中の一なり）

の人サウルを推して王とせり。時に紀元前一〇五五年なりき。

二三　ダビデ及びソロモン二王の事蹟を問ふ

答　サウルは王位に上つて、一國を支配しけるが、いつしか此の位を世襲にせんものと計り、遂にサムエルと不和を生せり。サムエルは王位世襲の不可を看て、猶太族（十二派中の一なり）の人ダビデを擧げて王とせり。ダビデ（紀元前一〇二五年——九九三年）は國威を四隣に放たしめたる明君にして、紅海附近、ユーフラテス河畔を征服し、フエニシヤ、メソポタミヤの要害なるダマスコを取り、エルサレムを占領して、此の地を首府と定めたり。其の子ソロモン亦賢明の君にして、父の遺業を次ぎ、大に希伯來人の勢威を國外に示したり。

二四　希伯來衰退の原因如何

答　ソロモンは國威の伸張を計り、列國と親和を結び、或はフエニシヤより妃を迎ふる等、意なかりしかど、榮花を好み、且つ他國民の感情を和げむために、宗教上の制裁を緩にしたり。これ希伯來衰亡の原因とはなりぬ。榮花を好みたる結果として、國民は重き貢賦に苦み、宗教に對する寛大なる處置は、人民間に感情の衝突を生じき。

二五　希伯來の末路を問ふ

答　ソロモンの歿後、幾許もなく北部の十族は同盟して王家に叛せり（紀元前九七五年）これをイスラエル國と稱せり。又王家に從ふものは猶太及びシオンの二族のみにして、これを猶太國と稱せり。頃しもダマスコの守備兵を撤回せしかば、フエニシヤ人は、此の地を横りて通商貿易を始め、埃及人は機に乘じてソロモンが貯へし財寶を奪掠して歸れり。加之バール宗とエホバ宗との軋轢甚しく、國勢大に衰退し、あはれ亡國の恨を殘さむさまなりしが、一たび分裂二國の和解に由りて、國勢大に復したり。されど衰運は挽回し難く、遂に紀元前七二五年を以て、イスラエル國はアッシリヤ國のために、又猶太國は仝五九八年を以て、バビロニヤ國のために滅ぼされたり。

二六　希伯來人の宗教は如何

答　希伯來人の奉じたる宗教は、猶太教の名を以て知らるゝものなり。これ唯一の創造主エホバ神を崇敬する宗教にして、何事に關しても、エホバの意を本として打算せざるは無し。これ上代の文明に於ける一特質なりとす。而して文學も亦、此の宗教と共に興り、今日に至る迄舊約聖書の名を以て總合せらるゝ詩歌を傳へたり。次に彫刻も亦宗教に連れて興りたれど、大なる發達をなさざりき。

二七　舊バビロニアの勃興並に文化を略記せよ

答 埃及人がナイル川の恩澤に浴したるが如く、メソポタミヤ地方に流るゝチグリス、ユーフラテス兩河の恩澤に浴したるものはスメリア人及びアカヂア人等なりき。固より此の沿岸には、古來數多の種族居住したりしかど、就中文化を進めたるは、上記の二種族にして、これ等相合して、舊バビロニア國を造れり。其の文化大に進み、殊に數學と天文學との如きは、非常なる進歩を現せり。然るに紀元前三千年前頃に當りて、セミチック派に屬するカルデア人來襲して、前記の二種族を征服し、且つ其の文化を承繼して、大に務る所ありしかば、文運長足の進歩を表せり。天文學、數學は愈よ進み、尺度權衡の如き、精密に制定せられ、又圖書館の如きものも設けられき。其の文字は楔形文字の名あるものなり。宗教は自然物の崇拜なれど、殊に敬せられたるは、日の神月の神、大空の神、戰爭の神等なりき。

二八　アッシリア帝國の勃興を記述せよ

答 有史以來、多國を征服して、一大勢力を作りたるは、アッシリアを以て嚆矢とす。そもそもアッシリアとは、元來バビロニアの殖民地にして、その勢力、洵に微弱なりしが、紀元前一五〇〇年頃より、大に勢威を蓄ひ、アッシュールナシバール王（紀元前八

八三年——仝七五九年）の世に至つて、メソポタミヤ全土及びメジアを征服し、其の後チグラットパルアザール王の代には、猶太、イスラエル、フエニシヤ、ダマスコス等を征服したり。更にエザールハドン（紀元前六八一——仝六六八年）の時には、シリア、フエニシヤ、サイプラス、猶太、アラビヤ、メソポタミヤ、メジア、スリア等、皆アッシリアの範圖に屬しぬ。これ此の帝國の全盛期なり。アッスルバニパル王（紀元前六六八年——仝六二六年）の時には、埃及を失ひたりと雖も、別にリヂアを領しければ、國運毫も、衰ふる所あらざりき。是れより先き埃及人は、猶太國と相結んでアッシリアに當りしかど、戰敗れて、却て屬國の汚名を蒙れり。

二九　アッシリアは如何にして其屬國を支配せしか

答 アッシリアは、其の領地の主權者、即ち國王さか或は酋長さかを、其の儘になし置きて、其の領土を治めしめ、別に屬國の義務さして、年貢を納めしめたり。而して若し其の領國にして、叛亂を企つるさあらば、非常に殘酷なる處置に出でたり。但し武斷的なるは、同國の特色なりき。

三〇　アッシリア帝國衰亡の原因如何

答 さしも大なりしアッシリア帝國が、瞬時の間に滅亡するに至りし由來を尋ぬるに、

紀元前六〇〇年頃に當りて、蠻族此の國境に迫つて、武力を逞うせり。時の王、遠征中なりしかば、兵を派遣するに由なく、被害地の附近なるメヂア及びリヂアの二國民をして是れを防がしめたり。兩國民死力を奮つて戰ひしかば、蠻族は、容易に驅逐せられたりしかど、此の功と共に、兩國民は、自身の力が、案外に强大なるを自覺し、これよりはアッシリアをも物の數と思はず、屢々其の覊命に叛きしかば、アッシリアは之れに大打撃を加へむとせり。然るにメジア王シアクサレスは、バビロニア國王ナボポラッサルと提携して、アッシリア兵と戰ひ、連戰連勝、遂に紀元前六〇六年を以て、メジア人はアッシリア首府ニニヴエを、ナボポラッサルの子子プカド子ザールはバビロニアを陷れて王なれり。これを新バビロニアといふ。

三一　紀元前七世紀末の四大强國を擧げよ

答　アッシリア滅びたる時代、即ち紀元前七世紀の末葉より六世紀の初期に亘つて、四大强國の名を得たるものは、メヂア、新バビロニア、リヂア及び埃及とす。メヂア、新バビロニアの二國は、アッシリアを滅ぼしたるが故に、特に勢威を擧げ、埃及亦國土を守つて動かず、リヂアは小亞細亞の西部に割據して相對せり。當時此の他には、猶太、フェニシヤの二國ありて、各獨立の位地こそ保ち得たれ、其の勢力は、甚だ微にして、到底前紀の四國とは相列ぶる能はざりき。

三二　新バビロニアと埃及との關係如何

答　新バビロニアも埃及も、共に軍備を擴張して、領土を廣大ならしめむことを計れりゝろが、新バビロニア王子プカド子ザールは、埃及王子クニ世は、先づシリアを征服せんものと思ひ、大軍を率ゐて、此の地に遊ひけを率ひてシリアに行き、こゝに兩軍衝突し、埃及軍大敗し、王は領土を捨てゝ國に歸れり。是に於てか亞細亞に於ける埃及の領地は、新バビロニアの有に歸しぬ。

(イ)新バビロニアと猶太國との關係如何

子プカド子ザル王は猶太を征服せり。此の後猶太人は國外に放逐せられ、爾來今日に至るまで、國土を有せず。(二十五問參照)

三三　新バビロニアに對するリヂア、メヂア、埃及三强國の政略如何

答　子プカド子ザール王の武力は、新バビロニアの地位を高進せしめ、所謂四强國中、斷然頭角を露したり。さればメヂア、リヂア、埃及の三國は、之れに對する良手段を講せざれば、自國の獨立漸く危からむとせり。されば三國共に、先づ消極的に、新バビロ

ニアの勢力を鎩かむとを計りぬ。メヂア人は、其の東部に居住せし波斯人を撫育し、ひたすら其の馴致せんとを務め、以て事ある時に備へむとせり。これ波斯人の武力大なりしが故なりき。次にリヂア及び埃及の二國は、新バビロニアの屬國たるフエニシヤの商權を縮少せしめむが故に、小亞細亞沿岸或は其附近なる諸島に於ける希臘人を保護し、或は特權を與へ、或は備兵となし、ひたすら其の歡心を買はむとせり。然れども新バビロニアの勢力、依然として衰へず、あはれ天下の權は、其の掌中に歸せむとする有樣なりき。然るに形勢一變して、意外の民族起つて、却て天下を睥睨せり。波斯人の勃興即ち是れなり。

三四　バビロニア及びアッシリアの文化如何

答　兩國の文化は相等しく發達して、埃及を凌駕せり。殊に織物刺繡に至つては、精巧を極め、陶器に於いては、希臘人の師となりぬ。

三五　波斯の勃興を記せよ

答　メヂア人より文明を輸入したりし波斯人は、何時しか勢力を得て、野心を逞うするに至れり。元來此の民族の勢力を得たるは、アッシリア滅亡の頃なりとす。さて紀元前五五〇年頃、サイラスの王位に登るや、國民を鼓舞してメヂアを衝き、一戰の下に之れを亡ぼし、次でバビロニア、リヂアを征服して、武威四隣に輝けり（バビロニアの滅亡は紀元前五三八年なり）此の時に當りて、僅かに獨立を保ちたるは埃及なりしかど、これ亦紀元前五二八年に至りて、サイラスの子カムビセスの爲に征服せられたり。これを波斯國の勃興とす。

三六　ダリアス王の治國を問ふ

答　サイラスが女の夫なるダリアスは、カムビセスの死後、紀元前五二二年を以て即位したる王なり。當時の波斯領は非常に廣大なるものにして、殆ど歐洲の半に等し。王は之れを二十縣に分ち、縣に知事を置き、縣を分つて郡となせり。又中央政府よりは恒に密使を出して、民情を視察せしめ、稅法を整頓し、郵便制度を設け、國内を通じて、全一貨幣を使用せしめたり。而して軍備は特に注意せられたれば、非常に發達し、兵卒は射術に熟達し、騎兵は尤も勇敢なりきといふ。

三七　希臘と波斯との最初の關係は如何

答　リヂア及び埃及とは、其の附近なる希臘人と結托する所ありしかば、波斯人は、兩國を征服したる後に於いて、希臘人を責むるに、兩國と親交を結びて、自國に反抗したる件を以てし。且つ其の謝罪として貢を納めよと迫れり。當時希臘の殖民地には、紛議あ

りしため、已むなく波斯の命に從ひしが、紀元前五〇〇年に至りて、ミレトスの人、アリスタゴラスなる者、波斯に叛し、本國の後援を得て、波斯軍と戰へり。されど希臘軍敗北して、アリスタゴラスは戰死し、ミトレスは再び波斯の屬地とはなりぬ。然るにダリアスは、此の叛亂に希臘本土の一部が、聲援を與へたるを怒り、進んで希臘と干戈を交へたり。これ史上に有名なる波斯大戰爭なりとす（此の戰爭に關する、戰況、結果に就きては後條に詳かなり）

三八　波斯の宗教を問ふ

答 パクトリア敎は波斯人の宗敎なりき。こは紀元前一〇〇〇年に當りて、ゾロアスターなる人が、唱ひたる宗敎にて、善惡二つの神を立て、此れ等の幕下に無敎の神ありといふ。善神をオルムヅヅと云ひ、惡神をアーリマンと稱しき。人間亦此の二神の勢力に從ふものなれば、此等の意に逆はざらむことを務めたり。而して犧牲のためには、人を殺し、甚しきは實の子をすら屠りたるものありきと。また後世には火を崇拜したり。これ善神は火を司るといふ所より轉じたるものならむ。次に宗敎を司る僧侶をマギーといふ、世襲の職なりき。

三九　波斯人の氣風如何

答 武斷的なりき。一定の年齡に達したる壯丁は、軍隊的敎育を受けて、身體を鍛練したり。されど國勢の揚ると共に、奢侈生じ、外國より贅澤品を輸入するに至りぬ。されば工藝の術は餘りに發達せざりしかど、建築に至つては未曾有の壯觀を呈したり。ペルカポリス府の如き、その美の粹を蒐めたるものなりといふ。

四〇　希臘の地勢如何

答 それ希臘の國たる、地中海に臨み、且つ亞細亞、亞弗利加に近きが故に、各國民の交通の衝に當りたり。加ふるに國内には、山脈縱橫に走りたるが故に、人民は全人種にてありながら、一國家を造らずして、數邦に派れたりき。殊に半島及び港灣に富みたるが故に、文化の進歩著るしかりき。而して地理上より全國を分つときは、北方、中央部、及びペロポンヂサスの三大部なりとす。

四一　希臘の名の起源を問ふ

答 今日ギリシヤといふは、其の國民が、自ら呼びし名にはあらず。これ羅馬人が名付けたるものにして、國民は、其の土をヘラスと云へり。

四二 希臘史の口碑時代を略記せよ

答 希臘史の口碑時代にて、信用すべきもの殆と稀なり。其の口碑に依れば、尤も早く此の地に住したる人種をヘラスチギと云へりと云へりとぞ。そは兎も角も、上代の人民が早くより東洋諸國と關係を保ちたるは、今日全國の沿岸或は其の沿岸の諸島にて發見せらるゝ遺物によりて推知すべし。而してギリシヤ人は、夙くより四隣に威を振はむとを計りたるなるべし。口碑に傳はるヘラクリス、テセウス等の英傑は、實際上ギリシヤ國の爲に、功績ありしなるしならむ。かくの如く希臘人は、勢威を獲ると共に、四隣に驅足を延ばさむとを計り、數度の戰爭を開けるが如し。其の尤も有名なるものを、トロイの戰爭とす。

四三 口碑時代の國家組織は如何なりしか

答 希臘の口碑時代に於ける國家は、決して一國家を成立したるものに非ず。國内には數多の邦家ありて、一邦各一の國王を戴き、王位は世襲にして、王は最高の判官並に僧侶たりき。また其の國家の危難に迫るや、王は元帥として兵卒に命令せり。其の收入は牧場より取り、元老院議員十名を撰び、且つ公民は皆な公會地に集りて、國事を議すの權利ありき。此の時國王は議長となれり。去れど希臘全土の危機に際すれば、各邦の君主皆同盟し、最強邦家の君主を以て盟主とはなしぬ。又社會の階段は、貴族、平民、奴隸の三つに分れたり。

四四 希臘人とは如何なる種族に分れたるか

答 希臘國を成立せし重なる人種は、ドリアン、アイオニアン、エオリアン人等なり。此の三者こそ、史上に多く貢獻する所ありしなれ。

四五 ドリアンの南遷とは何ぞや

答 往昔には、ペロポンヂサス半島には、アケーアン人住居し、其の北部なるセッサリーにはドリアン人住居したり。然るにドリアンは蠻族に逐はれて、漸次に南部に降り、紀前一一四〇年頃に至りては、コンリト地狹を過りてペロポン子サス半島に入りぬ。之れと共にアケーアンは其の北方なるアイオニアンを襲撃し、アイオニアンは東方に走つてアッチカを以て居住地とせり、げにドリアンの南遷とは、希臘史上に、一變動を生じたる原因なりしなり。

四六 往昔のギリシヤの發達せし重なる原因は何ぞや

答 往昔のギリシヤが、兵法に於いて、武畧に於いて、著るき發達をなしたるは、各人種

四二　希臘史の口碑時代を略記せよ

答 希臘史の口碑時代にて、信用すべきもの殆ど稀なり。其の口碑に依れば、尤も早く此の地に住したる人種をヘラスチギと云へりとぞ。そは兎も角も、上代の人民が早くより東洋諸國と關係を保ちたるは、今日全國の沿岸或は其の沿岸の諸島にて發見せらるゝ遺物によりて推知すべし。而してギリシヤ人は、夙くより四隣に威を振はむとを計りたるなるべし。口碑に傳はるヘラクリス、テセウス等の英傑は、實際上ギリシヤ國の爲に、功績ありし勇士なりしならむ。かくの如く希臘人は、勢威を獲ると共に、四隣に驥足を延ばさむとを計り、數度の戰爭を開けるが如し。其の尤も有名なるものを、トロイの戰爭とす。

四三　口碑時代の國家組織は如何なりしか

答 希臘の口碑時代に於ける國家は、決して一國家を成立したるものに非ず。國内には數多の邦家ありて、一邦各一の國王を戴き、王位は世襲にして、王は最高の判官並に僧侶たりき。また其の國家の危難に迫るや、王は元帥として兵卒に命令せり。其の收入は牧場より取り、元老院議員十名を撰び、且つ公民は皆な公會地に集りて、國事を議すの權利ありき。此の時國王は議長となれり。去れど希臘全土の危機に際すれば、各邦の君

主皆同盟し、最強邦家の君主を以て盟主とはなしぬ。又社會の階段は、貴族、平民、奴隸の三つに分れたり。

四四　希臘人とは如何なる種族に分れたるか

答 希臘國を成立せし重なる人種は、ドリアン、アイオニアン、エオリアン人等なり。此の三者こそ、史上に多く貢獻する所ありしなれ。

四五　ドリアンの南遷とは何ぞや

答 往昔には、ペロポンヂサス半島には、アケーアン人住居し、其の北部なるセッサリーにはドリアン人住居したり。然るにドリアンは蠻族に逐はれて、漸次に南部に降り、紀前一一四〇年頃に至りては、コンリト地狹を過りてペロポンヂサス半島に入りぬ。之れと共にアケーアンは其の北方なるアイオニアンを襲撃し、アイオニアンは東方に走つてアッチカを以て居住地とせり、げにドリアンの南遷とは、希臘史上に、一變動を生じたる原因なりしなり。

四六　往昔のギリシヤの發達せし重なる原因は何ぞや

答 往昔のギリシヤが、兵法に於いて、武器に於いて、著るき發達をなしたるは、各人種

間に於ける勢力擴張の競爭に因るものさす。げにホーマー時代、即ち口碑時代の希臘史さは、各人種の間に於ける角逐に外ならざるなり。

四七　ギリシヤの他國に殖民地を設くるに至りし所以を問ふ

答　アッシリアの全盛を極むるや、フエニシヤ埃及等皆降服して、貢を納るゝに至りしかば、ギリシヤ人は、奇貨置くべしとなし、國内に住居せし外人を放逐し、諸國の勢力衰へたるに乘じて、諸方に殖民地を設けたり。

四八　ギリシヤ殖民地の重なるものを擧げよ

答（一）小亞細亞の沿岸にはキーメ、レスボス島あり。これエオリアンの殖民地なり、リヂアの沿岸にはアイオンアンの殖民地あり、スミルナ、ミレトス等是れなり。又ゴールの海岸にドリアンの殖民地ありき

（二）ヘレスポント及びプロポントス地方にはアビドス、セストス等ありき、黒海にはクリミアありき。

（三）トラーチア及びマセドニア沿海にはアプラチ、ポチデヤ等ありき。

（四）伊太利南端にはタレンツム、クロートン等ありき。

（五）シシリー島にはシラキユーズ、アグリゲンツム等ありき。

（六）ゴール即ち今の佛國にはマツシルラ（今のマルセーユ）ありき。

（七）埃及にはキレチ、ヘスペリデス等ありき。

四大強國の割據せし時代には、地中海東部の殖民人は、甚だ優勢なりき。されど伊太利に於けるものは、フエニシヤの殖民地たるカルセーヂの勢力には及ぶべくもあらざりき。偖て此れ等の殖民地は、本國より獨立して政治を行ひけるが故に、一見すれば、ギリシヤ人たるを失ふに至るべしと思はるれど、元來ギリシヤ人は、全一の言語、宗教を固く守りたるが故に、他の感化を蒙るとあらざりき。斯く團結の鞏固なると、これ全國の一大勢力を得たる所以なり。

四九　ギリシヤ人の協同せし機會の二三を擧げよ

答　ギリシヤ人は、割據したりしかど、各協同して、事をなすの機會を有せり。其の機會の重なるは、ドリアンの企てたる宗教同盟、デルフアイのアポロー祭、オリムピヤ祭等なりとす。乃ち多くは宗教上の同盟なりしなり。

五〇　ギリシヤ人の一國家を成立せざりし所以を問ふ

答　ギリシヤ人が、一の國家をなさゞりし所以は、全く各人種の割據して、互に角逐したるに在り。本來合同の機會を有たざりしにはあらざりしかど、そは只宗教上の同盟にして、一邦は特有の政治軍備を行ひたるか故に、ギリシヤといふ一國家は、發達せずして、幾多の小邦家組織せられたり。されど小邦家の分立は、必ずしもギリシヤ人といふ性質を消滅せしめたるものに非ず。否ギリシヤ人種性は、小國家の併立に拘らず、依然として變化するもあらざりき。

五一　ギリシヤの諸邦中最も有力なりしものを擧げよ

答　ギリシヤ中、頭角を擡げたる邦土をスパルタ及びアゼンスの二市とす。スパルタはドリアン人よりなり、アゼンスはアイオニアン人によりて成立せり。

五二　スパルタに於ける階級制度を問ふ

答　スパルタ政府は三段の階級を設けて人民を區別せり。スパルチアーテスとは、ドリアン正系の人民にして、一家族毎に國王より附與せられたる土地を有し、皆兵役の義務あるものとす。而して其の居住地は、市の中央部なりき。第二はペリオシといふ。ドリアンの南邊に營りて、或は盡力し、或は早く服從したるアケーア人よりなれり。此の階級は前者の外隣に居住し、農工牧畜を業とせり。第三はヘロツトと稱せられたる階級にして、こはドリアンに激しく抵抗したるものなり。彼等は全く奴隷として使役せられ、何等の權利をも有せざりき。

五三　ライカルガス法典の制定せられし所以並に其の梗概を略記せよ

答　ライカルガスなる人が、法典を制定したる所以を尋ぬるに、元來スパルタには、被征服者ありて、常にスパルチアーテに反抗し、動もすれば干戈を動かさむとしたるが故に、彼は、スパルチアーテス階級をして、強壯ならしめむを欲し、惰てこそ体力強壯を目的として、此の法典を編成したるなり。其の大要を言はむに、先づスパルチアーテスは、他の階級とは結婚すべからず。結婚には政府干渉して、強壯なる男女を選び、赤兒の生るゝや、政府の役員之れが体格を檢査して、若し虚弱なる者ならば、是れを山野に棄てしめたり。さて兒童の教育は、幼年より軍隊的にして、只管躰力の強健ならむを勉めたり。されば女子の責任は強壯なる兒を産むといふに歸着せり。要するに此の法典の目的は、如何なる艱難困苦に遭遇するも、決して屈せざる人物を養成するに在りし

なり。

五四　スパルタの政躰を問ふ

答（一）スパルタには二人の王ありき、共に異姓より選出せられ、戰時には元帥となり、元老院及び民會には議長となり、且つ神事を司れり。此の異姓より選出せし所以は、一人の王の專横を防がむ爲なり。

（二）元老院（ゲルーシア）は六十才以上の者二十八人より成る。終身其の職にあるものにして、國家の大事は、何事を問はず是れを議し、また高等法院をも成立し得たり。

（三）民會（エクレーシア）なるものあり。第一階級は悉く是れに出席するの權利あり。開會日は毎月滿月の日と定め、宣戰媾和、條約締結、法案等に關する事柄を議せり。但し議場は野原を用ひたるものにて、建物もなく坐席もあらざりき。

（四）監督官（エフオールス）なるものあり。五名より成り、毎年民會より選出す。市中の紛議を鎭定するが役目なりしかど、後には權力を增長して、國王をすら束縛するに至れり。

五五　スパルタの勢力增進の次第を記述せよ

答　國力の增進を目的としたるが故に、武威大に輝き紀元前六六八年を以て、メツセニ

アを降し、全六〇〇年アカーヂアを降し、アルゴスの勢力を挫き、遂にペロポンチサス半島に於ける最大强國となり、諸邦皆な長服して、霸者（ヘゲモニー）と仰ぐに至れり。斯くの如く武威を伸張すると共に、小亞細亞附近に遠征を企て、或はコリンス地狹を越えて、兵力を用ゐしかば、遂にアゼンスと永久の不和を生ずるに至れり。これを紀元前五〇〇年頃の狀態とす。

五六　アーコンとは何ぞや

答　アーコンとはアゼンス市の統領の官名なりしが、ドリアン人の南遷するに當りて、時の王ゴルドス力戰して、之を防ぎ、漸く國家の安寧を得たりしかど、其の身は戰場に身退りけれぱ、人民は是れより王政を廢して、一人の統領を選び、彼れに政治の權を委れたり。これをアーコンといふ。

（イ）アーコンの變遷を問ふ

アーコンの職は、始めは終身官にして、ゴルドス王家より選出せられけるが、後には年限を十年に定め、更に轉じて一時に九人のアーコンを置き、任期を一年と定めたり。

五七　ドラコーとは何人ぞ

答　ドラコーはアーコンの一人なり。彼れは下民を壓迫せんがために、苛酷なる法律を布けるか故に、其の名高し。按ずるにアゼンスは、貴族政治を行ひたるが故に、下民の不平、常に絶ねざりしなり。アーコンの職の如き、恒に貴族の占領する所となり、貴族は私利を恣にして、下民を虐待せり。下民の怨遂に爆裂して、上下の紛議容易に解けざりき。然るにドラコーは、紀元前六二一年を以て、アーコンの官に就き、直に下民を鎮壓せむと欲して、苛酷なる法令を發布しき。されば人民の憤怒、いよ〳〵激しく、國内騒然として、外敵を禦ぐの余裕あらざりき。故にサラミス島の如きも、メガラ人の占領する所とはなりね。

五八　ソロンとは如何なる人ぞ

答　ドラコーの苛酷なる政畧によりて、アゼンスが屈辱を蒙れる時に當りて、勇を奮つて、これを雪ぎたるをソロンとす。彼れはゴルドス王の後裔にして、紀元前五九四年、選ばれて統領の職に上りね。功により、直に國人の尊敬する所となり、彼れは元來富貴に生れたれど、恒に貧民に同情を表したれば、今や彼れ等の窮狀を救はむとを圖り、先づ其の因つて起る所以を觀察して、貸借法の宜しからざるを知り直に此れを改正し、大に貧民の便宜を計りね。

五九　ソロンが改正せる貸借法の大要を問ふ

答　ソロンが改正せる貸借法によれば、借主及び其の家族の身体を低當とするを許さず又利子の割合を減じ、貸債のために外國に遁れたるものゝ歸國を自由にし、且つ貨幣の標準を改めて、新貨幣は、舊の七割三分とし、これを以て貸債を償はしめたり。

六〇　ソロンの定めたる財産政治の大要を問ふ

答　ソロンは統領に再選せられたり。而して此の時、アゼンスの憲法を一變して財産政治となせり。その組織に依れば、所有せる土地によりて人民を四階級に區別せり。初めの三種の階級は、重裝兵となり、内第一階級は船舶を備ふるの任務を有す。又第四階級は輕裝兵或は水夫となるの義務あり。次に其權利は、第一階級よりは高等官を出し得べく、第二第三亦相當に參政權を有せり。ひとり第四階級のみは、參政の權利を有せざりき。

六一　ソロンの定めたる政府組織の概畧を記せ

答　ソロンの定めたる政府の組織は大要次の如し。

(一) 民會より九人の統領を選出す。その内一人は總督、他の一人は最高等の僧侶、更に一人は軍務を司るものにして、他の六人は判官たり。

(二) 三十才以上の議員四百名を以て議政院を組織す。議員の任期は一年にして、その職務は民會に提出する議案を作り、或は政府の財政を監督す。第一第二及び第三階級の者出席す。

(三) 民會は議政院の提出せる議案を議し、宣戰媾和の權を有し、且つ統領を選出することを得。第一及び第二の階級の人のみ出席することを得。

(四) 元老院は人民の生命財産を保護し、且つ法律の勵行を務む。

六二 ソロン隱退後のアゼンス政界は如何

答 ソロンは、改革案を立てゝ後は、アゼンスを去れり。その改革の目的は、貴族政治を一掃するにありしかど、當時の富者は、即ち貴族なりしかば、表面こそ財産政治なれ、内實は依然、貴族政治なりき。されば其の改革案は遂に社會の異分子を調和するの力なく、彼れの隱退後は、幾許もなく三政黨の軋轢を生ずるに至りぬ。

六三 アゼンスの三政黨の軋轢を問ふ

答 アゼンスの政黨とは、海岸黨、平野黨、及び在岳黨の三をいふ。海岸黨とは、專に

海岸に住居する人々の團結にして、その是れを結びし原因は、貿易事業によりて富貴なる身となれるにも拘らず、第一の階級に編入せられざるを怨みたるにあり。平野黨とは貴族の團躰にして、多く平野に住居したるが故に此の名あり。彼れ等はソロンの改革案に反對して、舊制度を恢復せんことを目的とせり。在岳黨とは、重にアッチカ山岳地方に住居したる貧民より組織せられ、飽く迄も新制度を勵行して貴族の權力を剝奪せむことを目的とせり。

六四 ピシストラートスとは何人ぞや

答 ピシストラートスは、アゼンスの在岳黨の首領なりき。彼れ其の手腕を善つて、縱横に戰ひしかば、政敵たる平野黨、及び海岸黨共に屈服しぬ。是に於いてか、彼は二政黨の首領を國外に放逐し、自ら立つてアゼンス國王となり、紀元前五四一年より、仝五二七年に至るまで、いと平穩に國内を治めたり。彼れは海軍を擴張し、水道を設計し、道路を開き專ら國威の伸張を計り、且つホーマーの詩を編纂したるなど、大に文藝の進歩に貢獻する所多かりき。其の畢生の目的は、希臘全土を糾合し、アゼンスを以て其の覇者たらしめむと言ふにありき。

六五　ピッピアスとは何人ぞ

答　ヒッピアスは、ピシストラートスの子なり。父に次ぎて王位に上りしかど、その性質は、父なるピシストラートスとは正反對にて、壓制無道の政治を行ひしかば、遂に國人の怒を招き、逐はれて、波斯に走り、時の波斯王ダリアスに哀を請べり。後ち波斯軍一方の將として、本國希臘を攻め、戰敗れて波斯にも歸り得ずして身退りぬ。

六六　クリステネスの事蹟を問ふ

答　紀元前五一〇年を以て、アゼンス人は暴君ヒッピアスを國外に放逐せり。此の時、代つて政權を握れるは、クリステネスなりとす。彼はソロンの改革案を採用し、更に之れを改良して、平民主義を造りぬ。先づ國内を十部に分ち。其の一部より五十人の議員を選出せしめて議政院を組織せり。又別にオストラキズモスと呼べる治安の方法を設けたり。こは國家の安寧に妨害なりと認めたる人物あるときは、人民をして其の人名を投票せしめ、若し其數六千以上に達すれば、其の人物を十年間の期限を以て國外に放逐する方法あり。

六七　スパルタ及びアゼンスの政躰及び人民の氣風の

の差別如何

答　スパルタは君主政治を以て進み、アゼンスは民主政治を以て進めり。スパルタは武斷的氣風を以て優り、アゼンスは智識の運用を以て優る。因に言ふ當時の希臘には此れ等政躰の外に、貴族政治、寡人政治、衆民政治等が、諸邦に發生せり。

六八　マラソンの戰を問ふ

第四十問より、是に至るまでは、波斯戰爭の生起する以前の希臘史なり。こは波斯戰爭及び其の以後に於ける希臘史を知るに必要なれば、特に記載せるなり。されば第六十八問以下數問は世界歴史の一大事件、否、東西兩文明の一大衝突たる波斯戰爭にして、第三十七問に接續すと知るべし。

答　ダリアス王は、希臘の一部が、懲からざる助力を與へたるを憤り、希臘を征服せむとて、其の女の婿マルドニアスを將として、紀元前四九二年大軍を派遣したれども、颶風に遇ひて、全軍空しく歸國しければ、愈よ怒りて、使を希臘諸邦に送り、巧に降服せしめむとを謀りぬ。去れど其の術策に陷る者あらざりしかば、紀元前四九〇年を以て、大軍を派遣したり。此の時アゼンスには勇將ミリチアデスありて、小數の兵を率ゐて、マラソンの野に、波斯の大軍を破りぬ。時に仝年九月十二

日とす、波斯軍は大敗して、國に歸りぬ。

六九 セミストクリスとは何人ぞや

答 マラソンの大戰に大功ありしミリチアデスは、其の後パロス島を伐つて功なかりしかば、遂に國民の信用を失ひて科料を徵收せられ、幾許もなくして身退りぬ。彼れに次ぎてアゼンスに勢力を握りたるは、セミストクリス及びアリスチデスの兩人とす。前者は海軍擴張を主張し、後者は陸軍擴張を主張して、意見相衝突せしかば、民會は國民を して、兩人の是非を投票せしめたり。其の結果、アリスチデスを非とする者多數なりしかば、彼れは國外に放逐せられ、セミストクリスは、自由に海軍の擴張を實行したり。これ實にサラミスの大海戰に、アゼンスの英名を轟かしめたる所以なりき。

七〇 サラミスの大海戰を略記せよ

答 波斯王ゞリアスは、一たび希臘に破られてより、憤怨に堪へず、再擧を計りたれど果さずして身退り、其の子セルクセス王、父王の意を次ぎて、紀元前四八〇年、大軍を率ゐて、希臘に侵入せり。勢强くして沿道のトラケ、マセドニア等皆降服したれども、ひとりアゼンスとスパルタとは、同盟して波斯軍に當りぬ。スパルタ王レオニダスは、嶮に依つて戰ひしかど、不幸にして戰死し、波斯軍は勝に乘じてアゼンスに攻め入りぬ。アゼンス軍は、サラミスに退きて、玆にて一大海戰を開きぬ。此の時波斯軍は、大勢のため却て進退の度を失ひ、大敗してセルクセスは國に歸りぬ。アゼンス艦隊を率ゐたるはセミストクリスなりき。

七一 波斯戰爭中の三大戰爭の名を擧げよ

答 セルクセスは大敗して歸國し、後事をマルドニアなる一將に託せり。マルドニアはサラミス大海戰の翌年を以て、アゼンスを衝かむとして却てスパルタ軍のためプラテヤに敗られたり。又同年小亞細亞のミカーレ岬に碇泊せし波斯艦隊は、希臘軍に襲はれて大敗せり。プラテヤ、ミカーレの二大戰に、サラミス海戰を加へて、波斯戰爭中の三大戰とす。これ此の三大戰爭を以て、波斯の大軍を擊退したるが故なり。

七二 デロス同盟とは何ぞや

答 波斯戰爭に當りて、希臘諸邦中、尤も功ありしはアゼンスなりしかば、諸邦は自然に彼れが旗下に集りぬ。アリスチデスは大に國事に盡し、遂にデロス同盟を作つて、アゼンスを以て盟主となせり。これアゼンスを中心として外敵に當らむとする同盟なり。此の頃よりミリチアデスの子シモンなる者、アゼンス海軍に將として功を樹てり。

七三　希臘及波斯の媾和條約の大要を問ふ

答 シモン海將の功により、希臘は大勝利を占めて、遂に波斯の鋭氣を挫きたり。兩國の媾和條約の大要は次の如し。先づ地中海上に分割線を劃して、波斯は其れより西方に進まざるも、又小亞細亞沿岸の希臘殖民地は、皆獨立すべく、波斯人は海岸より騎馬三日路程の距里以内に入らざるべしと約しぬ。時に紀元前四四九年なり。

七四　アゼンス隆盛の原因を問ふ

答 波斯戰爭に功ありしは、アゼンス及びスパルタの二市なりしが、就中アゼンスの海軍力は、勝利の原因なりしが故に、諸邦皆なアゼンスに從ひ、デロス同盟に加はるに至つて、アゼンスの威名は、スパルタよりも大なれり。

アリスチデス逝きて後は、セミストクリス、ひとり權を專らにせしが、たま〳〵國人の感情を害したるため、國外に放逐せられ、代つてシモン現れたり。されどシモン亦信用を失ひて紀元前四五九年、國外に追はれたり。

七五　波斯戰爭がアゼンスの制度に及し、影響如何

答 アゼンスにては、昔より貴族平民の軋轢ありしが、幸に波斯戰爭のために、內訌の

聲は一時絶えたり。然れども其の大戰爭、殊にサラミスの海戰にて、尤も多くの力を盡したるものは、下級民なる海兵なりしかば、戰後には、自然の勢として下級民を優待せざる可らず。されバアリスチデスは、戰後には、アゼンス人は何人と雖も高等官或は議政院議員となるの權利ありと改正せり。これより貴族の勢力更に衰退したり。

七六　ペリクルス時代のアゼンスを略記せよ

答 シモンのアゼンスを去るや（紀元前四五九年）大政治家ペリクルス頭角を現せり。彼れは其の年より四二九年に至るまで、アゼンスの政權を握りぬ。此の間たる全市の極盛期にして、文學技藝大に興り、軍艦大に增加し、長城も築かれたり。ペリクルスの目的たる、單に盟主たるに甘んぜず、希臘全土を糾合して、アゼンス大帝國を作らむといふに在りき。それ斯くの如くアゼンスは、繁榮を極め、且つ四隣に威を振ひしかば、諸邦の怨を買ひ、遂にスパルタと干戈を交ふるに至りぬ。これをペロポンヂサス戰爭とす。

ペリクルスはアゼンス市の門閥家なりき。哲士アナクサゴラスに從つて學業を修めたれば、政治上の智は言はずもあれ、文藝の嗜好をも有したり。ペロポンヂサス戰爭の起るや、海軍を率ゐて、スパルタ軍に當りしが、半途にして惡疫に感染して身退りぬ、時に紀元前四二九年なり。

七七　ペロポンヂサス戦争の原因を問ふ

答　アゼンスが波斯戦争の功を誇りて、専横を極むるを憤り居たるスパルタは、一の近因より、アゼンスと干戈を交ふるに至りぬ。其の濫觴を探るにペロポンヂサス半島の北端に、コリンス府の殖民地たるコルキラ人は貿易を業とせしかば財力に富み、此の頃は殆ど獨立の位地を占め、むしろ本國と力を爭はむとせり。茲に紀元前四三六年の頃よりコルキラに貴族と平民との爭あるに乘じて、コリンスはコルキラに貴族を援けむとを約しぬ。是に於いてかコルキラも、共に使を馳せてアゼンスに援を請へり。然るにアゼンス人は、ペリクルスの言に依りて、コリンスを援けむとを約しければ、コルキラ人は去つてスパルタに援を請へり。スパルタ直に立つて、之れに應じ、愈よアゼンスと雌雄を決するに至れり（紀元前四三一年）

七八　ニキアスの條約とは何ぞや

答　此の大戦爭は紀元前四三一年を以て始まれり。半島の大半はスパルタに左祖し、多島海の諸島及び小亞細亞沿岸のギリシヤ人は、多くアゼンスに同盟したり。ペリクルスはスパルタ陸軍の強勢なるを知り、海軍を以て、彼れに當りぬ。去れど彼れの死するや、内訌生じて、軍勢大に衰へたり。かくて紀元前四二一年に至りて、アゼンスの資產家ニキアス、政權を握るに至つて、五十年の休戦を約してスパルタと和を結べり。是れをニキアスの條約といふ。

七九　アゼンスの衰退せし顛末を問ふ

答　ニキアスの條約によりて、ペロポンヂサス戦爭は、一たび局を結びたれども、幾許もなく、アゼンス及びスパルタは、再び干戈を交ひ、遂にアゼンスの衰退を見るに至りぬ。今其の顛末を語らむに、紀元前四一五年に、シシリー島のシラキユーズ叛を圖りしかば、アゼンスは兵を派して、これを鎭壓せむとせり。然るにスパルタは却て叛徒に聲援を與へしかば、戰闘は遂にアゼンスとスパルタとの間に開かれたり。アゼンスの海軍はシラキユーズに於いて大敗し、剩へ同盟國にして叛を企つるもの多かりしかば、威勢頓に衰へき。仝四一一年に至りて、曾て國外に在りしアルキビアデス、歸國して海軍を率ゐ、大にスパルタと戰はむとを計りたれど、波斯國はスパルタと同盟し、スパルタの驍將ライサンドロス、大軍に將として仝四〇七年、ノチウムにてアルキビアデスの軍を破り、次でエーゴスポタモスにてアゼンスの艦隊を破壞し、仝四〇四年を以て、アゼンス市を圍みぬ。アゼンス人力戰したれども、食糧盡きて、遂に降服せり。此の時の誓によりて、デロス同盟を解き、セレウスの長堅長城を毀ち、艦隊を十二隻とせり。吁一朝にして此の悲境に陷る。誰か同情の涙なからむ。

八〇 衰退後のアゼンス政府の變遷を問ふ

答 ペロポン子サス戰爭に因りて、國勢頓に衰へたるアゼンスは、ペロポン子サス同盟の一邦さまで零落し、從來の政府を改めて、貴族政治を作り、三十人の執政官を置けり。此の三十執政官は、スパルタ政府の保護の下に在りたれど、擅に權を弄して、私利を逞うせしかば、世人稱して僭主と云へり。されど斯くの如き執政官は、いつまでか全かるべき。幾許もなくして十人の穩和なる貴族之れに代つて、國政を司りぬ。其の後スパルタ政府の媒介によりて、貴族平民和解し、紀元前四〇三年を以て、再び共和政治を立てたり。されど昔日の繁榮は、其の俤だにもなく、やがて歴山大王の馬蹄に蹂躙せられたり。

アゼンス隆盛の年代は紀元前四五〇年頃より全四〇四年迄とす。其の間の重なる人物はアリスチデス、セミストクレス、ペリクルス、シモン、ニキアス、アルキビアデス等なり。

八一 アゼンスに代つて希臘の覇權を握りし邦は如何且つ其の隆盛期を問ふ

答 アゼンスに代つて、ギリシヤの覇者と仰がれしはスパルタなり。其の隆盛期は、紀元前四〇四年頃より（即ちアゼンス人降服の年）全三八七年のアンタルキダス條約に至る。其の以後さいへども、ギリシヤ諸邦中、最強國として仰がれたれど、實力は大に萎微したりき。

八二 クセノフオン退軍の顚末を問ふ

答 スパルタの勢力を握りしころ、波斯に王位承繼の爭ありき。ダリアス二世死して、其の長子アルタクセルクセス王位を闘ぐや、弟キルスこれを奪はむとて兵を擧げ、スパルタは大軍を送つて、キルスを援けたり。然るに紀元前四〇一年クナクサの戰に於いてキルス死し、スパルタ軍亦利あらざりしかば、クセノフオンを將として、一萬余の兵、小亞細亞より引退せり。これを史上有名なるクセノフオンの退軍とす。

(イ) クセノフオンとは何人ぞ

クセノフオンはソクラテス㊙門弟にして、文學に長せり。退軍の模樣は、彼れが筆によりて、今日に傳へられたり。

八三 アンタルキダス條約とは何ぞや

答 スパルタと波斯と干戈を交ひ、スパルタ軍の引退したる後、波斯軍は、小亞細亞に於けるギリシヤ殖民地を攻めり。スパルタ人大に怒り、援兵を送らむとしたれども、此

の時既にスパルタを悪めるギリシャ諸邦ありて、セベス、ポエチア、コリンス、アゼンス等、窃かに同盟を結びて、スパルタに當りぬ。次で有名なるライサンドロス將軍死せしかば、さなきだに戰爭に疲れたるスパルタは、愈よ疲弊して、遂に波斯と和議を結び、小亞細亞殖民地、サイプラス、其の他一島を波斯に讓り、且つ希臘の諸邦は、皆自治獨立たるべしとの條項を約せり。これをアンタルキダス條約といふ(紀元前三八七年)

八四 スパルタとセベスとの爭鬪の濫觴を問ふ

答 アンタルキダス條約によりて、ギリシャ諸邦は自治獨立たるべく、且つ同盟を結ぶを能はざるに至りぬ。さてスパルタは、たとひ衰へたりとも、第一の强者たるを失はざりしかば、常に四隣を窺ひて、苟しくも此の條項に違背するものあれば、直に兵を送りて之れを責めたり。紀元前三八三年に至りて、コリンス此の約に背きしかば、スパルタ軍、直に此の邦に遊ひ、其の途次セベスの貴族と結托して、セベス本城を襲ひ、これを陷れて、己が管下に置きぬ。去れど此の頃のセベスは、既に實力を養成したる後なれば、此の暴行を怨みて、更に奮發し、遂にスパルタの鋭鋒を挫くに至りぬ。

八五 エパミノンダスとは何人ぞ

答 セベス市は、スパルタの爲に、非常なる恥辱を蒙りたりと雖も、紀元前三七九年に

至りて、其の民主黨、蜂起して、スパルタ人を國外に放逐せり。是に於いてか、スパルタ及びセベスの二市は、干戈を交ふるに至りぬ。此の時に當りて、セベスにはペロピダス及びエパミノンダスの二名將ありて、よく國威を伸張したり。殊にエパミノンダスは、古來稀なる智勇兼備の名將にして、先づボエチアを味方とし、スパルタの兵に當りぬ。アゼンス亦セベスに左祖し、皆スパルタに當りしかば、スパルタは大に窮し、紀元前三七一年の頃には、僅に命脈を保ち得たるのみなりき。此の年エパミノンダスは、ペロポンヂサス半島に入り、ラコニアの南部までを席卷し、勢破竹の如くなりき。斯くの如くセベスの勢力、日に旺盛なるに至りては、アゼンス漸く之れを妬み、相敵視するに至れり。かくて紀元前三六四年を以てペロピダス逝き、仝三六二年を以て、エパミノンダス逝くや、セベスの勢力、遽かに衰退したり。されど此の頃はスパルタも、アゼンスも共に衰退したりしかば、敢てギリシャ全土の覇者たる者あらざりき。即ち各自獨立して、僅に國境を守るのみなりき。此の時に當つて一大威力を以て現れたるを、マセドニア帝國となす。

エパミノンダスはセベスの名將なりき。その先はボエチアの王なりきといふ。セベス市のスパルタのために屈辱を蒙るや、蜂起してスパルタ軍を破つて、國辱をすゝげりー たび國民の信用を失ひたれど、元來君子の性ありければ、幾許もなく國民の用ふる所となり、爾來軍制を改良して、大に勉むる所ありき。かくてセツサリーに大勝

を得、更にエポチア人を助けて、アンチ子アに戰ふや、不幸にして重傷を蒙りぬ。然れども、我が軍の勝利を得たるを見て「ボエチアは勝てり」と大呼して瞑目したり。時に紀元前三六二年なりき。年四十八。彼れは其の一生に一たびも僞言を用ひしことなく、常に誠實を以て旨させりとか。げに希臘史のみならず、古今の史に通じて稀に見る所の名將なり。

八六　神聖戰爭とは何ぞや

答 紀元前三五五年頃に當りて、フオキア人、デルフアイの社領地を襲ひて、暴を逞うしぬ。此の時セベス其他の諸邦聯合して、フオキア人に當りしかど、彼れ等克く戰ひて聯合軍を苦め、進んでセッサリー人、救をマセドニア王フヒリップに求めき。フヒリップ即ち起つて、一擊の下にフオキア人を退け、これより宗教聯合に加盟し、推されて其の長者とはなりぬ。此れを神聖戰爭と稱し、其の局を結びたるは紀元前三四六年とす。

(イ) アセドニア帝國勃興の由來を問ふ。

マセドニア帝國は、元來ギリシヤ史上に出づる所あらざりしが、其代々の王は、ヘラス人なりと稱し、盛にギリシヤの文明を輸入し、只管附近の蠻族の侵入を防ぎ居たりしが、フヒリップ王の即位するに及びて、エパミノンダスが制定せるセベスの

軍制に倣ひて、大に兵力を養ひ、機に乘じて、ギリシヤ諸邦の中に頭角を露すに至りぬ。偶々フオキア人の來襲あるに際して、日頃鍛練せる兵力を以て勇を現はし、一擧してギリシヤ全土に威を振はむとを望めりぬ。

八七　ギリシヤに於けるフヒリップ王の事業を問ふ

答 神聖戰爭以來、勢力を振ひたるマセドニア王フヒリップは、ギリシヤ全土の覇者たらむとの野心を禁ずる能はざりき。此の時、其の野心を看破したるはアゼンスの雄辯家デモスセ子スなりき。彼れは得意の辯舌を以てフヒリップを斥けしかど、アゼンス人はフヒリップの賄に心を奪はれて、何等の警戒をも加へざりき。其の後再びデモスセ子の警告あるに因りて、アゼンス人はセベス人と同盟して、アセドニアに當りぬ。されど、フヒリップは直にコリンスに諸邦の公使を召集し、事あるの時は、全國兵を派遣すべきを約さしめ、纔て一大同盟軍を編成して、波斯に進軍せり。然るに途中其すに至りぬ。フヒリップは直にコリンスに諸邦の公使を召集し、事あるの時は、全國兵の家臣のため弑せられて目的を果さざりき。時に紀元前三三六年とす。

(イ) デモスセ子スとは何人ぞや

デモスセ子スはギリシヤの雄辯家なり。幼にして父を失ひ、長じて辯舌を練り、尚ほプラトーの門に入つて、哲理を究めき。その辯舌を練るや、或は溪谷に向ひ、或は

波浪に對して、生來の訥辯低音を治し、或は利劍を傍に置きて姿勢を正したるなど、種々の方法によりて、當時第一流の辯者とはなりぬ。時しもマセドニアのフヒリツプ大野心を以て、ギリシヤに向ひしかば、彼れは得意の雄辯を以て、フヒリツプを排斥しぎ。其の演說集は「フヒリツピックス」と稱して、後世の學者の貴ぶ所なり。其の後ケーロニアの戰に名聲を失ひたれど、巧に辯舌を弄して名聲を繕ぎ、アレキサンダー大王の時には、ギリシヤ全土を同盟せしめて、却て名聲を墜したれど、再び信用を得て、亦もや盛に歴山王を攻撃したり。されど大王の沒後、大王の將軍のために追はれて、カラウリアに遁れ、茲に窮迫して毒を仰ぎて身退りぬ（紀元前三八四年生—仝三二二年歿）

八八　歴山大王の事業を略記せよ

答　稀世の英勇アレキサンダー大王は、父王に繼いでマセドニア王位に上り、直にギリシヤ全土を征服し、紀元前三三四年、三萬五千の大兵を率ゐて、ヘレスポント海峽を渡りて、小亞細亞に進み、波斯軍を破り、轉じて埃及を平定して、アレキサンドリア府を開き、還つて波斯を征服し、破竹の勢を以て印度インダス河畔よりヒフアシス河迄を侵略しぬ。大王は陸地の有らむ限りを征服せむとしたれども、此の時將士皆な遠征に倦みたれば、三二四年歸りてザーザに到り、仝迄征服せる土地を合せて一大帝國となし、

ピロニアを以て其の首府と定めたり。然るに其の基礎未だ全く固定せざるに、大王は他界の人となりぬ。時に紀元前三二三年、齡僅に三十二なりき。

八九　歴山大王の政略及び其の事業の結果如何

答　西洋史上、始めて一大合同を企てたるは、アレキサンダー大王なりとす。其の政策を見るに、到る處に首府を開き、征服地には其の宗教を奉ずるを許し、且つ各國間の交通並に親和を厚からしめむために、仝等の權力を與へ、結婚を奬勵し、自ら波斯王の女を皇后とし、將士にも異國の良家の女を娶らしめたり。加之、道路を開き、ギリシヤの文明を輸入し、勉めて帝國文化の一致せむことを圖りぬ。されば此の一大事業によりて東西の文明か、交換せられたるは言ふも愚かなり。且つ幾多の都會興つて、各文化を進めたり。埃及のアレキサンドリア、シリアのアンチオーク等是なり。要するに大王の目的は、東方にギリシヤ文明を普及せむといふにありしなり。而して其の目的は達せられると共に、東方文明はギリシヤに流入するを得たり。

九〇　歴山大王死後の帝國の變遷を問ふ

答　大帝國の基礎未だ固定せざりしかば、歴山帝の死後は、四分五裂の狀態を呈し、諸將は權力を爭へり。左に其の分裂せる王國の重なるものを擧げむ。

(一)マセドニア。將軍アンチゴナスの子デメトリアスの領地たりしが、一たび是れを失ひ、其の後其の子アンヂゴナスゴナートスに至つて、再び其の家の有となりしかど、紀元前一四九年に至つて羅馬の有に歸せり。

(二)シリア。セリユーコス將軍の子孫此の地に王となれり。商業は大に發達したりしかど、統治者無能なりしかば、勢力振はず、遂に紀元前六四年を以て、羅馬の將ポムペイの亡ぼす所となれり。

(三)埃及。プトレミオス家の支配する所となれり。一時は學問及び、貿易の中心となりしかど、財寶集ると共に國民奢侈に流れ、紀元前三一年、クレオパトラ女王の世に、羅馬のオーガスタスの爲に征服せられたり。

九一 ギリシヤ末世の諸邦の狀態を問ふ

答 アレキサンダー大王の訃音傳はるや、ギリシヤ人は其の束縛を脫せむとを企てき。アセンス人は、先づデモステネスを推して首領となし、兵を擧げたれど、却てマセドニアのために破れて、首領は自殺せり。此の他の諸邦に至りては、皆微々として振はず、加ふるに外敵の侵入ありしかば、諸邦互に同盟を結びて、邦家の安全を計らむとせり。其の大なる同盟を、アカイア及びエートリアの二となす。前者はマセドニアの侵入を防かむとするもの、後者はコリンス灣の北岸の防備を目的とせり。然るに紀元前二四〇年

に至りて、スパルタ王クレオメネス、經營大に勉め國威の伸張を謀らむとて、先づアカイヤと隙を生ぜり。アカイヤは援をマセドニアに求め、マセドニアは大兵を送つて、スパルタを伐てり、クレオメネス力戰したれども、遂に敵するを能はずして、再び銷沈するの已むを得ざるに至りぬ。これより諸邦の勢力、日々に衰退し、再び世界上の問題たるを能はざりき。而して此の頃既にローマ人の勢力大に揚り、歷史は漸く移つて、伊太利の地に至らむとす。

九二 ギリシヤ文明の進歩せし原因を問ふ

答 ギリシヤは歐洲文明の淵源として敬はる。實に今日の科學哲學美術等より百般の文華に至るまで一として其の源を此の國に發せざるは莫し。今此の國に於いて斯の如く文明の進歩したる原因を考究するに、(第一)奴隸制の行はれたるが故に、其の主人たる者は、多くの日間を有し、常に市場にいでゝ知識の交換をなし得たるも。(第二)諸邦互に角逐し、殊に宗教聯合會に於いて、文事を奬勵したるも。(第三)宗教のために思想の自由を束縛せられざりしも。(第四)外國との交通繁多なりしがため、自然に他國の文物を研究し其の長を採りて、吾れの短を補ひたるも。以上四大原因の外に尙多々あるべしと雖も、要は此れ等にて足れり。

九三　希臘の學術技藝の發達を畧記せよ

答　ギリシヤの學術技藝は、大なる發達を成して、今日に於いてすらも、其の價値を失はざる者あり。今左に其の重なる方面を略記すべし。

哲學は此の國に生じたり。紀元前七世紀頃ミレトスの人、タレスより學說起り、ソフヒスト一派の懷疑說に至り、ソクラテス出でゝ學風を一變せしめ、其の弟子プラトー（紀元前四二九——同三四九年）大名を揚げ、次いでアリストートル（紀元前三八五年——同三二二年）出でたり。彼れは論理學、修辭學、政治學、其の他一切の科學の祖として敬はる。次いではエピキユラスの快樂說、ストア派の道德說相對して學界を支配し、轉々して羅馬の世界に移れり。

ギリシヤにて殊に發達したるは文學とす。古くはホーマーの二大敍事詩あり。其の高雅秀美なる、近世に至るまでも光彩を放てり。次ではヘシオッドありてギリシヤ神話を詩に詠ぜり。これより後にはサッフオー、アナクレオン、シモニデス、ピンダー等の抒情詩人出で、悲劇には、エースキラス（紀元前五二五年——同四五六年）ソフオクレス（紀元前四九五年——同四〇六年）ユーリピダス（同四八〇年——同四〇六年）の三大作者あり。又喜劇にはアリストフアネス（同四五三年——同三八八年）あり。

歷史には、その祖と稱せらるゝヘロドタス（紀元前四八四年——同四二〇年）あり。波

斯戰史九卷を著はせり。次ではスシヂデス（同四七一年——同四〇〇年）出でゝ、ペロポンネサス戰史を物しぬ。クセノフオン（同四四五年——同三五五年）なる名家もあり。

小亞細亞遠征に關する著述あり。

アレキサンドリア府の文化大に進み、大學、圖書館の設置あり。詩人にはオクリタス、幾何學者にはユークリッド、天文學者にはプトレミー、地理學者にはストラボン、歷史家にはプルターク等出でき。

美術亦大に開け、彫刻殊に秀でたり。その建築には、ドリック、イオニアン、コリンスの三式ありき、ドリック式尤も質素にして、コリンス式最も華麗を極む。フヒヂアス（紀元前四八八年——同四五二年）は尤も有名なる彫刻家なり。畫工にはポリグノータス（同四二〇年頃の人）あり。

以上をギリシヤ文化の重なる發達とす。

九四　ギリシヤの宗教を問ふ

答　同國民の宗教は、所謂神話にして、世界の太極如何を說明するものに非ず。其の神とは人間の如きものにして、高山、河川、森林などに住居すと傳へらる。而して諸神の集る所を、セツサリーのオリムプス山とす。諸神中最大なるをゼウスといふ。又ギリシヤ人は五年毎に諸神のために、一大祭を行ふ。初回は紀元前七七六年を以て開かれたり。

此の大祭には、全土の國民擧つて關係し、稚々の遊戯を演ぜり。實に此の大祭こそ全國民の結合にありては、尤も力ありしなり。

九五　太古伊太利に住居せし重なる民族を擧げよ

答 タイバー川の南方にはラテン人居り、其の東にはオスカン人居れり。ラテン人はギリシヤ人に似たり。オスカン人にはサビン人、アムブリア人等屬す。こはギリシヤ人と大に異る所あれど亦アリアンに屬するは明かなり。さて北方にはゴール人、其の南にはトラスカン人住居し、南方の海岸にはギリシヤの殖民地ありき。されば下伊太利の如きは、別名して大希臘（マグナグレシア）と呼ばる。

九六　伊太利の地勢を問ふ

答 伊太利の海岸には屈曲線少く、又附近に島嶼少かりしかば、航海の術は發達せざりき。之に加ふるに、國内山脈の走るを以て、國民が各所に國躰を造つて、相睥睨するとあらざりき。

九七　ローマ府の起源を問ふ

答 紀元前七五四年、ラテン人の一部が、タイバー川畔の一小丘パラチヌスに移住したるを以て、ローマ府の起源とす。

九八　ローマ人の王政を廢するに至りし顛末を問ふ

答 タイバー河畔に府を開きたるローマ人は、やがて同族の諸市及びサビン人のカピトリナス市を併呑したり。而して傳ふる所によれば、ラテン人及びサビン人より交代に國王を出したるが如し。然るにエトラスカン人勢力を握つて、遂にローマを破り、王を立てゝ國民を支配せり。而してラシアス、タルクイナスの時に至りて、暴逆を逞うせしかば、國民怒つて、王を國外に放逐せり。これより國民は國王なる者を厭うて遂に王政を廢せり。頃は紀元前五一〇年なりとす。

九九　ローマ人民の階級び其の權利の變遷を問ふ

答 ローマには古より人民を二階級に區別せり。一はプレビアンと呼ばる。そはローマ人に征服せられたる下層人民にして、只自由を有するのみにて、參政の權は、厘毫も有せざりき。他は上層社會にして、パトリシアンと呼ばる。こは貴族門閥家又は資産家を指したる名なり。彼れ等は元老院（セナート）及び姓會（コンミチア、クリアタ）を組織せり。前者は國王の顧問所にして、姓會は國王を推選する會議なり。然るに平民即ちプレビアンは、不平に絶えず、常に參政の權を得むことを企てければ、エトラスカン王朝

の時に當りて、隊會（コンミチア、センチユリタ）なる者起りぬ。こは財産の多寡によりて人民を百人宛の隊に分ちたるが故に此の名あり。而して宣戰媾和の權、立法權を有し、平時には死刑執行を判決せり。此の三大會議は王政の廢せられたる後と雖も依存せられたり。

一〇〇 コンサル及びヂクテートルの起源を問ふ

答 ローマ王政の廢せらるゝや、國民はコンサル二名を選びて國政を委ねたり。コンサルは執政官と譯すべし。さて其のコンサルは常に貴族の中より選ばれたるのみなれば平民は其の恩典に浴すること薄く、爲に上流社會を怨みたり。加之戰時には、武器は自辨なりしかば平民の負擔非常に重く、遂には貴族の補助を請ふに至りぬ。然るに若し負債を償はざるあれば、貸方の殘酷なる、直に借主を捕へて奴隷として使役せり。これ常に行はれたる所なりければ、平民の憤怒言はむ方なく、遂に紀元前四九四年の役には從軍することを峻拒せり。於是てか政府はヂクテートルの官を置きて、之れが處置をなさしめたり。ヂクテートルは最高等の權利を有し、其の職は只危急の場合にのみ設けらるゝものなり。此の時には其の働きに依りて、平民も漸く怒を鎭め、愛國心に驅られて戰場に進めり。

一〇一 護民官及び平民會議の起源を問ふ

答 ヂクテートルの慰藉になりて、戰に出でたる平民は、歸國して、大に羽翼を張らむとを望みけるが、豈計らむや、制度一さして新なるは莫く、自身等の階級は、依然として權利なきものなるを知れり。是に於いてか大に憤り、附近なるモンスサクル（聖山と譯す）に立て籠りて、最後の手段に及ばむとせり。貴族等大に驚き、元老院は腰を屈して、平民の負債を滅却し、奴隷を解放し、且つ二名の護民官（トリビユーン）を平民中より選出するを許可せり。護民官は平民の利益を圖るを以て目的とし、その任期を一年とせり。而してその役人を選定する必要より、平民會議（コンミチア、トリビユータ）なるもの組織せられき。

一〇二 ローマの十二銅表とは何人ぞや

答 ローマの平民は、聖山事件以來、大に勢力を得たれども、尙ほ甘んぜず、成文律を編して貴族の勢力を殺減せむとし、數回の爭議の後、十名の委員を選びて法典の編纂を託すること前後二回なりき。其の結果は、有名なる十二銅表なり。

一〇三 リキニウスとは何ぞや

答 十二銅表を以て、勢力を伸張したるローマ平民は、尙ほも勢力を增進せむとを謀り紀元前四四九年には、平民會議にて決議せるものは法律たるの資格あるか、貴族に承諾

せしめ、仝四一五年には貴族平民の結婚を自由ならしめき。次で仝三六七年、リキニウスなる人、護民官となるや、大に運動して、遂に平民中よりも執政官を選出するの權利ある事を貴族に承認せしめたり。而して翌年には、平民中より一人の執政官を選出するを得たり。於是か貴族平民の多年の軋轢、一先づ局を結べり。

一〇四 貴族平民の軋轢時代に羅馬が獨立を維持し得たるは何故ぞ。

答 貴族平民の軋轢は内訌なり。此の時に當りては國力の衰退するは當然なるに、而もローマが、獨立を全うしたるは、國民の氣風が、愛國心に富み、國家の爲めには、上下固く團結したるが故なり。

因に言ふ。エトラスカン人、オスカン人等は、内訌に乘じて、來襲したりしと雖も多くは却てローマの爲に破れたり。されど紀元前三九〇年頃には、北方のゴール人南下してローマを襲ひ、火を市中に放つて本城を圍みたれば、遠に剛毅なるローマ人も遂に莫大の償金を出して破滅の危難を免れたり。

然るに紀元前三六七年に至りてカミルスなるローマの大將、奮闘してゴール人を伊太利より放逐せり。かくてローマは昔日の如く繁榮し、而も其の功によりて、伊太利半島に於ける重鎭たるに至りぬ。これ貴族平民の軋轢、漸く局を結び、上下心を

一にして、國威の伸張を計りたるが故なり。

一〇五 貴族平民の和解よりピユーニック戰爭に至るまでローマ國力の伸張を略記せよ

答 貴族と平民とは和解して、愈よ伊太利全國の征服に着手せり。サムナイト人は强敵なりき。ローマ人は是の族と干戈を交ふること前後三回にして、漸く征服するを得たり。時に紀元前二九〇年。此の頃はローマは既に伊太利全國の覇者となり、號令を四方に下しぬ。さてローマ中央政府の其の屬國に對するや、或る國には干渉すること殿なりしが、多くは自治を許し、たゞ鑄幣、外交、宣戰、媾和の件のみは、政府にて司れり。當時伊太利の南端にはギリシヤ殖民地ありて、タレントムを首府として繁榮せり。ローマ人はサムナイトを征服したる後、勝に乘じてタレントムに逼ひ、之れを征めり。此の時歷山大王の血族なるエピルス王ピロス、兵を送りてタレントムを助けたり。されど紀元前二七五年に至りて、仝くローマの征服する所となれり。ピロス王は其の三年前に身退りぬ。斯くの如く伊太利を統一し終るや、ローマ人は進んで海外に驥足を延ばさむとせり。而して先づフエニシヤの殖民地なるカルセーヂと大戰爭を開くに至りぬ。

一〇六 紀元前三世紀頃に大勢力を有せし國々を問ふ

答 當時の世界にて、大勢力を握れる者を區別すれば、四箇あり。一は歴山大王の征略したる諸國、二は地中海沿岸に航海權を掌握したるカルセーヂ、第三はゴール人、第四は迅日の勢なるローマなりき。此の四勢力を比較するに、

智力に於いては歴山大王の敎化せる諸邦及びカルセーヂはゴール、ローマに優り、ゴールは更にローマよりも劣れり。政治上にては、カルセーヂは共和政治を以て、諸方に殖民地を設け、ギリシヤ諸邦は割據して獨立を維持せんとし、ゴールは族制政治にて未だ一國民たるの資格なく、獨りローマのみは、伊太利國内の諸邦に獨立の念を失はしめ、以て一大帝國を造らむとに汲々たりき。軍制上より見れば、ギリシヤ及びカルセーヂは傭兵を用ひ、ゴールは只一個人として強健なるのみにて、未だ軍隊として の勢力なく、只ローマのみは、軍隊の強健を嚴重に監督せり。

斯くの如く觀じ來れば、四大勢力の内、天下の大權を握るものは、ローマを措きて他に覓め難し。

一〇七 ピユーニック戰爭の濫觴を問ふ

答 ローマ人とカルセーヂ人とは、敵視せり。これ勢力の爭なり。然るに此の二勢力がはしなくも衝突して、史上有名なるピユーニック戰爭を起せり。今其の起源を尋ぬるに、マメルチン人のシーリー島内メツサナを取るや、同島内のシラキユーズ王フイロン之れ

を伐てり。マメルチン人は援をローマに請へり。ローマ人之れに應ずるやフイロン王はカルセーヂに助力を乞ひぬ。於是乎て兩國開戰し、重にシーリー島内にて戰へり。これを第一ピユーニック戰爭といひ、紀元前二六四年に始つて、仝二四一年に至つて局を結べり。此の戰にカルセーヂ軍利あらず、媾和條約により て、シーリー島に於ける其の殖民地及び其の附近の島嶼を割讓せり。さて此の新領土の加はりたるより、ローマのプロヴインス生ぜり。プロヴインスとは、伊太利以外に於けるローマの領土を指して云ふ名なり。

此の戰に功ありしローマの將をレグラス、カツラスの二將とす。尚ほ此の戰爭と同時にローマ人はゴール、キサルピナを伐てり。

一〇八 第二ピユーニック戰爭を畧記せよ

答 第一ピユーニック戰爭の時、カルセーヂの一將ハミルカーなる者、今の西班牙に遁れ、此の地を征服してカルセーヂ領となし、自ら其の支配者となりぬ。其の子ハンニバル繼ぐや、ローマの鋭氣を挫き、且つ第一ピユーニック戰爭の恥辱を雪がむと欲し、大軍を率ゐてイスパニアを發し、ゴールに入り、今のローン川を渡り、途々諸邦を征服し氷雪中にアルプス山を踰ゑて、直に伊太利の野に下り、轉戰勝利を得ざるなく、伊太利諸邦にて其の旗下に降りし者甚だ多かりき。此の時ローマは危急存亡の秋に迫りぬ。さ

れど勇將プブリアス、コルネリアス、スシピオなるもの、直にイスパニアを衝いて是れを陷れ、海を渡つてカルセーヂ本國を襲へり。カルセーヂ人大に驚き、急使を馳せてハンニバルを呼び返しめ。スシピオは之れをザーマに要撃して大勝を得たり。時に紀元前二〇二年、翌年を以て和議成れり。此の戰は紀元前二一八年を以て始る。

ザーマの戰に破れたるハンニバルは、微行してシリアに遁れ、次でビシニアに行き天涯淪落の客となり、遂に毒を仰いで自殺せり。吁、天下ローマに對する者、一人として無きの時に當り、獨力其の鋭鋒を挫き、武名を天下に轟かしたる將軍の末路洵に憐むべきなり。因に言ふ有史以來積雪を侵してアルプス山嶺を越えたるは、ハンニバル將軍の外にナポレオン一人あるのみ。

ザーマの大敗によりて、カルセーヂは、亞非利加以外に於ける領土すべてをローマに捧げ、且つ年々貢を納れ又ローマの同意なくしては、何れとも開戰せざるを約しぬ。これ事實上ローマの屬國となれるものなり。是に於いてか地中海沿岸の勢力は、アリアン種の手に歸し、セミチック種は、權勢を失へり。若し夫れカルセーヂにしてローマに勝たむか、史は今日とは全く異れる者となりしならむ。

一〇九 第二ピユーニック戰爭を畧記せよ

答 第二ピユーニック戰爭終へて五十年の後、カルセーヂに紛亂ありしかば、ローマは使節カトーを遣はして之れを治めしめたり。カトー歸國して斷然カルセーヂを征服するの必要を說きしかば、政府は紀元前一四九年を以て、大兵を派してカルセーヂを圍めり。カルセーヂ人は死力を盡して戰ひぬ。ローマ人は火を放ちぬ。死を決したる老若男女悉く猛火の內に果敢なき最後を遂げき。火の消えざること十餘七日間。國家滅亡の悲慘なる、これに及ぶもの有らざるべし。

一一〇 マセドニア戰爭の始末を問ふ

答 ハンニバル將軍が、カ子ーの大戰に於いて、羅馬軍に勝つや、其の名四方に轟き渡りぬ。當時ローマの勢威を惡みし者多かりしが、就中マセドニアは、之を嫌へり。されば其の王フヒリップ三世は、欵をハンニバルに通じぬ。是に於いかローマはマセドニアに向つて兵を派出しき。これ第一マセドニア戰爭にして、その局を結びたるは、紀元前二〇五年なり。

全二〇〇年に至つて第二マセドニア戰爭起れり。アイトリア、及びアカイヤの二同盟はローマ軍に加はり、フヒリップ三世は大敗を蒙りて、マセドニアは、ローマの版圖に加へられたり。全一二九年に至つてアイトリア同盟はローマに叛してシリア王アンチオクスと結托せり。然れども全一九一年に至つてローマに破られ、次いでゴール、シサルピナ等も亦、ローマの征服する所とはなれり。さて全一七一年に至つて、フヒリップ王の子

ペルセアス兵を擧げてローマと戰へり。これ第三マセドニア戰爭なり。然れども力盡きて遂にローマに降りぬ。更に第三ピューニック戰爭の時に當りて、マセドニアの一部は、機に乘じてローマに叛せり。ローマ直に兵を送つて是れを伐ち、マセドニアは茲に全く、ローマの領地とはなりぬ。時に紀元前一四九年なりき。斯くて後、アカイア破れ（一四六年）コリンス破れ（仝年）イスパニア破れ（一三三年）、ローマは東西に羽翼を伸張せりとされバアセンス及びスパルタの如き、名目上獨立を保ちたるのみなりき。

一一一　小亞細亞に於けるローマの勢力を問ふ

答　マセドニア及びギリシアを征服したる以後は、ローマの小亞細亞に向つて、驥足を延ばすこと甚だ容易となりぬ。シリア先づ滅び、ペルガモス尋で降服し（紀元前一三三年）小亞細亞はローマの天地とはなりぬ。

一一二　グラッカス兄弟の事蹟を問ふ

答　ローマが天下に號令を出すに至るや、國力大に進み、財力亦增加せり。然れども之れと共に貧富の懸隔を生じて、貧者は非常なる苦役を勉めたり。されば昔日の貴族平民の軋轢は、變じて貧富の衝突となり、紛議常に絕にざりき。此の時に當つて護民官となり、土地制限法を定めて、貧者の便利を計りたるを、ナベリアス、グラッカスとす。然れども富者の反對に逢うて刺殺せられたり。次で其の弟なるケーヤス、グラッカス護民官となり、兄の志を次ぎ、穀物廉賣法、武器貸與法等を定め且つ伊太利人にも、ローマ市民たるの權利を與へむことを圖りき。然るに是れ亦政府の嫌ふ所となりて、遂に自殺するの已むを得ざるに至りぬ。

ヂベリアスグラッカスの就職は紀元前一三三年。ケーヤスの就職は一二三年。

一一三　マリアスとは何人ぞ

答　貧富の軋轢盛なるの時に當りて、グラッカスに次いで、貧民黨の首領となれるは、マリアスなりとす。その頃亞非利加の一地方たるヌミヂアに內亂ありしかば、ローマは紀元前一〇九年を以てマリアスを將として兵を送り、マリアスは大功を樹てり。次で伊太利北方の貴族シムブリ及びチユートンの二族の勢力を防ぎしかば（仝一〇五年）マリアスの名は赫々たりき。是れより先きマリアスは執政官に選ばれ、大に貧民黨のために盡したれど、伊太利人及び貧民黨は、尙も權力を握らむと欲し、二たび內亂を生ぜり。紀元前九〇年及び仝八八年の社會戰爭これなり。

一一四　サラとは何人ぞ

答　サラはマリアスに對して富者の首領となれる名將なり。マリアスと共に伊太利北方

に蠻族を防ぎて大功ありき。會々西方亞細亞のホンダス王、兵を擧げて伊太利人に敵對し、且つ四隣を困めしかば、ローマ政府はサラを將として、是れを討たしめき。然るにマリアスは、サラの居らざるに乘じて、サラ黨を襲ひ、自ら終身のヂクテートルとはなりぬ。サラ是れを聞き、ホンタス王と和を媾じ、直にローマに歸つて、マリアス黨を排斥せり。此の時マリアス既に身退りしかば、容易に勢力を掌握して終身のヂクテートルに選ばれ、政治法律を改良し、紀元前七九年を以て歿せり。

一一五 ポムペイの勢力を握れる所以を畧記せよ

答 サラの小亞細亞を征するや、其の部下の一將ポムペイなる者、大功を樹てゝ、武名を著せり。加之イスパニアに逃れたるマリアス黨は、ポムペイのために破られたれば、其の名愈よ揚れり。されば元老院は、其の勢力を殺減せむが爲に、ルクラス、及びクラッサスの二人を擧げて之れに對せしめたり、されどポムペイは早くもクラッサスと結托し、且つ地中海に出沒せる海賊を伐つて功ありしかば、其の勢力は日に進めり。更に亞細亞に入りては、パルシアと盟約してポンタス及びシリア（紀元前六四年）を亡ぼし、且つパレスタイン（紀元前六三年）を征服し、大名を負うて歸國せり。

一一六 三雄同盟とは何ぞや

答 ポムペイは亞細亞諸方に於いて大功を樹てゝ歸國したれども、元老院は之れを喜ばざりき。而も彼れが軍兵養成のために請求したる土地を與ふるも拒絶せしかば、飜つて貧民黨の首領なるシーザルと同盟を結べり、然るに兩人共に、充分の資力あらざりしかば、富豪なるクラッサスを說きて味方とせり。これを三雄同盟とす。

因に言ふ。ジュリアス、シーザルはマリアスが妻の姪にして、ユリアン家の後裔なりき。曾てサラの忌む所となり、一たびはローマ國外に在りしが、彼れの死後歸國して、大に政界に腕を奮ひ、遂にポムペイと相結んで、ローマの天地に雄飛するに至りしなり。是れより以後の彼が生涯は、即ちローマ史を造る所なり。

一一七 三雄同盟の成行を問ふ

答 三雄同盟、即ちトライアンビレートの成るや、クラッサスはパルチア國に遊ひ、之れを伐つて功なく、剩へ重傷を負うて戰場に死せり。而してシーザルはゴール地方の太守となるや十餘年、能く蠻族を壓迫して、ローマ化せむことを勉めたり。加之今のラインつてブリタニア即ち今の英國に亂入して其の大半を侵畧せり。斯くの如くして彼れは、河を渡るや前後二回（紀元前五五年及び全五三年）にしてゼルマニアを征服し、海を渡ローマ人の尊敬する所となり、其の勢力は、日々に增進なり。獨りポムペイはローマに止りて、三雄同盟を代表しけるが、漸くシーザルを忌み、機に乘じて彼れを排斥せむと

せり。恰も好し紀元前五二年、貧民黨に紛議生ずるや、元老院はポムペイを説して之れを鎭壓せしめたり。ポムペイ快諾し、これより元老院と結んで、公然シーザルを敵とするに至りぬ。是に於いてか三雄同盟破れたりと。

一一八　ポムペイ及びシーザルの角逐を畧述せよ

答　ポムペイの元老院と結托するや、シーザルは意を決し、紀元前四九年を以て、伊太利に歸り、ポムペイの備へざるを機として、是れを伐てり。ポムペイ破れてギリシヤ國マセドニアに走れり。シーザー之れを追うて、ファルサロスにて彼れを破りぬ。ポムペイは再び逃れて埃及に行き、茲にて暗殺せられたり。シーザルは斯くて後、埃及を征して時の王を廢して王妹クレオパトラを立て、カトーを自滅せしめ、尋いでイスパニアの敵を亡ぼせり。げにファルサロスの大戰は、ローマ共和政治の終なりき。何ごとなれば是れより後は、大權シーザルの掌中に歸し、天下之れに對する者あらずなりぬ。シーザルは四方を征服したる後、エムペレートル（文武の都督の義にして、これより今日のエムペロルなる語を生ぜり）となり、又終身のヂクテートル及びコンサルとなりぬ。

一一九　シーザルの末路を問ふ

答　シーザル大權を握るや、共和主義、即ちローマの國是を重んずるの士は、窃かに其の行爲を惡めり。然るにシーザルが王者の地位に上らむとすといふ流言あるや、元老院の愛國者ブルタスは、國家のために、彼を生存せしむべからずとなし、カシアス等と相計りて、紀元前四四年三月十五日を以て、元老院議場にて彼れを刺殺せり。

一二〇　シーザルの事蹟を問ふ

答　シーザルの政を執りし時期甚だ短しと雖も、其の功績は多かりき。ローマ市民の權をゴール人に與へ、太陽曆を制定し、文藝を奬勵し、且つローマ府内の貧民を、國外の領地に移住せしめたるが如き、或は軍制財政の改良、刑法の制定等、皆な彼れが大手腕によりて實施せられたり。

一二一　第二三雄同盟及び其の成行を問ふ

答　シーザル暗殺の報あるや、其の養子たるオクタビアスは、アレキサンドリアより歸國して直にシーザル黨なるアントニアスと結托せり。此の時レピダスなる一將亦、彼れ等に加盟しぬ。これを第二の三雄同盟とす。彼れ等は直に兵を送つて、ブルタス、カシアスの一黨を襲ひ、これをマセドニアにて破れり。ブルタス等皆自殺せり。時に紀元前四二年とす。かくて後レピダスは勢力を失ひ、アントニアス及びオクタビアスの二人のみ、天下の大權を握りぬ。

一二三　アントニアスの事蹟及びオクタビアスの爭を問ふ

答　アントニアスは兵を進めて埃及に入れり。然るに埃及女王クレオパトラが容色に溺れて爲す所あらざりき。是れより先きローマ政府は、アントニアス及びオクタビアス兩人が爭を生ぜむことを畏れて、ローマの領地を東西に分ち、西方をオクタビアスに支配せしめたり。然るにアントニアスは己が子に、東方のローマを與へむことを企てたるが故に、オクタビアス大に怒り、直にアントニアスを埃及に進擊せり。アントニアス及びクレオパトラは、力盡きて自殺しき。時に紀元前三一年。遂に埃及はローマの一プロビンスとはなりぬ。

一二三　ローマ帝國の創始を問ふ

答　アントニアスを滅ぼしたるオクタヴィアス、シーザルは、今や天下に一人の敵なきに至りぬ。元老院は紀元前二七年を以て、彼れにオーガスタスの尊稱を贈れり。これ至尊至高の義にして、彼れが掌中に、一切の權利は握られたり。さればローマは外形こそ曾日の共和政躰なれ、實質に於いては君主政治とはなりぬ。これローマ帝國の創立にして、第一の帝はオクタビアスシーザルなり。

一二四　オーガスタス帝時代のローマの版圖を問ふ

答　オーガスタス時代のローマは實に廣大なりき。地中海の沿岸は、殆ど皆其の領地にして、北はライン川を以て、ゴール人と境し、東はユーフラテス川を以て、パルシヤ國に接したり。

一二五　オーガスタスの事蹟を問ふ

答　オーガスタスは其の廣大なる土地を、悉くローマの文明に浴せしめむとせり。按ずるに其の目的は、各國民の特質を、不知不識の間に消滅せしめて、只管ローマ帝を尊敬するに至らむとを欲したるなり。されば中心をローマに置き、地方制度を改め、近衛兵及び地方邊鎭の制を定め、勉めてローマの文明を普及せむとせり。然れどもローマの文化は、ゴール、イスパニア及び亞非利加の西部に及びたるのみにして、曾てギリシヤの文化に浴したる土地は、依然として古風を墓へり。加之、ローマの文化は、却てギリシヤ文明の影響を蒙れり。さて帝は、大に爲す所あらむとしたれども、其の諸族の力強く、而も紀元後九年、トイトブールグの戰に於いて、ローマ軍の大敗したる以後は、進取主義を中止して守勢をとれり。更に東方パルチア國に對しても、和親を交ぶの止むを得ざるに至りぬ。蓋し帝は、土地の廣らむ限りを征服して、

其の帝王たらむとを望みたるなれど。其の意は實行せられざりしなり。
因に言ふ、耶蘇教の開祖イエスは、オーガスタス帝の世に生れたり。これを紀元一年とす。去れば是れより後の年數は、すべて紀元後なりと知るべし。

一二六　ローマ帝政の盛時を問ふ

答 オーガスタス帝は一四年を以て身退れり。次でジュリアン家の帝四代あり。此の間南部ブリタニア、イステル河畔、モーレテニア、スレース等の新領土を加へたり。此の間亦基督教は、ローマに入れり。而して四代の最後の帝を子ロとす。暴戻を以て有名なり。次で諸方の鎮臺兵大に勢力を増し、各其の將を選んで皇帝とせる者三人ありき。然れども七〇年ヴエシパスアン帝位に上つてより、國内平穏に歸せり。此の帝の世にエルサレム滅びき。其の後九八年より一八〇年に至る間には、良帝五人ありき。ナーヴア、トラジヤーン、ハドリアス、アントラアス、オーレリアスの五帝これなり。此の五帝の間こそ、ローマ帝政の極盛期にして文藝大に進み、法律の研究起り、商業交通亦進めり。されど其の繁榮は却て國民の道徳を腐爛せしめ、やがて帝國の衰運を生ぜり。

一二七　ローマ帝國の衰退せし狀態を記せ

答 良帝以後のローマは日々に衰退せり。近衛兵及び鎮臺兵の勢力大に増進し、帝位は

これが爲に左右せられたり。而して歳入缺乏の結果は、領地内の自由民に悉く公民權を許して租税を納めしめむとするに至り、且つゼルマン人種に土地官職を與へて、其の歓心を買はむとせり。これ既にローマの國是を破りたるものなり。
此の内部の窮迫あるに加へて、二二六年を以てマルタゼルクセスなるもの、新波斯國を建てゝローマに對峙し、而も優勢を示し、北方にてはゼルマン諸民族の勢力増加し、サクソン北海に起り、フランク人はゴール地方に、ゴツス族はイスター川畔に崛起して、皆ローマの敵とはなりぬ。二八四年を以てダイオクルチアン帝の位に即くや、一方にはマキシミアナスなる者、亦帝と稱せり。共にガーガスタスの尊稱なとり、前者はメヂオラナム、後者はニコメヂアに居りて、各二人のシーザル(官名)を置きて、邊境を守らしめたり。されば一時は國内平和に復したれど、ダイオクルチアンの崩ずるや、各地に帝號を稱ふるもの起りて、いづれが正しきを分ち難かりき。而して其の中、耶蘇教徒と同盟して、敵黨を破り、全國を統一したるものあり。これをコンスタンチン大帝とす。

一二八　耶蘇教の起源を問ふ

答 猶太人は、古より一神を崇拜せり。これ其の特色にして、何事も神意に因らむとを勉めたり。然れども其の國土たるや、恒に強敵の蹂躙する所となり、民族は幾多の困難に遭遇したるのみならず、遂に國土を失へり。國民としての不幸、これより大なるは莫

し。然るに彼等は、此の不幸を打消すに足るべき望を有てり。そは一神エホバの遣はす救世主メシアが、他日天より來つて、彼れ等を救ふべしといふ望なりき。此のメシアを望む熱誠を基として現れたる空前絶後の聖賢をイエスとす。彼れは自ら神の子なりと云ひ、メシアに關する預言を滿たす者なりと宣べ、博愛の深き教理を、宣べ傳へたりき。そはオーガスタス帝の世なりき。然るに守舊主義の猶太人は、理想のメシアとイエスとは契合する所あらずとなし、ローマ化せる者亦彼れが教理を忌み、兩面より彼れを攻撃せしかば、イエスは遂に磔刑に處せられたり。然れども其の志は弟子の間に傳はり、弟子等は百難を事ともせず、生命を忘れて、開祖が教義を宣べ傳へたれば、諸方に改宗するもの甚だ多かりき。就中ポーロの如きは、地中海岸を傳ひつゝ說教し、遂にローマに入つて、威儀堂々たる帝都をも穢土と見做しつゝ救ひの道を絶叫したり。

一二九　基督教のローマに勢力を握りし所以を問ふ

答　基督教がローマの天地に勢力を握るに至りし原因を別記すれば、左の如し。

(一)ローマは政治上に於いて世界を統一せむとを計りたると共に、宗教上の一統を企てたれど、其の目的に適するものあらざりき。そは諸邦の宗教は皆、國民的性質を帶びたればなり。去れば別方面に移つて、帝王を崇拜せしめ、以て世界の統一を計らむとを企てたり。然るに是れ亦失敗に歸しぬ。是の時に當つて、國民種族の差別以上に及んで

世界的なる思想を傳ふるものは、基督教なりしかば、ローマ人は、不知不識の間に、世界を支配するに足るべきものは、此の宗教なりと信ぜり。

(二)當時ローマの道德は、非常に腐敗せり。此の時に當つて、道德上の大理想を揭げたるものは、基督教なりき。

(三)その教理は人生の苦痛懊惱を撫慰するに足れり。而して當時のローマ人は、斯くの如き慰藉を求めつゝありしなり。

キリスト教が、非常の迫害あるにも拘らず、容易にローマ人間に傳播せられたるは、重に以上の原因あるが故なり。之に加ふるに、使徒或は信者が迫害の中に不動の大信仰を立てたるは、ローマ國民の哀心を動かしたり。

一三〇　コンスタンチン大帝の事蹟を問ふ

答　ローマの天地廣しと稱するもの四方に在りし時、耶蘇教徒と結んで其の敵リキニアスを亡ぼし、遂にローマを統一して皇帝の位に即けり。さればキリスト教徒を遇すること甚だ厚く、遂に是れを以て國教とせり。而して其の居城をビサンチウム、即ち今のコンスタンチノープルに奠め、是れをしてローマ府の如く盛大ならしめむが爲に、宮殿、教會堂等を造營し、大に威を四隣の蠻族の間に輝かせり。又地方制度を改革し、軍制を一新せり。三三七年を以て崩ぜり。

（附）ニカヤ會議とは何ぞや

キリスト教には諸宗派ありて各自宗を以て眞体とし、その何れか是なるを分ち難かりしかば、コンスタンチン大帝は、ニカヤに大會議を開きて、異分子を淘汰せり。これを有名なるニカヤ會議（三二五年）とす。

一三一　コンスタンチン大帝の相續者と其の事蹟とを問ふ

答　大帝の子コンスタンチン、立つて二世となり、其の弟コンスタンチナス之れに次ぎ三六一年を以て崩じ、大帝が弟の子ヂユリアン位を次げり。ヂユリアンは再びキリスト教徒を苦めしが故に、背教者の名あり。彼れ波斯を征服せむため、大軍を率ゐて彼の地に渡りけるが、亂軍の內に重傷を蒙りて客死せり（三六三年）時の將軍兵士等、直に將軍ジヨビアンを推して皇帝とせり。三六四年を以てジヨビアン退き、ヴアレンチアン一世皇帝となり（三七五年迄）ヨランに皇居を定めき。而してコンスタンチノープルには其の弟なるヴアレン皇帝となれり（三六四年——三七八年）これより後セオドシアス帝に至るまでは、紛亂を極めたり。セオドシアスは大帝の稱號を得たる明君にして、ローマ帝國を統一したり。げにローマ全土の權を握りたるは、此の帝を以て最後とす。

一三二　東西ローマの分裂せる始末を問ふ

答　セオドシアス大帝の三九五年を以て崩ずるや、ローマの天下は二分せられたり。長子アルカヂアスは東ローマの皇帝となり、次子ホノリアスは西ローマの帝となれり。前者はルフィナスを宰相とし、後者はスチリコを宰相とせり。

一三三　東西ローマ分裂時代の所謂蠻族の狀態を略記せよ

答　當時の所謂蠻族の重なるものは、ゼルマン族（一名チユートン種）スラヴ族、及びコーカサス山の北なるアレナイ族これなり。ゼルマン族亦種々に分れ其の占領したる地方は左の如し。

バーガンヂ族（チツカル河畔）アラマン族（マイン河畔）フランク族（ライン下流）サクソン族（ライン下流の東エルベ河まで）チユリンヂア（前者の南）ロムバルヂ族（エルベ下流）スエヴイ（ノリカムの北方）ヴアンダル族（パノーニア）西ゴス族（デーシア）東ゴス族（黒海北岸）

此れ等蠻族の東北平原の地にスラヴ族住せり。さて此れ等の蠻族は、夙くよりローマの文明に浴して、其の勢力は、いつしか強大となり、遂にローマを顚覆せずんば已まざるに至れり。ローマの衰亡は、實に此れ等蠻族の增長に因れるなり。

一三四　ハン族の侵入を略記せよ

答　三七五年を以て、ウラルアルタイ派の蒙古人種、即ち匈奴、大兵を率ゐて、アレーナイ族と共に、東ゴス族を襲へり。此の時に當りて西ゴス族は、元來キリスト教を奉じ居たるが故に、ローマ帝國の藩屏たるを約しぬ。ハン族の王アッチラ善く兵を用ひて、イチル河よりクイン河、イスター河よりバルチック海に至る間の廣大なる土地を征服し、ゼルマン民族及びスラヴ族の多くは、其の旗下に從へり。アッチラは西ローマ帝の女を妻としければ、自らはローマ帝たるの權利ありと稱し、之れを請求したれど、許されざりしかば、バンダルス王と共に、ローマ帝を攻めたり。時に西ゴス、バーガンヂ、フランクの諸族、西帝國を助けて、彼れを防げり。四五一年のカタロニアの大戰これなり。これより先きアッチラは東帝國を劫かして（四四一年）許多の貢賦を得たり。かくて四五二年を以て伊太利に侵入したれども、翌年殞して其の大なる領土は忽ち瓦解したり。

一三五　西ゴス及びヴアンダル族の建國を問ふ

答　西ゴス族のローマ帝國の藩屏となるや、スチリコが彼等に約せし條件を滿さゞるを憤り、其の王アルリック大兵を率ゐて四一〇年ローマに入り、これを陷れたり。次で亞非利加に渡らむとを計りたれど、志を遂げずしてアルリックは身退り、アサウルフ之れに代り、帝と和議を結んで、ゴールを横り、イスパニアに入れり。かくて四一五年以てトーローサーを首府とせり。これ西ゴス族の建國なり。

ヴアンダル族はゲンサーリックを王として亞非利加に行き、カルセーヂを取りて首府とせり。此の他の諸族の狀態を錄さむに、バーガンヂー族はゴール南部に、フランク人は其の北部を占領せり。

一三六　西ローマ帝國の滅亡を畧述せよ

答　ハン族を防ぎたるはローマの將軍エーチアス及び西ゴス王セオドリックの力なりきされば兩人の名大に世に傳はりぬ。時の皇帝之れを忌み、先づ計つてエーチアスを殺しき。然るに其の身亦エーチアスが部下の殺す所とはなりぬ。かくて西ローマ帝のセオドシアス家絶ゆ、これより後は傭兵たるゼルマン人權を專にし、皇帝の廢立を行へり。其の推擧によりて帝位に上れる內、尤も有名なる明君をマジョリアン（四五七年——四六一年）とす。其の後四七六年に至つて、元老院は、一天下に二人の皇帝を置くの必要なしとして、西ローマも東帝の配下に立たむとを決議せり。東帝國は、傭兵ゼルマン族の長オドワカルに伊太利の政權を委れたり。其の官名をパトリシアンといふ。斯くの如く新帝國ローマといふべき東ローマは、コンスタンチノープルを中心とし、舊ローマ帝國即ち西ローマは、事實上蠻族の支配を受くるに至れり。これを西ローマ帝國の滅亡とす。

一三七　ローマ文明の大要を記述せよ

答　ローマの文明は多くギリシヤの模倣なり。たゞ獨創のものは法律學の發達あるのみと謂ふも可ならむ。文學の盛時はオーガスタス帝の世にあり。

ヴアーヂル（詩人紀元前七〇年――同一九年）ホラチウス（詩人紀元前六五年――同八年）オヴイヂアス（詩人紀元前四三年――紀元前一八年）リヴイアス（紀元前五九年――紀元後一七年）タシタス（史家五四年――一二〇年）クインチリアン（修辭學者四〇年――一一八年）

等はローマ史上尤も有名なる人物なり。又紀元前一〇六年より四〇年に亘りてはシセロありシーザル亦文筆を弄し、又哲學者にはセネカ、皇帝マーカスオーレリアス、（一六一年――一八〇年）エピクテータス（五〇年――一二〇年）等あり。基督教の學者には有名なるオーガスチン（三五四年――四三〇年）出でたり。

一三八　史上に於けるローマの位地如何

答　西洋史上の中心たるものはローマなり。ギリシヤ文明を引き次ぎて、諸方の蠻族を糾合し、一團の大國を造り。これにギリシヤより輸入せる文明の光を與へたるはローマにして、其れ等蠻族は其の光に由つて隆起し、遂にローマに對抗し、ローマは四分五裂の有樣とはなりぬ。而して其の大帝國の瓦解は即ち今日の歐洲の起る源なり。されば ローマを以て史上の中心點とするも何の不可かあらむ。歐米の史家がローマ史の研究に熱衷する亦宜なるかな。

一三九　西ローマ帝國滅亡時代の天下の狀態は如何

答　羅馬の衰退せる時代の社會を見るに、明かに三種の別あり。其の一はグリコローマ文明の社會、即ちギリシヤ文明を輸入して造れるローマ文明の社會にして、第二はキリスト教社會、第三は蠻族の社會是れなり。此の三社會、否寧ろ三傾向の衝突離合こそ次期の歴史を生ず。約言すれば、今日の歐洲は、此の三者の衝突離合に因りて生じたるものなり。そは後の歴史に依りて承認せらるべし。

中古史

一　東ゴス王國の建立を問ふ

答　西ゴスの王オドワカルは、伊太利の統治者となりて大に威を振ひしが、東ゴス王の親族なる者を殺したるが故に、東ゴス王セオドリツクの怒を買へり。是れより先き東ゴ

ス王は、東ローマ帝の歓心を買ひ、勢力大に揚りしかば、直に兵を派遣して西ゴスと戦へり。オドワカル戦死し、セオドリックはラヴェンナに王國を建てたり(四九三年)其の領土は伊太利の内外に及びて、古帝國の制度を用ひ、且つフランク人、西ゴス人、バーガンヂア人、チユリンギア人等と款を通ぜり。然れどもセオドリックの死すると共に國威大に衰退せり。

二 フランク人の建國を問ふ

答 ゴール地方の一部にして、未だ蠻族の侵畧を蒙らざりし地は、西ローマの滅亡と共に、其の知事の私有に歸せしが、其の地方に住せるフランク人の長、クロドヴイヒは、四八六年を以て、此の地方を征服して、フランク人の王國を建てたり。其の死に至るまで(五一一年)アラマニアを滅ぼし、西ゴスの地を蠶食せり。

三 ブリタニアの七小王國を問ふ

答 ローマは曾てブリタニア即ち今の英國を征服したりしかど、四世紀頃に至りては、本國の勢力大に衰へたるが故に、自然とブリタニアの如き遠隔の地は、之れを統治するも疎となりぬ。此の機に乘じて、一地方に蹈蹕せしケルト人種なるピクト、スコット人等南方に降りぬ。是れと仝時に、サクソン人も此の地に進入せり。四一〇年を以て、ロ

ーマ政府の仝地に於ける鎮臺兵を撤回するや、ヂユートン人先づ入つてケント王國を建てき。(四四九年)次でサクソン、アングル等の民族上陸して領土を占有しき。げに此のアングル、サクソンこそ、今日の英人の祖先なれ。かくて彼等は、ケルト種の一派なるブリトン人と戰ひて、島の東部を平定し、茲に七小王國を建立せり。サクソン及びアングルの二族は後に混和して、アングロサクソンと呼ばれたり。而して其の西部には倘ブリトン人ありて、新來者に敵對せり、新來者に彼れ等を呼んでウエールシと言へり。これ異人の義にして、是れより今日のウエールスなる語生じたり。

四 ゼルマン民族の言語の變化を問ふ

(西ローマ滅亡の當時)

答 ゼルマン民族のローマに接近したるものは、キリスト教を奉じ、次いでローマの文明を採用せり。即ち當時の文明はローマ化したるチユートン文明なりき。而して其の言語の如きも、いつしか拉丁語と混じて、一種の言語を造りぬ。ローマンス語といふは、即ちこれなり。今日の伊太利、西班牙、葡萄牙、佛蘭等の言語は、此の言語を基として變化したるものなり。さてローマ化せざりしゼルマン人種は、依然獨得の言語を用ひき。その言語をつ分て二さす。フランク人及び內地ゼルマンの用ひしものをホツホドイチと云ひ、サクソン其の他海濱に居住せし者の用ひたるをニーデルドイチと云ふ。今の獨逸

語及び英語は、これを本として變化せるものなり。從つて彼れ等、サクソンはローマの文明を輸入する所少なかりき。

五　ジャスチニアン皇帝の事蹟を問ふ

答　西ローマ帝國の滅亡するや、ローマの天下は名義上、東ローマ帝の配下に屬したりと雖も、實際は西ゴスの權力大にして、東ローマは、僅にコンスタンチノープル及びアレキサンドリアを中心として、ギリシャ文明の命脈を保ちたるのみなりき。然ろにジャスチニアン皇帝（五二七年——五六五年）の位に即くに及びて、東ローマの威勢大に揚れり。皇帝はヴアンダル王國を滅ぼし、四ゴス東ゴスを仆し、亦アーヴアル族にダニューヴ下流の地を與へダニューヴ北岸のロムバルト族にパノーニアの地を與へたり。かくて全ローマの天地は、再び一人のローマ帝の掌中に歸したり。帝は聰明にして、一代の事業、傳ふべきもの甚だ多し。就中有名なるはロース法典の編纂なりとす。これ今日の歐洲諸國が制定せる法典の根源たるものなり。建築亦大に起り、養蠶術は此の時東方より傳授せられたり。

六　波斯の勃興及びローマとの戰爭を略記せよ

答　史上長く隱沒したる波斯は、メシルヴアン王の世に至りて、再び勢力を得、其の孫

チョスロエスに至りて、愈よ强大となり、六一一年より六一五年に至る間、埃及、シリア、小亞細亞の地を席卷し、進んでコンスタンチノープルを衝けり。時の皇帝ヘラクリタスは、稍起して、六二二年より六二八年に至る間に、波斯軍の侵畧したる土地を奪ひ返せり。これより波斯國の勢力亦衰退せり。

七　マホメッドとは何人ぞ

答　ローマの天地の紛擾を極たるに際して、一偉人はアラビアの地に起れり。アラビア人、一名をサラセン人と云ふ。五六九年を以て、アラビアのメッカにマホメッドなる者生れたり。これ回々教の開祖なり。彼れは幼年の頃には商隊に加はりて諸方に行き、猶太教、耶蘇教等を研究し、後には自ら預言者と稱し、四十才の時には、眞一神の教を說き、且つ自らを天使なりと言へり。然れども國民に容れられざりしかば、遂れてメッナに行き（六二二年）こゝに基礎を作れり。回々教即ちモスレム教徒は、この年を以て其の紀

元とす。かくてマホメッドは、兵力を蓄へ、六二九年を以てメッカを陥れて、アラビアを統一せり。これより彼れはローマの天地に侵入して、全世界を併呑せむとを計りたれど、六三二年志を遂けずして歿せり。

八　マホメッドの侵略手段は如何

答　マホメッドは征服地に向つては、特有の宗教を許さざりき。これアラビア全土をして、一宗教を奉ぜしめむがためなりき。而して其敵に向ふや、經典たるコーランを信ぜよ、然らざれば貢物を納めよ、然らざれば刀劍を以て戰へよと迫りたり。これ彼れが侵略の方法にして、其の子孫亦是れを守りぬ。されば彼れにとりては征服即ち布教なりしなり。彼れは恰もキリスト教が、ローマ大天地の宗教たりしが如く、モスレムを以て廣大なる土地の宗教となし、進んでは世界の宗教たらしめむとせり。

因に言ふ、サラセンの膨脹は、むしろマホメッドの死後に在りと謂ふべし。

九　サラセン帝國の膨脹を略記すべし

答　マホメッド死するや、其の後の代々の統治者をカリフと云へり。これ繼續者の義なり。さて其の嗣者、皆な經典、刀劍、朝貢の三を以て諸國に迫り、シリア、埃及を征服し、亞非利加沿岸の地は、悉く其の版圖に加へられき。サラセン人は、更に海を渡りて

イスパニアに進み、三年にして西ゴスを滅ぼし、ゴール地方を侵しゝかど、七三二年に至りては、フランク王チヤールスのために破られて、ゴール地方を退き、イスパニアに跼蹐せり。次に東方に於ける膨脹を見るに、六四二年には波斯を滅ぼし、進んで印度西端に至りて、諸方を征服したり。去れば其の領土の大なる、東は印度西方より、波斯、亞剌比亞より埃及並に亞非利加の海岸一帶の地を經て、イスパニアに至り、一人のカリフ之れを領しぬ。此の間黑海に臨める小亞細亞は、克くサラセンを防ぎてローマの勢威を示したり。

(イ)サラセン人とコンスタンチノープル

サラセン人は六七三年と七一六年との二回、コンスタンチノープルを圍めり。されど二回とも其の功あらざりき。

(ロ)當時の二大勢力に就て。

當時の天下を看るに、ローマ文化の及ばざる地方は悉くサラセン人に歸せり。故に地中海、黑海、裏海を堺として、南はサラセンの勢力範圍、北はローマの勢力範圍なりといふを得べし。

(ハ)當時に於て支那と波斯とが如何なる交渉を成せしか。

波斯のサラセンに困めらるゝや、唐の太宗に乞ふて援を求めたり。されど其の効なくして國家亡べり。時の波斯王家をサッサンデスといふ。

一〇　サラセン帝國の衰退を略述せよ

答　サラセン帝國の首府は、ダマスコスよりバグダッドに移されたり。廣大なる土地は一人のカリフの掌中に歸しけるが、幾許もなく大帝國分裂し（七五五年）カリフ相續に就いて爭を生ぜり。又地方の知事は、名義上カリフに從ふのみにて、實際は其の命令を守らざるに至り、且つ北方よりは、トルコ族蒋りにサラセンに迫りぬ。これ恰もローマに迫れるチュートン族の如し。加之、イスパニアを失ひ、敎義其のものに、幾多の異宗を生ずるに至つて、サラセンの勢力、大に衰退したり。

一一　ローマ法王權の確立を問ふ

答　はじめキリスト敎の大本山とも稱すべきものは、ローマ、コンスタンチノープル、アレキサンドリア、アンチオークの四なりしが、ローマが常に政治上の中心たりしより、ローマ敎會の勢力優に他を凌ぎたり。然るにローマ帝のローマを去るや、ローマ僧正の權力漸次に增加し、五九〇年、グレゴリーの職に就くや、遂に法王權を確立せしめて、東ローマに對して敎權の獨立を示せり。

一二　ローマ及びギリシヤ兩敎會の分裂を問ふ

答　レオ帝のローマ帝となるや、サラセン人の北上を防ぎて大功ありしかば、其の權力大に增加したり。蓋しレオ帝のサラセンを防遏したるは、キリスト敎史及び今日の文明史上、尤も重大なる出來事たり。さて帝は偶像禮拜を厭うて、これを禁ずる旨を天下に號令したり。然るにローマ法王グレゴリー二世及び三世は、大に之れに反對せり。ローマ人亦法王に左袒して、東帝に當れり。されば皇帝の權力大に衰退し、遂に伊太利に於ける皇帝の勢力は全く銷沈し、代つて法王權膨脹するに至れり。これ東西兩敎會の分裂なり。

一三　フランク人の勃興を記述せよ

答　東ローマ帝と法王との軋轢に乘じて、ロムバルド王伊太利に侵入し、ラヴエンナを取り、ローマ府を劫かすに再三に及べり。時の法王ステーフエン三世は、之れを防がむために、當時勢力を握りたるフランク人と結べり。是れより先きフランク人はメルヴイング王家を戴きけるが、實權は其の臣カーリング家に屬し、そのマルテルに至るや、西にサラセン人を破りて大功ありしかば、其の子ピピンに至りて推されフランク王さなれり。ピピン伊太利に入りて、ロムバルドを破り、その侵略せる土地を奪つて法王に奉れり。これ法王領なり。されば伊太利の全權は、ピピンが手に歸しぬ。然れども帝王の位には上らずしてパトリキウスの稱號を以て甘んぜり。

一四　チャールス大帝の領土を問ふ

答　フランク王ピピンの子チャールスの位に即くや（七七一年）ロムバルドを滅ぼし、サクソンをとりてキリスト教を其の地に布き、ボーランド地方のスラヴ族を擊退し、デンマーク人の侵入を防ぎ、アヴアールを亡ぼし、西の方サラセンを擊退してエブロ以東の地を取りぬ。さればオーデル河よりエブロ川に至るまでの廣大なる土地は、悉く彼れが版圖に屬せり。

一五　西ローマ帝國の再興を問ふ

答　東ローマ帝コンスタンチン六世の位に上るや、其の母后、自ら帝玉たらむことを欲して帝を廢せり。是に於いてローマは、異議を出せり。元來ローマ帝の位には、婦女子を上すべからず。然るに今や女人、此の高位に登れり。我等これに從ふと能はざれば別に皇帝を立つべしと。かくて八〇〇年の耶蘇降誕祭を卜して、ペーター寺院にてチャールスは、法王より皇帝の冠を得たり。チャールスは夙くより皇帝たらむとを欲したれば、機會の到るを俟ち居たるなり。これ西ローマ帝國の再興にして、これよりチャールスをシヤーレマンと呼べり。

一六　東西ローマ帝國の言語文字の差別如何

答　東に公私の別を問はず、ギリシヤ語を用ひ、西は日常にはドイチ語を用ひ、公文にはラテン語を使用せり。但し其のラテン語は純粋のものにはあらざりき。

一七　シヤーレマンの治世を問ふ

答　シヤーレマンは武略に富むと共に、治國の才にも秀でたり。在位の間は學問を奬勵し、法律を制定し、寺院を建立し、社會の改良に熱心なりき。國境には守備兵を置き、國内を數十州に分つて、各州に一人の統治者を置けり。統治者は帝より領地を賜りぬ。これを封地（フイーフ）といふ。さて其の報酬として、軍馬の役に服するの義務を負はされたり。而して統治者は自己の領土を割きて臣下に與へ、以て君臣の關係を結べり。これ中世紀に於ける封建制度の基礎となれるものなり。

一八　九世紀初期の四大勢力及び其の關係の大要を問ふ

答　九世紀初期の四大勢力とも云ふべきは左の如し。

（一）東ローマ帝國
（二）西ローマ帝國（シヤーレマン即位によりて再興せり）

(三)東方バグダッドを首府とせるサラセン帝國
(四)マホメッドの後裔オミヤッド家の支配する西サラセン國（イスパニアを根據地とせるもの）

此の四大勢力は互に角逐せり。而して東ローマは東サラセンと戰ひて、西サラセンと平和を交び、西ローマは西サラセンと戰ひて東サラセンと平和を交べり。

一九　シャーレマン帝國の分裂を問ふ

答　シャーレマン帝の崩ずるや（八一四年）直ちに領土の爭、其の皇子等の間に生ぜり。而して其の紛議は八四三年のヴエルダン條約によりて和解せられたり。

(一)長子ローゼールは伊太利及び中部ロレーンを得て皇帝の稱號を有す。
(二)次子レウイスはライン及びエルベの兩河間を領す。
(三)第三子カールはローゼール領の西部を領す。

二〇　佛國の起源を問ふ

答　シャーレマンの帝國分裂して、一たびはヴエルダン條約によりて局を結びたれど、幾許もなく紛議生じて、八八七年には、四王國を見るに至れり。東西フランク國、伊太利、及びバルカンヂアこれなり。その西フランク國なるもの、實に今日の佛國の基となれるなり。西フランク國は、カーリング家（シャーレマンの後裔）より王を出したれども、勢力衰へたるのみならず、當時北邊に寇せる蠻人を防ぎて功ありしロバート大に勢力を得たり。其の子オード遂に推されて王となり（八八六年）これより其の後裔はフランク侯と稱してパリスに在りき。カーリング家はローンに在りて、フランク侯と王位を爭ひしが、九八七年に至りて其の家系絶え、フランク侯ヒユー、ケーペット王位に上りぬ。

二一　日耳曼國の起源を問ふ

答　東フランク國に於いては、カーリング家依然として王位を占有しき。然れども九一一年に至つて王系絶え、諸侯は、フランコニア侯コンラッドを推擧して王となせり。コンラッドに次いで、ザクセン侯ハインリヒ王位に上りて、國力を進めたり。これ實に獨逸國の起源を成すものなり。

二二　神聖ローマ帝國の起源を問ふ

答　東フランク國王ハインリヒ一世は、西ローマ帝位の再興を計りたれど、志を遂げずして逝けり。其の子オットの王となるや、內は諸侯の軋轢を鎭定し、外は勁敵を破つて國威を發揮し、又伊太利の內亂に干涉して其の王を滅れ、次で九六二年を以て、ローマ法王より神聖ローマ帝國皇帝の冠を戴けり。當時フランク國に寇したるは、丁抹人、ス

ラヴ族なるポーランド人、マヂヤール即ち匈牙利人等なりき。就中マヂヤールの勢力大なりしが、オツト大王は、よく之れを防ぎて功ありき。オツト以後の王は、伊太利のミランに往きて、法王より帝冠を受くるを例とせり。

二三　匈牙利の起源を問ふ

答　東フランク國に寇したるマヂヤール人こそ、後の匈牙利國をなせるものなり。オツト大王の威風に畏れて、爾來東フランク國に侵入することなく、一〇〇〇年スチーヴンの世に至りて王國を建てゝ、獨逸文明を輸入せり。

二四　北人と云ふは如何なる民族なるや

答　スカンヂナヴイア半島には、夙くよりフヒン及びラプスの民族ありけるが、チユートン人種此の間に侵入して勢力を握り、九世紀の初めには、諸威、瑞典、丁抹の三國を建てたり。此れ等諸國の民族は、なほキリスト教文明に浴せず、氣風殺伐にして、八〇〇年頃より諸方の海岸に侵畧を逞うせり。これを北人といふ。ノルマン人、デーン人等これなり。

二五　英國とデーン人との關係を問ふ

答　七八九年以來はデーン人は英國を窺ひ、來寇すること止まざりき。さて其の七王國はエッセックスのエルバート王によりて統一せられたれど、頃しも北人の來襲甚しく、爲に損害を蒙ること大なりき。エルバートの孫アルフレッド大王（八七一年―九〇一年）の如き文武兼備の明王も、之が爲には、地を割きて和を媾じたる程なりき。而して一〇一七年に至つては、デーン王カニュート遂に英國を奪ひて其の王となれり。されど其死と共に（一〇三五年）デーンの勢力衰へて、舊王統のエドワルド英王となれり。

二六　ノルマンヂーの起源を問ふ

答　ノルマン人は大陸の沿岸を掠奪して暴威を奮ひ、セーヌ河を上つて、パリを衝くこと再三に及びしかば、佛王シャール大に苦み、使をその酋長ロルフに送りて、若しキリスト教を奉じなば、諸侯に封ずべしと言へり。ロルフ之れを諾して、佛國東海岸の地を得たり。これをノルマンヂーと稱す。（九一一年）

ノルマン人はアイスランド、グリーンランド等に殖民地を設けたるのみならず、南は伊太利海岸、シシリー島などにも、是れを置きたり。げに當時においては、尤も冒險的民族なりしなり。

二七　ノルマンの征服とは何ぞや

答 英王エドワードの死するや（一〇六六年）嗣子なかりしため、國人ハロルド伯を推して王となせり。然るにノルマンヂー侯井リアムは先王の母が親族なるが故に、英王たるの權利ありと稱し、兵を率ゐて上陸し、ヘスチングの一戰にハロルドを破つて、王位に上り、井リアム一世と稱せり。これをノルマン征服といふ。かくてチユートン系なるアングロ、サクソン語と、拉丁系なる佛蘭西語と相混じて、今日の英語となれり。

二八　法王と皇帝との軋轢の濫觴を問ふ

答 神聖ローマ帝は、獨逸王より選ばれたり。獨逸帝はオツト二世及び、ハインリヒ三世の代に至りて、大なる勢力を握り、遂に驕慢なるローマ法王の廢立を擅にするに至れり。さてローマ法王の位地を考ふるに、キリスト教の擴布すると共に、其の權力大に增加して、特殊の法令を發するに至りぬ。是に於いてか、政權と教權との軋轢を生じぬ。教權は政權の上に位せむとし、政權は教權を壓服せむとせり。これ法王と皇帝との軋轢なり。一〇七三年を以てグレゴリー七世の法王となるや、先づ僧官の賣買、僧侶の結婚を嚴禁し、且つ俗界の王者たる者が、僧官を與ふるの權利なきを定め、若し之れに反對する者あらば、直に破門すべしと定めたり。是に於いてか法王權大に增長し、ハインリヒ四世爲に宥免を請ひ、同五世亦法王に反對したりしが、一一二二年を以て和議を結べり。これをチームス條約といふ。かくてサクセン侯ローセルの帝となるに及んで、兩者

の爭は一先づ局を結べり。

二九　コンスタンス條約とは何ぞや

答 フランコニア王家絕えて、ホーヘンスタウエン家のコンラッド三世の即位するや、法王黨と皇帝黨との軋轢再び生ぜり。次でフリードリヒ一世は、法王黨なるザクセン侯を英吉利に追ひ、轉じて法王及び伊太利の諸市と戰ふこと數年に及べり。但し伊太利は十一世紀の頃よりは、諸市獨立して、恰も昔日のギリシヤの如くなりき。而して其の北方の諸市は、ミランを中心としてロムバヂー同盟を造り、法王、東ローマ、シシリーを後援としてフリードリヒに當りぬ。これより先きシシリーは北人の所有となれり。かくて兩黨勝敗ありしが、一一八三年に至りてコンスタンスの條約を結べり。これによりて伊太利の諸市は獨立して自治を行ふを得たり。

三〇　大空位時代とは何ぞや

答 コンスタンスの條約に依りて、皇帝黨及び法王黨の軋轢は、一たび和解したれども幾許もなく、兩黨の衝突を生じて、諸侯及び諸市は獨立し、各所に帝號を稱するもの現れ、コンラッド四世の歿後に至り、二十三年間は、帝位の空虛なるに至れり（一二五六年——一二七三年）これを史上に大空位時代といふ。

因に言ふ、大空位時代の以前に於いて、シーリー及びチープルスは結婚上の關係にて、帝國の領土となれり。

三一 佛國のノルマンヂー侵略を問ふ

答 ノルマンヂーと佛王とは、常に衝突せり。されば井リアムの英王となるや、紛亂は英佛の間に移れり。然れども佛のアンジョー伯が、英王位を次いでヘンリー二世となるや、（一一五四年）兩國の紛議は、稍和解するを得たり。ヘンリー二世より以後を、プランタヂエ子ツト王統といふ。ヘンリー二世は、よく法王權を抑制して功ありき。かくてリチヤード一世を經て、ジョン王、位に即くや、（一一九九年——一二一六年）暗昧にして國政を紊せり。佛王は之れに乘じてノルマンヂーを侵畧せり。英國はノルマンヂーを失ひたりと雖も、其の結果は却て眞好なりき。何となれば、ノルマン人はノルマンヂーなる本國あるが故に、恒に英人を輕蔑したり。然るに其の本國を失ふや、英島を以て本國と定めざるを得ざるに至りたるが故に、大に在來の英人と親みて、國家の安全を計りたり。是に於いてか英國の基礎定まれり。

三二 大憲章とは何ぞや

答 英王ジョンは暗君なるのみならず、英全國を擧げて、ローマ法王に奉り、改めて封

地として之れを治めしかば、諸侯の憤怒甚しかりき。此の時、僧侶貴族等は法王の意見に反して英國舊來の制度に依り、大憲章を制定し、諸侯を後援として王に迫り、一二一五年六月十五日を以て、之れを承認せしめたり。これを大憲章といふ。

三三 國會の濫觴を問ふ

答 大憲章の發布以後もジョン王の專横なほ已まざりき。大憲章は、諸侯は封建的義務の外には、補助金を出すの理由なく、若し其の必要あるときは、貴族及び僧侶より成れる會議の決議を經るを必要とすと定めたり。然るにジョン王も、ヘンリー三世も、共に法王を後援として、國民の意向に反對せしかば、モントフオートのシモンなるもの、貴族僧侶及び平民等を率ゐて王に反し、一戰の下に、ヘンリーを擒にし、新に令を出して各區より二人の平民代議士を出さしめ、以て國務を議するとゝせり。是に於いてか上下兩院の備はれる國會組織せられたり。こは佛國にては是れをパーリアメントと云へる會議にして、エドワード一世の朝に至つて、始めて立派に組織せられたり。

三四 西班牙に於けるサラセンの衰退を問ふ

答 回々教とキリスト教とは、西班牙に於いて長く軋轢せり。一〇三一年を以てサラセンのオミアッド家絶ゑて、其の領土に爭ひ生ずるや、キリスト教徒は、アルフオンゾ八

世を戴きて、レオン、カスチルを取れり。次で十三世紀の始に至りては、カスチル王フエルヂナンド三世、サラセン人を攻撃せり。是れより先きサラセンは、ムーア人を招きて、キリスト教徒に當りしかど、此の時には、勢力衰へて、グラナダを固守するのみとはなれり。これと同時に、ポルチュガル、アラゴン、ナヴアールの三國勃興して、割據せり。カスチルを最大とし、ナヴアールを最少とす。

三五 土耳古の勃興を問ふ

答 東ローマも、バグダッドも、埃及のカリフ（ファチマイト家のカリフにして、バグダットより獨立せり）も、皆銷沈したる時に當りて、土耳古人勃興して、此れ等の國土に迫れり。十一世紀の始には、セルジューク族の土耳古はシリア、パレスチナを取り並に小亞細亞の沿岸を掠めて、歐洲に入らむとせり。是に於いてか、東西兩洋の一大衝突を生ぜり。これを十字軍といふ。

三六 十字軍の原因を問ふ

答 パレスチナのエルサレムは、イエスの墓ある地なり。さればキリスト教徒にして、是の地に巡回して、靈場を拜する者多かりき。而して其のサラセン領となるや、巡禮者は幾多の迫害を蒙りぬ、更に土耳古領となるや、暴逆甚しく、幾多のキリスト教徒は、

此の地にて殺されたり。此の時アミアンの一僧ペーターなる者、自ら此の地を巡りて、土耳古人の暴を見、歸りてローマ法王に、聖地を恢復して、キリスト教國の有とするの必要を說き、更に自身は伊佛を廻りて、此の事を煽動せり。法王ウルバノ二世亦其の必要を認め、一〇九五年を以て、クレモントに大會議を開き、僧侶、武門、庶民の面前にて熱血を濺ぎて聖地恢復の、神意なるを演說しければ。聽衆皆な感激し、玆に十字軍は起れり。遠征隊の兵士は、右肩に十字の徽章を附けたるが故に、これを稱して十字軍といふ。

三七 十字軍の顚末を略記せよ

答 十字軍には數回あり。それを畧記すれば左の如し。

第一回、一〇九五年佛の烏合の兵、先驅となれりしかど功なく、翌年佛の下ローレンス侯ゴッドフロア盟主となり、ギリシヤを經て小亞細亞に入り、ニカヤ、アンチオークに土耳古を破り、一〇九九年を以て聖地を恢復せり。

第二回（一一一一年——一一四九年）第一回の十字軍にてエルサレム王國建立せられ土耳古の勢力衰へしが、アレッポーのサルタン奮起して、イーデッサを陷れしかば皇帝コンラッド三世及び佛王ルイ九世協力して兵を送りしかど功なく、一一八七年聖地は再びサルタンの有に歸せり。

第三回（一一八九年——一一九二年）エルサレムの亡ぶるや、皇帝フリードリヒ一世は陸より、佛王フヒリップ、英王リチヤード一世は、海より遨ひたれど、功なくして歸れり。

これより後一二七〇年に至るまでに、四回の十字軍起りしかど、何れも功なく、且つ十字軍にして、東ローマ帝國の内亂に關係するなどありしかば、當初の目的たる聖地恢復は遂行せられざりき。

三八 十字軍の結果如何

答 十字軍とは東西洋の大衝突なり。果を約言すれば次の如し。

（一）聖地を失ひたれど、土耳古人の勢力を鎩ぎて歐洲に深く侵入せしめざりしこと。（後の條を參照せよ百十二頁）

（二）封建制度の衰退せること。即ち數學理學等の發達これなり。

（三）サラセン文化を輸入したること。

（四）異鄉を跋渉したるが故に地理上の見聞を進めたること。

（五）自由市府の發達せしこと。

（六）法王權及びローマ教會の權力增長したること。

（七）騎士の制度完美したること。（騎士に就いては後の條を見よ）

三九 十字軍の餘波を畧記せよ

答 十字軍とは異教者征討の意なりしかど、いつしか轉じて異端者征伐となり、更に轉じて法王の命令に背く者をも征伐する名とはなりぬ。これ擬十字軍なり。此の擬十字軍を引き受けたるはフリードリヒ二世帝にして、其の子にしてシシリー王たるマンフレッドも之れが爲に苦めり。マンフレッドはプロバンス王シャールのために殺され、次でマンフレッドの女の婿ペトロとシャールとの間に爭亂絶えず、其の結果シシリーは二王國に分裂せり。ペトロはシシリーに在り、シャールはナポリに在りき。去れば後者を稱してナポリ王といふ。

當時歐洲北部の住民にして、キリスト敎を奉じたるはポーランド人のみなりき。此のポーランド人は隣國なるプロイセンと相爭ひき。當時歐洲にはチユートン組と稱する騎士ありて、異敎者征伐のためには、誰人たるを問はず應援を與へしかば、波瀾人は、此の組に援を求めて、プロイセンを攻めり。騎士は一二三〇年を以てプロイセンを滅ぼして、此の地をチユートン組の根據とせり。

四〇 成吉思汗の事蹟を略記せよ

答 蒙古の曠野に崛起したる偉人テムヂン（鐵木眞）は一二〇六年を以て、斡難河上に

て帝號を稱しぬ。群臣彼れを稱して成吉思汗と云へり。彼れ西夏を亡ぼし、金を蠶食し、中央亞細亞の二強國カラキタイ、ホラズムを征服し、印度、波斯に突入して、威風山河を震動せしめたり。

四一　蒙古の版圖を問ふ

答　成吉思汗は、颶風の如き勢を以て亞細亞に跋扈し、カクタイ次いで帝となれり。此のときカクタイ（窩濶臺）の甥バツー（拔都）は西方を經畧したり。先づブルガリアを滅し、ロシヤを進略し、一二四一年ポーランドに入り、匈牙利を蹂躙し、墺太利に突入せり。此の時ローマ法王は、十字軍を起さむとを企てたれど、成立せざりき。バツーは更に征服を逞うせむとしたれども、カクタイの訃に接して軍を回し、別隊はアドリアチック海岸を掠めて歸りぬ。かくてバツーは、一二四三年を以てヴオルガ河畔のサーライに都を奠めて、欽察國を造れり。次に成吉思汗の孫の一人なるフラーグ（旭烈兀）は、バグダッドを陷れ、シリアを畧し、ダマスコスを陷せり。此の時元は亞細亞東部を統一し、中央亞細亞は察濶臺國となれり。大汗忽必烈の威名天下を轟かし、法王も西歐の國王も、皆之れが歡心を買はむとを計れり。有名なるマルコポロが忽必烈と法王との間に斡旋の勞を取り、支那内地を漫遊し、印度洋を經て歸國せるは、此の頃の事なり。彼れの日記中に、日本の名見ゆ。これ日本の名が歐人間に傳へられたる始めなり。

（附）當時に於けるロシヤの狀態を問ふ

フヒン人及びスラヴの間に突進したる瑞典人の一部なるルス族の酋長ルーリツクは八六二年を以て、ノヴゴロッド城を建てスラヴ部を支配せり。其の一族中、更に南下したるものありしが、後に兩者一に合しぬ。かくてキーエヴを首府とし て、漸次に發達したり。然るに蒙古軍のために蹂躙せられて、折角芽を出したるロシヤは、全く意氣銷沈して、それより長く史上に現れざりき。されば蒙古人の勃興は、東西の歷史に、至大の變化を生じたるものと言ふべし。

四二　封建制度の大要を問ふ

答　初めチュートン人のローマに侵入するや、其の酋長及び部下等、皆分に應じて土地を私有したり。其の土地を私領（アロット）といふ。こは世襲なりき。然るに酋長にして、大なる土地を領せし者は、これを割きて、部下の功績ありし者に與へり。これを封土（フィーフ）といふ。封土は酋長即ち王の許可ある内は所有者の權内に歸せり。これと共に狹小の土地を私有せる者は、これを統治するに苦み、これを大なる土地所有者に奉り、改めて封土として所有したるもありき。是に於いて君臣の關係生ぜり。臣たる者は王の命に從つて兵を出し、或は金錢を奉るの義務を負ひ、王は亦其の臣下を保護する

の責任を有せり。尙ほ社會の下層には小作人、農僕、奴隷の三區別ありき。封建貴族等は、皆壯大堅固なる城壁を構へて其の周圍には臣下及び農民を置けり。これ封建制度の大要にして、其の制度は、十一世紀頃には全歐洲に行はれたり。

四三　封建制度の衰退したる原因を問ふ

答（一）十字軍の起るや、小なる諸侯等は軍備を得んがために土地を賣り、或者は遠征中に死して、其の家斷絶したるが故に、諸侯の數大に減じたり。

（二）前條の事情あるに加へて、王權大に增加し、從つて國家統一の思想起りたり。

（三）チユートン人侵入の際に、損害を蒙れる自由市の再興したると。ロムバルド同盟、（十二世紀）ハンサ同盟（十三世紀）等は、いづれも自由諸市の協同にして、封建制度に反抗せり。

（四）火藥の發明と共に、城壁甲冑等の無用に歸すると共に、延いて封建制度も衰退せり。

（五）法王は國王或は下民に左袒しこれて諸侯と爭へり。亦原因の一なり。

以上五箇の原因は。封建制度を衰退せしめたる重なるものなり。

四四　騎士とはなにものぞや

答　中世史に於ける封建制度の粹ともいふべきは、騎士なり。その起源を尋ぬるに、チユートン人種の未だ野蠻の狀態にありて、强者の弱者（殊に婦女子）を困むるや、これを救はむとする者起り、馬上にて諸方を遍歷したり。これに附加したるは、キリスト教の博愛主義と、チユートン人本來の敢爲の氣象なりき。この風漸次に發達して、遂には騎士の制をなせり。男子は七才にして城中に入り、貴婦人の扈從となりて禮節を學び、十四才にして騎士に從つて、剛毅の精神を養ひ、武術を學び、二十一才にして試驗を受けて始めて騎士となる。正義を尙び、慈悲を旨とし、教會を守り、柔和を主として、婦女子を庇護敬重せむことを誓つて後、諸方を遍歷し、勉めて其の志を全うせむとす。なほ其の目的のためには、試合を行ひたるともあり。斯くの如く、博愛、優美、剛毅の性を養ひ、名譽を重んじたりと雖も、其の弊害としては、虛名、虛飾を尙ぶに至りぬ。騎士の完美時代は、十字軍時代にして、これが爲めに法王の權力は大に擴張せられたり。然れども火藥の發明以來、角鬪の術異るると共に騎士の制も亦衰退したり。

四五　神聖ローマ帝國の選擧侯の來歷を問ふ

答　大空位以後の獨逸は紛擾を極めたれど、ハプスブルグ家のルードルフの帝位に上るや、伊太利を棄てゝ、內國の統一に力を盡せり。ボヘミヤ王より墺太利を奪ひて、其の子アルブレヒトに與へたり。これ墺太利國の始めなり。されどルードルフ王の歿後は亦

もや紛亂を極め、諸侯互に權威を伸張せむとを計りぬ。さて一三五五年を以て、カール四世の位に即くや、所謂ゴールデン、ブルを發布して、帝を選擧する權利ある諸侯を定めたり。マインツ、トリール、コローンの三大僧正と、ボヘミヤ王、ザクセン侯、パラチ子ート伯、ブランデンベルヒ伯との七人は、即ち選擧侯と定められたるなり。かくて後シギスムンド、アルブレヒトを經て、墺太利のフリードリヒ三世即位せり（一四五二年）此の帝を以て、ローマにて帝冠を戴ける最後とす。シギスムンドの朝より、獨逸の勢力衰へて、歐洲文明の中心たるを失ひ、フリードリヒ以後は墺太利家のみより帝號を稱する者を選擧せり。

四六　伊太利自由諸市の勃興を問ふ

答　獨逸帝國の衰退と共に、伊太利の狀態一變して、諸方に獨立の國家あるに至れり。所謂自由諸市なるものこれなり。十三世紀に於いては、ヴインコス家がミラン侯となり、次いでヴエニス、ゼノア、フローレンス等起つて共和政治を組織したり。此れ等の諸市は皆商工業を奬勵したれば、市内繁榮を極めたり。殊にフローレンスの如きは、十五世紀に至りてメヂマ家起つて、商業、文學、美術の中心となれり。

四七　法王權の衰退を問ふ

答　ローマ法王は世界の王の王たるの權力を有すと稱し、且つ之れを實際に示したりしかど、時勢の進歩は、之れを許さず、永く獨逸帝と爭へり。それより後は、漸次に法王の權勢衰へて、諸國王は、其の命を奉ぜざるに至りぬ。而してグレゴリー十世の法王となるや、獨帝と和解し、且つ東西兩教會をも合一せむとを計りたれど、幾許もなくして死したれば（一二七六年）其の目的は充分に遂行せられざりき。後ボニフエース八世の法王となるや、法王權を昔日の如く、大ならしめむと欲して、遂に佛國フヒリップ四世と衝突するに至れり。フヒリップは王權の擴張を圖りたる王なり。彼れ兵を發して法王を捕へ、法王は後幾許もなくして身退りけれども、佛王はクレメント五世を法王に推し、佛の南方アヴイニオンに其の居を定めしめたり。（一三〇九年）爾來法王の此の地に在ること七十年、恰も佛國の一屬國の如くなりき。其の後ローマにも法王を稱するものありき。斯くの如く同時に二法王のあるは、紛議を生ずる基なれば、獨帝シギスムンドは、一四一五年を以てコンスタンスに會議を開きて二者を和解し、マルチン五世を推して法王となせり。

四八　ウイックリッフ及びジョン、ハッスとは何人ぞ

答　英國のオックスフオードの學者ウイックリッフなる者、ローマ敎會の背理、就中乞士（メンヂカンツ）を出せるドミニック派及びフランシスカン派の背理を攻擊したり。

其の說流れてベーメンに入り、ジョン。ハッスなる者、之れを主張しければ、ローマ敎會大に怒りて、コンスタンスの決議により、彼れを焼き殺せり。ハッスの門徒大に憤つて、法王の權力を鏃かむことを計りたれど、亦効なかりき。

四九 英王エドワード一世の治世を問ふ

答 ヘンリー三世に嗣いで英吉利王となれるエドワード一世は、ウエールスを合併し、次いでスコットランドをも併呑せむと謀りたれど、其の王ロバート、ブルース善く戰ひて、志を果さざりき。之れと共に佛國と兵を交ひしかば、軍費を要すること多く、遂に貴族等と軋轢を生じ、其の結果、國會の開設となり、貴族院及び衆議院の二部確立し、庶民の基礎確固たるに至れり（一二九五年）これ英國憲法史上、最も重要なる時期なり、尙此の王の世に政府組織及び租稅法の改正ありき。

五〇 百年戰爭の原因を問ふ

答 英佛は元來不和なりき。佛のフヒリップ四世の歿後、其の三子相嗣いで國王たりしが、遂に男系なきために、ヴアルワー家の者立つて、フヒリップ六世となれり。（一三二八年）時の英王はエドワード三世にして、其の母后は、フヒリップ四世の女なりしかば、英王は佛王たるの權利ありと稱し、佛國之れを承認せざりしかば、こゝに有名なる百年

戰爭を起せり（一三三九年——一四五三年）

五一 百年戰爭を略述せよ

答 一三三九年を以て大戰爭の端を開けり。佛軍概して利あらず、加ふるに內國に商農民の叛亂ありしかば、一三六〇年を以て和を講じ、佛國は、ブロージ、ギーエン、ガスコニ、カリスを英に讓り、英王は佛王たるの權利ありといふを撤回せり。一三八〇年を以てシヤール六世の佛王となるや、橫暴にして國內治らざりしかば、英王ヘンリー五世機乘すべしとなし、直に佛に亂入して大勝を得たり。一四二〇年トロアイユの和議に因りて、シヤールの死後は、ヘンリー佛王たるべしと約しぬ。幾許もなく、兩王死せしかば佛人はシヤール七世を王とせり。英人怒つて兵を派遣し、連戰連勝、破竹の勢を以て佛兵を破り、佛軍は僅かにオルレアンの城を守るのみなりき。此の時現れたるを、有名なる女丈夫ジヤン、ダークとす。彼女は善く兵を用ひ、敗軍の佛兵を鼓舞し、勝ち誇りたる英軍を擊退せり。かくて後は英軍利あらず、遂に一四五三年を以て和を媾せり。これに依つて英國は、大陸に於いては、僅かにカレーの一地を保ち得たるのみ。

五二 佛國王權の確立せる時代を問ふ

答 佛國王權の確立は、百年戰爭の後に在り。此の大戰爭に因りて、國力疲弊したりと

雖も、由來隆運に向ひし場合なれば、シャール七世の子、ルイ十一世の即位（一四八一年）以後は、大に國家統一に盡力し、一方には法王權及び諸侯の權力を減殺したり。而して其の勁敵たりしバルガンヂーの大部分も、此の王の世に、佛王の領土となりぬ。次でシャール八世の朝には、諸侯國も概ね併呑せられたり。

五三　薔薇戰爭を畧述せよ

答 英國フランタヂエネツト王家の斷絶するや、ランカスター家之れに代りぬ。ヘンリー四世是れなり。然るにヨーク家のリチヤードは、エドワード三世の子なりしかば、自らこそ英王たるの權利ありと稱し、茲に兩家の交戰を起せり。（一四五五年）其の結果ヨーク家勝つて、リチヤードの子エドワード立つて四世となり、エドワード五世（暗殺せらる）を經てリチヤード三世位に上りき。彼れ無道の君主にして國民の怨を買ひし時に當り、ランカスター家のヘンリー、チユードルは、佛の後援を以て王を破り、代つて英王となり、故エドワード四世の女を妃とせり。ヘンリー七世これなり（一四八五年）こゝれよりチユードル王家起る。因に言ふ、此の戰爭を、斯くの如く名づけたるはヨーク家は軍旗に白色薔薇を、ランカスター家は赤色薔薇を染めたるか故なり。

五四　瑞西の獨立を問ふ

答 獨逸の衰退するや、伊太利及び獨逸の間に、新國家組織せられたり。これを瑞西國といふ。其の顚末を尋ぬるに、シュワイツ、ウリー、ウンテルヴアールの三州は、ハプスブルグ家の領地なりしが、州民其の羈絆を脫せむとを謀りぬ。墺太利兵之れを鎭壓せむとするや、此の三州同盟して（一二九一年）墺軍に當り、一三一五年モルガルテンの戰に勝ちてより、新に加盟する者多く、尋で一三八六年ゼムパハの戰に墺軍を破り、一四四四年佛軍に勝ち、遂に十五世紀の末に至りて墺太利人を國外に放逐し、十三州の聯邦國を組織したり。

五五　オツトマンの勃興を問ふ

答 元の忽必烈の歿するや、蒙古諸國の勢力衰へて振はざりき。此の機に乘じて蝟起したるは、オツトマン族の土耳古人なりとす。此の一族次第に版圖を擴め、一三四三年には、バルカン半島に渡つて、アドリアノープルを陷れて都とせり。而してバヤージードの王となるや、東ローマ帝國及び南東歐洲を蹂躙せむとせり。然れども茲に意外なる障碍ありて、オツトマンの勢力を挫きたり。これをチムールの經畧とす。

五六　チムールの事蹟を問ふ

答 ヂヤガタイ、イルカンの兩國紛亂を極めたるの時に當りて、ヂヤガタイに一偉人現

れたり。チムールこれなり。彼れ一三九六年を以て、ヂヤガタイを一統し、イルカンを征服し、欽察を侵し、ロシヤの中央部に至り、南印度を征略し、轉じてシリアより小亞細亞に突進して、オツトマンの軍を破り、（一四〇二年）晩年明を討たむとして果さず、一四〇五年を以て歿せり。されど其の死と共に、大なる領土は四分五裂の狀となれり。是に於いてかオツトマンは再び勢力を養ふを得たり。

五七　東ローマ帝國の滅亡を問ふ

答　チムールの死後、オツトマンは其の領土を恢復せり。此の時に當りて東ローマの領土は、僅かに帝都の附近のみにして、其の他は或は土耳古領となり、或は獨立し、或は埃太利の版圖に加へられたり。マホメツド二世の土耳古王となるや、大兵を以てコンスタンチノープルを圍めり。ローマ法王は、東帝コンスタンチアヌス、パライオロブスを援けむが爲に、十字軍を起さむと計りたれど成立せず、遂に一四五三年五月二十九日を以て、帝都破れ、皇帝は自殺せり。これを東ローマ帝國の滅亡とす。土耳古は是れより、クリミア、トレビゾンドを取り、ベツサラビアに至り、シリア、埃及を征服せり。されど一四八一年マホメツド二世の死後は、西方侵畧を中止せり。

五八　ロシアの獨立を問ふ

答　蒙古のために蹂躙せられたるロシアのモスコー大侯は、次第に勢力を得て、常に蒙古の羈絆を脫せむことを謀れり。而してイヴアン三世の時に至つて、欽察を破り、一四八〇年を以て全く獨立したり。欽察は一五〇二年クリミヤの爲に滅されしかば、ロシアは漸く西方に其の地を擴張するを得たり。

五九　ポーランド及びハンガリーの十四世紀に於ける關係を問ふ

答　ハンガリーは十四世紀の初めよりは、アンジユー家の王を戴き、ルイス王の世には、ポリランド其の下に在りき。されど其の死後ポーランドは、リシユエラア王ヤゲロンを王とせり。ヤゲロンの時に當りてポーランドの勢力大に增進し、ロシアの大部を取り、プロシヤの西部を畧し、土耳古と接したり。又土耳古の西進を防ざたるは、ハンガリー及びポーランドの二國なりき。

六〇　スカンヂナヴィアの統一を問ふ

答　同半島の三國は、一三九七年、丁抹の王女にして、諸威の女王たるマーガレットの下に統一せられたり。これをカルマーの合同といふ。一四四八年を以て、オルデンベルヒ家のクリスチアン一世立つて三國の王となれり。今日の丁抹王家の祖なり。

六一 西班牙の統一を問ふ

答 十五世紀中半に於ける西班牙國を見るに、アラゴン、カスチール、ナヴアール、グラナダの諸國ありき。グラナダは回々教徒の根據地なり。然るに一四六九年を以て、アラゴン王フエルヂナンドと、カスチール女王イサベラとの結婚に因りて、此の兩國は合併せり。これよりフエルヂナンドは、西班牙の統一に意を注ぎ、一四九二年を以て、グラナダを平定して回々教徒を國外に放逐し、一五一二年を以て、ナヴアールを征服せり。これより西班牙の勢力大に進み、近世史の初に於いては、歐洲最大の國家として、四隣に威を振へり。

六二 喜望峰航路の發見を問ふ

答 葡萄牙人は夙くより航海に從事し、十五世紀の初には、盛に亞非利加の西岸、或は大西洋の諸島に渡りぬ。航海者ヘンリー公（一三九四年——一四六〇年）の如き尤も有名なる航海者なりき。而して一四八六年にはバルソロメウ、ヂアズなる者、今の喜望峰に至り、次でヴアスコ、ダ、ガマなる者、喜望峰を巡つて、印度に到る航路を開けり。（一四九五年）これより後、當時まで東洋及び歐洲間の貿易を一手に引受け居たるアレキサンドリア及びヴエニスは衰退せり。

六三 新大陸の發見を略記せよ

答 伊太利人コロムブスなる者、西方より印度に至るべしと確信し、其の航海を企むが爲に、諸國の王に遊說したれど容れられざりき。最後に西班牙女王イザベラの知る所となり、資金を獲て、船舶三隻を艤し、一四九二年を以て出帆し、渺茫たる太洋に、幾多の困難を重ねたる後、新陸地を發見せり。今の西印度諸島これなり。かくて後彼れは二回の航海を企て、一四九八年を以て、米大陸オリノコ河口に到着せり。

アメリカの名は、コロンブスの後に、南米を探檢したる葡萄牙人アメリゴの名に基けるなり。

六四 コロンブス以前に米國に渡りし歐洲人ありしや

答 コロンブス以前に於いて、米國に渡りたる歐洲人ありき。スカンヂナヴイア人これにして、彼れ等は今のアイスランドより、グリーンランドに往き、更に米國に進みて、一三〇〇年頃までは殖民を送れり。然れども其の殖民地と本國との關係絶えたるが故に、世人米國あるを知らざるに至れり。

六五 マゼランの世界一周航海を記せ

答 航海冒險の事起るや、葡蘭牙人マゼランなる者、一五二〇年を以て本國を解纜し、南米の南端を廻つて太平洋に浮び、印度に往き、喜望峰を巡つて歸國せり。これより地球の球形說は、世人一般の承認する所となれり。

そも〳〵ローマ教會は、地球平坦說を教へけるが、西班牙人セブカ之れに反對して球形說を唱へり。當時此の說は、邪說として斥けられたれど、コロンブスの米大陸發見に次いで、マゼランの世界一周航海あるに至りて、漸く確立したり。これより信仰上思想上に大變動を生ぜり。

六六　文明史上の暗黑時代とは何れの時なりや

答 中世紀の歴史は、チユートン人の活動せる時なり。然るに此の人種は、文化進まず文學美術の何者たるを解せざりしが故に、そのこれを解するに至るまでは、文藝は全く萎微したり。五世紀より十一世紀に至る間これなり。加ふるに此の間は紛亂に紛亂を次ぎ、文藝の研究の如きは、殆ど顧るの餘裕あらざりき。これ暗黑時代にして、此の間僅かに文藝の命脉を保ちたるは僧侶の徒なりとす。さて此の時に於いて、吾人の記憶すべきは、英人ヒード、スコートス、アルクイン、及び法王シルヴエスター等なり。されど一面より此の時代を見れば、これローマ文明が、粗野無學のチユートン人を敎化しつゝありし時代なり。

六七　大學校の起源を問ふ

答 十一世紀の末代より、チユートン人の智力漸く進み、各國皆な智識上の競爭を試むるに至れり。かくて十三世紀に至るや、諸國に大學校の設立を見る。これより先き僧侶は敎育の事を司りつゝありしが、サラセン文化の刺激を受け、先づ巴里に大學校起り、尋いでオックスフオード、ボロンナにも設立せられ、十五世紀には歐洲中、四十の大學校を數ふるに至りぬ。これ等は文學、科學、法學、醫學を敎授せり。

六八　暗黑時代以後の文學を問ふ

答 十一世紀に至りては、スコラ派と稱せらるゝ哲學起れり。その泰斗をアクイナス（一二二七年——一二七四年）とす。こは形而上學を專攻せる學派にして、此の傍には實驗哲學を唱へたるものあり。英人ロージヤーベーコンこれなり。さて文學の方面にては十字軍以後に於いて、獨逸に叙事詩ニーブリンゲン、リード作られ、西班牙には十二世紀頃に叙事詩シッド作られ、英國には詩祖チョーサー（一三四〇年——一四〇〇年）出で、伊太利には、有名なる大詩人ダンテ（一二六五年——一三二一年）出でゝ千載不朽の大作「神曲」を作れり。ボッカチオ（一三一三年——一三七五年）ペトラルカ（一三〇四年——一三七四年）亦伊國の詩人なり。

六九 サラセン文化の特色を問ふ

答 中世紀に於ける文化の中心は、むしろサラセン人なりといふも可なり。其の特色は空理を厭うて、今日の所謂科學的研究を尚びたるに在り。彼れ等は到る處に、學校、圖書館、博物館を設けて、研究の便を計れり。その學問にして、著るく發達せるは植物學、化學、理學、醫術、天文學等にして、殊に數學は、尤も進歩したり。今日吾人の使用するアラビヤ數字は、元來は印度人の發明なれど、歐洲に之れを傳へたるは、サラセン人なりとす。次に美術文學も亦進歩し、建築には在西班牙のアルハンブラ宮殿を今日に傳へたり。これ同國美術の精華なり。

七〇 中世史の美術を問ふ

答 中世の建築は宗教と深き關係を有す。初め流行したるをビザンチン式といふ。ローマ式の變躰にして、コンスタンチノープルのソヒア寺院これが標本なり。次いでゴシック式起れり。尖穹形なり。この後前の二式を折衷したるものをロマネスク式といふ。繪畫は十五世紀より發達し、レオナルド（一四五二年——一五一九年）ミケランゼエロ（一四七四年——一五六三年）ラフエール（一四八三年——一五二〇年）チチアン（一四七七年——一五七六年）の四大畫伯現れたり（以上皆な伊太利人）

七一 中古の三大發見を擧げよ

答 火藥、磁石、活字の三發明これなり。火藥は十四世紀の初め、東洋より輸入せられたるものにして、十二世紀頃には一般の使用する所となりしが、其の航海に應用せられしは十五世紀の始めなり。活字は一四四〇年獨逸人グーテンベルヒに依りて發明せられ、次でシエッフエル之れを改良せり。これより書籍の印行容易となり、知識の普及甚だ迅かなりき。

七二 文藝復興とは何ぞや

答 文藝の復興とは、キリスト教理に對して、古學、即ちギリシャの研究を勉めたる風潮をいふ。此の風潮や、人智の進歩と共に勃興したれども、就中大原因となりしは、コンスタンチノープルの陷落なりとす。元來此の都は、ギリシャ文明の蘊奥を究めたる學者の巢窟なりしが、オットマンの襲撃に遭うて、彼れ等は伊太利其の他の國に難を避けたり。即ち學者が、歐洲に分散したるなり。これより古學の研究益す盛大となれり。

近世史

一　近世史の特色を擧げよ

答　近世史の特色として看るべきは左の如し。

(一)ローマ法王は各國の政治の上に立つと能はざるに至れり。即ち宗教と政治との分離これなり。

(二)諸方に於いて、小國が大國の下に統一せられたり。

(三)中世の各國家は、宗教上の動機に依りて聯合したれども、近世に入りては政治上の原因を以て聯合するに至り、是れより國際公法の發達を見る。

(四)國力平均の呼び聲を高めたり。

(五)航海術の進歩と共に商業大に發達せり。

(六)商業の發達と共に實業社會の勢力增進せり。

(七)文化の普及甚だ大なり。

(八)耶蘇教が社會改善の動因となりて博愛事業起れり。

此れ等は近世史の特色なりと謂ふべし。

二　宗教改革の原因を問ふ。

答　此の原因には種々あるべしと雖も、要するに左の二大原因に歸すべし。

第一は當時の宗教界の腐敗これなり。僧侶の悖德、教會の腐敗は、夙くより有識の憂へたる所にして、これが洗滌のためには數多の人士犧牲に供せられたり。これ宗教內部に於ける原因なり。

第二は外部の原因なり。そは文藝の復興と共に、人智進み、聖書の研究、漸次に盛大となり、或はベブリユの原書さへも、讀破するに至れり。これと共に僧侶等の行動或は訛敎が、經典の主旨に違背するも明瞭となれり。

此の二原因あるが故に、改革の氣運は、歐洲の天地に瀰漫したるなり。

三、何故に宗教改革は先づ獨逸に叺りしか

答　獨逸に於いて此の大改革生じたるは、當時の情況より推して知るべし。當時ローマ法王は、權力衰へたるが故に、歐洲の國家中、王權の强大なるに向つては、干涉すると能はざりき。然るに獨逸は、當時一統せる政治なく、國內諸小邦に分裂せる狀態なりしが故に、法王は是れに向つて干涉すること多かりき。これ同國內に、改革の氣運尤も高く、且つ其の先驅者となりし所以なり。

四　マルチン、ルーテルとは何人ぞ

答 宗教改革の元祖なり。彼れは壯年の頃寺院に入りて僧侶となり、專ら聖書を研究して、時の宗教界が、甚しく經典の主旨に戻れるを知れり。かくて後ザクセン選擧侯に擧げられてウイツテンベルヒ大學の教授となれり。當時ローマ法王は、金錢に窮したる結果、贖罪符なる者を販賣し、之れが爲に財寶を喜捨する者は、其の罪滅びむと稱し、テツツエルなる者を獨逸に遣せり。テツツエルのウイツテンベルヒに來るや、ルーテルは是れ經典に違反せるものなりとて、九十五條の抗議を作り、是れを同寺院の門前に掲げたり。時に一五一七年十月三十一日。日頃より法王を悪める諸侯及び庶民は皆なルーテルに左祖せり。かくて後、彼れはライプチヒに於いてローマ教會を難じ、一五二〇年法王の諭旨書を焼き、公然ローマ教會の敵として現れたり。其の主張は僧侶は國家の權力に服すべく、獨立の國家的教會を組織すべく、又僧侶の結婚を許すべし、さいふに在りて是れと共に、經典に根據を有せざる一切の儀典を廢せよと論ぜり。これ新教と稱せらるゝ所以なり。而してルーテルを援けたる學者にして、功績ありしはメランヒトンとす。ルーテルが一生の事業中、特に記すべきは、經典の獨逸譯なりとす。（尚ほ後の條を參考すべし）

五　カール五世の領土を問ふ

答 シヤトレマン大帝以來、廣大なる領土を有したるはカール五世なり。其の血統を見るに左の如し。

獨逸帝フリードリヒ三世――マキシミリアン一世
（一四四〇年―一五一九年）

（一四九三年―一五一九年）（一四九三年―
ブルゴニユーのアリア

西班牙王フエルヂナンド ― 女王イサベラ ― 王女フアーヒ ― 墺公フヒリツポス ― カール五世

カールはフエルヂナンドに次いで西班牙王カルロス一世となり、マキシミリアン一世の崩去の後は、獨逸帝となりてカール五世と稱せり。去れば其の領土は、西班牙及び獨逸の外に、伊太利の大部分（シヽリー及びナープルス）サルヂニア等にして、歐洲中最大強國として威を振へり。

六　ウオームスの會議を問ふ

答 ルーテルの異說を唱ふるや、法王はカール五世と結んで、之れを壓倒せむが爲に、一五二一年二月を以てウオームスに會議を開き、ルーテルを召して其の說を變更せしめむとせり。然るにルーテルは却てローマ教會を非難せしかば、カールは彼を異端者と見做し、國内に之れを傳ふるを嚴禁せり。是に於いかルーテルの一派、大に激昂して、カール五世に當るに至れり。

七 法王とカール五世との衝突を問ふ

答 獨佛は長く恨を結べり。ルイ十二世の朝には、ナポリ(子ープルス)を得むとして失敗し、フランソア一世の時に至りては、カールの威勢を厭がむと欲して遂に干戈を交へり。中心となりては、ミラノ(ミラン)にして、佛國破れたり。斯くの如くカール五世の勢力旺盛なるや、法王は漸く彼れを忌み、今迄はカールに左袒したれども、飜つて佛國と結托し、佛國は再び獨軍と戰へり。此の時カールは伊太利に突進してローマを襲ひたり。法王冕けて和を請ひ、一五二九年を以て、ボロンナに於いて帝冠及び王冠をカールに授けたり。カールは此の間、ルーテル一派に對しては政畧上寛大なる處置をとれり。

八 スパエルの會議とは何ぞや

答 カール五世の法王と和を媾ずるや、再びルーテル一派を壓迫せむと欲して、一五二九年を以て、スパエルの會議を開き、未だルーテル説の侵入せざる地方には其の説を傳ふるを禁ぜり。此の時ルーテル一派大に怒りて縷論せり。これより此の一派をプロテスタント(新教)といふ。嚴格に縷證するの義なり。

九 ヌーレムベルヒの和議を問ふ

答 カール五世は大權を握つて、萬事其の意の如くなりしかど、獨り宗教上にては、新教の勢力を壓倒すること能はざりき。一五三〇年には、アウグスブルグに會議を開き、翌年を以て、國内の臣民は皆な舊教を奉ずべしと命令したり。是に於いてか新教徒は、シマルカルド同盟を造つて、法王及び國王に反對せり。然るに此の時、土耳古の回牙利を窺ふありしかば、カールはアウグスブルグの命令を撤回して、信教の自由を許し、新教徒の歡心を買うて、外敵に當れり。これをヌーレムベルヒの和議(一五三二年)といふ。かくて新教徒は十年間、何等の迫害も蒙らざるをとなりしかば、盛に布教に從事したり。而して南方獨逸の外は、概れ新教を奉ずるに至れりん

一〇 アウグスブルグの和議とは何ぞや

答 ヌーレムベルヒ和議に依りて、信教の自由を許したれど、尚ほカール五世は、新舊兩教の上に立つて、權力を逞うせむと欲して失敗せり。されば法王と結んで、亦もや新教撲滅策を講じ、遂に一五四〇年を以てザクセンのフリードリヒ選擧侯と戰へり。此の時ザクセ侯、カールに左袒し、フリードリヒ破れて選擧侯の資格を奪はれき。而してザクセ侯代つて選擧侯となりしが、元來新教徒なりしかば、忽ち佛王アンリー二世と同盟してカールに當り、カール破れて伊太利に逃れ、次で一五五五年アウグスブルグに會議を開きて、新舊兩教徒に同一の權利を與ふるを約せり。是れに依りて信教の自由確立し、

新教徒の基礎漸く堅固なるを得たり。

一一 ツウイングリーとは何者ぞや

答 瑞西國人は、法王の傭兵となりしこと數回なりき。而して全地の宗教界亦腐敗しければ、ツウイングリーなる者、奮然起つて、政治上及び宗教上の改革を唱へり。ツーリヒ人先づ之れに應じ、これより各所に改革の氣燄揚りぬ。ツウイングリーは一五三一年を以て、カツペルの戰に討死したり。これより後は新教の勢衰へ、舊教亦銷沈せり。而してツウイングリーの說は、枝葉の點の外は、ルーテルに同じ。

一二 瑞典、諾威、丁抹三國の宗教改革を問ふ

答 瑞典國民は永く僧侶及び貴族の壓制を受けて苦みけるが、一五二三年を以てグスタフ、ファーザを推して王となせるより平安を得たり。王は宗教には深く留意する所ありしかど、僧侶及び貴族の勢力を削らむが爲に新教を奬したれば、ルーテル一派の氣運大に揚れり。諸威及び丁抹も亦僧侶の專横に苦しみしが故に、國王貴族等相結んで改革派のために門戶を開放し、一五三六年のコツペンハーゲン會議を以て、新教を國教と定めたり。時の國王をクリスチヤン三世とす。

一三 カルヴアンの事蹟を問ふ

答 カルヴアンは佛國の宗教改革派の泰斗なり。元來佛國王、國會(高等裁判所)並に巴里大學は、舊教を奉じて改革派を壓迫したるが故に、新教徒は多く瑞西に遁れたり。カルヴアン亦同國に難を避けき。當時瑞西と佛國との間に在るサヴォヤ侯國ジエネヴアに、僧侶と人民との軋轢を生じたれば、カルヴアン之れに乘じて庶民を援け、忽ち政府を顚覆して新教國となせり(一五三六年)かくてジエネヴアの政權は、彼れが掌中に歸し、彼れは寺院制度を組織したり。カルヴアンの說は、ルーテルに似て稍過激なりき。而して文筆に依りて意見を發表したるが故に、勢力大に廣く、瑞西、英吉利、ニーデルランド等に其の信徒多く、亦佛國內には、彼れの主義に依れるユーゲノー派生ぜり。

一四 英古利及び蘇國に於ける宗教改革を問ふ

答 ヘンリー七世に嗣いで、ヘンリー八世の英吉利國王となるや、羅馬法王と親交を結びて、改革派に反對せしのみならず、ヨークの大僧正を擧げて大僧正とし、政教二權を握つて舊教を保護せしかば、法王は彼れを宗教の保護者と賞せり。然るに王の王妃カザリンと離婚して、妃の從者たりしアーンを王妃となせむとし、法王をして之れを承諾せしめむとするや、法王はカザリンの伯父に當れるカール五世の怒を畏れて諾せざりき。是

に於てか法王とヘンリー八世との交誼破れ、王は新教を國教とせり。此の後舊教徒の反對ありて、一たび舊教の主旨を、宗教規定に加へしが、エドワルド六世の國王となるや、再び新教の主義を採用したり。さはれ英吉利の新教とは、ルーテル説とは其の趣を異にせり。

蘇格蘭にては一五四二年ゼームス五世の崩じ、其の女メリー幼なりしかば、母后メリー攝政せり。然るに元來舊教徒なりしが故に、改革派を壓迫したれど、ノックスなる者の瑞西より歸國してカルヴアン説を主張するや、政府に反對せる貴族等之れに和し、新教の勢力大に增進し、一五六〇年メリーの崩去と共に新教は國教となれり。

一五　ジユスイト教派とは何んぞや

答　西班牙、葡萄牙には新教は侵入せずして、舊教のみ勢力を握れり。さて歐洲の天地に新教の氣焰揚るや、其の反動として舊教徒の奮起ありき。ジユスイト教派の組織これなり。こは西班牙の一僧イグナチウス、ロヨラが企圖したる者にして、一五四〇年を以て法王の認可を得たり。其の目的は、ローマ教會を保護して、其の威權を中世紀に於けるが如くし、且つ全世界の人民をして舊教徒たらしめむとするに在りて、これが爲には布教事業、學校等を起せり。

一六　ジユスイト教派の布教を問ふ

答　ジユスイト教派は、奮起して世界に宣教師を送れり。其の布教に從事するや、百難を事ともせず、身命を忘れて、異鄉に突進せり。南米、西印度、印度、支那の他方に、耶蘇教理の布教せられたるは此の頃にして、吾が日本には一五四九年即ち天文十六年を以て、クサヴイールなる僧侶に依りて傳へられたり。

一七　トレントの會議を問ふ

答　カール五世は新舊兩教を調和せむことを計りたれど志を遂げざりき。法王パウロ三世は一五四五年を以て、トレントに大會議を開きたるが、新教徒にして一人も出席する者あらざりしかば、法王の意志は何等の反對もなく通過し、ローマ教會は聖書と同一の價値を有すと決議せり。かくて後宗教裁判所を起して、苛しくも教會の主旨に逆ふ者は、之れを捕へて虐殺せり。これ新教に對する一反動にして、是れが爲に新教徒は大に困みたれど、勢力は毫も衰退せざりき。三十年戰爭なる者は、畢竟此の軋轢に起因せるものなり。

一八　カール五世の相續者を問ふ

答 カール五世は、子に對する失望の餘り、一五五六年を以て位を去り、弟なるフエルヂナンドに獨逸を與へ、王子フエリーペ二世は西班牙、ナポリ、ミラノ、ニーデルランド及び亞米利加に於ける西班牙領の王となれり。フエリーペは、母が葡萄牙王家より出でたるが故に、葡萄牙王系の斷絶を機として是れをも併呑せり。

一九 葡萄牙及び和蘭の東洋貿易に於ける競爭を問ふ

答 フエリーペ二世は舊教を奉じければ、國内に之れを布き、且つ英佛及びニーデルランドに於ける舊教徒を陰に陽に援けたり。其の結果としてニーデルランドの新教徒と、葡萄牙の舊教徒とは、東洋貿易上にて角逐したり。されど商權は、遂にニーデルランドの一部なる和蘭人の掌中に歸せり。

二〇 レパントの海戰を問ふ

答 カール五世と佛王フランソアとの衝突したる頃の土耳古王はソリマン二世にして、土耳古の勢大に進み、地中海には其の軍艦橫行して、佛西の海岸にして其の害を蒙りし處多かりき。さればフエリーペ二世は之れを鎭壓せむと欲し、大軍を起して、レパントの大海戰を開き（一五七一年）大に土軍を破れり。これより土國の勢力衰退せり。是れより先き土耳古の軍人社會勢力を得て王室の權利を侵害せり。これ其の勢力の劇かに衰

退せし所以なり。

二一 メリーの治世を畧記せよ

答 英王エドワルド夭折してヘンリー八世の女メリー即位せり。メリーは舊教信徒にして、フエリーペ二世と結婚し、內閣員は悉く舊教徒を以て組織し、且つ何事もフエリーペの意向に從へり。然れども一五五八年を以て身退かりしかば、一時は舊教の勢力揚りたれど、これに依りて再び衰退せり。（此の女王は佛と戰つてカレーを失へり。）

二二 エリサベスの即位と宗教との關係を問ふ

答 メリーの妹エリサベスは一五五八年を以て英王となれり。即位後直に宗教制を改めて、舊新兩主義の混合躰の監督教會を定め、三十九條の宗制を發表せり。此の時新教の一派にして、國王を至上權と思惟せざる清淨教徒（ピューリタン）起れり。

二三 エリサベスと蘇國メリーとの爭を問ふ

答 蘇國のメリーは先英王ヘンリー八世の姉なるが故に、英國たるの權利ありと稱し舊教徒を後援としてエリサベスに當れり。メリー亦佛王フランソア二世と結婚したり。一方に於いては西班牙のフエリーペ二世は、エリサベスに結婚申込みて失敗せり。然るに

メリーは佛王の死後歸國したるに、ノックス一派の新教蔓延し、且つ女王の再婚を非難すると激しく、メリーは難を避けてエリサベスに哀を乞へり。此の時舊教徒にして叛を企てし者ありしかば、エリサベスは、これメリーの使嗾に出づるものなりとて、叛徒を鎭定すると共に、メリー女王を死刑に處せり（一五八七年）

二四　英西の大海戰を問ふ

答 和蘭の西班牙に對して獨立を計れるや、エリサベスは公然之れを援けたり。フエリーペ二世大に憤り、一五八八年アルマダ艦隊百五十艘を送つて英國に戰を挑めり。英國は僅に三十隻の艦隊を以て之れに當り、アルマダ艦隊は大敗せり。この戰たるや、一面より見れば、新教の大勝利なれば、エリサベスは新教の首長として尊敬せられき。

二五　和蘭の獨立を問ふ

答 ニーデルテンドの地は、シヤーレマンの版圖に歸したる後、ロタリンギアの一部となり、次でブルゴニユー、マキシミリアン、カール五世の手に渡りぬ。而してフエリーペの此の地を領するや、カール五世の妾腹の子マーガレットをして是れを支配せしめたり。然るに支配者の壓制甚しく、人民大に憤りて、オランダ侯ウイルレムをして、新教徒の希望を歎願せしめたり。されど希望は容れられざるのみならず、フエリーペはアルヴア侯を遣はして、更に殘酷なる處置を行へり。ウイルレム大に怒り、英の後援を得て、公然叛旗を飜せり。西班牙軍之れを破ること能はざりき。一五七九年に至りてウトレヒトの合同成りて、北方七州は同盟し、ウイルレムを推して盟主とせり。かくて後一六〇九年に至り、フエリーペ三世は、遂にウトレヒト同盟の獨立を承認せり。和蘭の獨立即ちこれなり。而して南方十州は依然西班牙領たりき。今の白耳義これなり。此の後和蘭の貿易業大に盛大となり、西班牙、葡萄牙爲に壓倒せられ、一六〇二年には和蘭の東洋印度會社の設立成れり。

二六　バートロメウの虐殺を問ふ

答 佛のフランシソア一世、アンリー二世、フランソア二世等大に新教徒を壓迫したれども、ユーグノー派漸次に勢力を得て、シヤール九世の時には、新教徒と雖も、市外に集會すると得との命令を出せり。然るに王の母カトリンは、ギース黨と結んで新教を苦めんとを謀り、バルトロメウの大祭日を期して（一五七二年八月）ユーグノー派を虐殺せり。殺戮の續くこと三日、殆ど四萬五千の新教徒は殺されたり。

二七　ナントの勅令とは何ぞや

答 佛王アンリー三世の朝は、國内宗教の軋轢のために、麻の如く亂れたり。アンリ

四世の即位するや、國内何れの所と雖も、新教徒は禮拜を行ひ得べく、又新教徒たりと雖も、裁判官、財政官たるの權利ありと布告せり。これを一五九八年のナントの勅令といふ。王は宰相サリーを擧げて、實業を奬勵し、國威を揚げたり。更に西班牙及び墺太利の勢力を挫かむとを計りたれど、不幸一兇漢のために暗殺せられたり。

二八　三十年戰爭の發端を問ふ

答　カール五世に次いでフエルヂナンド一世、マキシミリアン二世を經て、ルードウイヒ二世の即位するや、新教徒を困むること甚しく、フエルヂナンド二世に至つて、更に殘酷なりしかば、新教徒はパラチナーテのフリードリヒ侯を推して王とせり。フリードリヒは英王セームス一世の義子なりしかば、新教徒は事ある日には、英國の傍觀するなかるべしと思惟したればなり。是に於いてかフエルヂナンド二世は、ワルレンスタイン及びチルリーの諸將をして、プリードリヒと戰はしめき。フリードリヒ破れて、新教徒の勢衰ふるや、丁抹王クリスチアン四世は、其の應援を企てたれど、何等の功なくして歸國せり。以上を三十年戰爭の第一期とす（一六一八年――一六二九年）

二九　グスターフ、アドルフとは何人ぞや

答　瑞典王グスターフ、アドルフは第二期三十年戰爭（一六二九年――一六三二年）の大立物なり。彼れは智勇兼備の大將軍にして、新教保護のためには、一命を犧牲にするも覺悟し、大軍を率ゐて獨逸に來り、ワルレンスタイン及びチルリーの軍を破り、北獸の獅子王と呼ばれたり。されど一六三二年十一月リシユリーの戰にて死したれば、瑞典軍は歸國して、王の女クリスチアナを立てたり。

三〇　リシエリウと三十年戰爭との關係如何

答　アンリー四世暗殺せられて、幼王ルイナ三世の即位するや、宰相リシエリウ王を補佐して、内は諸侯の勢力を減殺し、且つ新教徒の根據を奪はむとし、外は墺太利の勢力を鏃かむとを計り、經營一日も怠らざりき。されば時人稱して、リシエリウは歐洲第一の人なりと言へり。彼れは政畧上アドルフを助け、彼れの死するや、獨逸は列國の安穩を防害するものなりとの口實を以て、太兵を派遣せり。かくてフエルヂナンド二世逝きて、同三世即位し、リジエリウ死してマザラン之れに代り、佛將チユレン及びコンデの二人、克く戰ひて獨軍を困めたり。

三一　ウエストフアーレン條約を問ふ

答　アルレンスタイン逝き、多年の戰爭に、國力疲弊したる獨逸は、佛軍のために惱まされしかば、フエルヂナンド三世は、荐りに平和を願ひ、遂に一六四八年を以て、ウエ

ストファーレンに和議を結べり。これにて三十年戰爭の局を結べり。其の條約は西洋史中、尤も重要なるものにして、是れに依りて、

第一　瑞西、和蘭は公然列國の間に獨立國として認定せられ

第二　獨逸國内の新舊兩教徒は同等の位地に立ち

第三　佛國もカルヴァン派に信教の自由を與へ

第四　獨逸はメツツ、トウル、フエルゾン、アルサス、ストラスブルグを佛國に、西ポンメルン、ステツチン、ブレメンを瑞典に割讓せり。

かくの如く獨逸は其の領地を失ふと共に、勢力大に衰退したり。

三二　リシエリウの事業を問ふ

答　有名なる佛國の宰相リシエリウは、先づ王權の確立を目的とし、國會即ち高等裁判所の權力を縮ぎ、世襲の重役を廢し、官吏の俸給を減じ、地方所在の城廓を毀ちて暴徒の蜂起を防ぎ、且つ僧侶貴族たるを問はず、苟しくも國王の命に違叛する者あれば、假借なく之れを處分したり。彼れ亦新教徒を壓制し、僅に信教の自由を與へたるのみ。此の他陸海軍を擴張し、一六三五年には佛國中學校を設立して佛語の統一を謀り、學藝を奬勵せり。而して彼れの世にガゼット新聞創立せられ（一六三一年）之れには佛王ルイ十三世及びリシエリウの論文も掲載せられき。リシエリウは一六四二年を以て歿せり。

（イ）新聞紙の起源を問ふ

始め伊國ヴエネチアにて新聞紙發刊せられ、一枚をガゼット（新聞）の名辭之れに基く。次で佛のガゼットの價にて販賣せり。

三三　マザランとは何人ぞや

答　大宰相リシエリウの死に瀕するや、伊太利人マザランを擧げて後事を託せり。マザラン善くリシエリウの志を持し、幼王ルイ十四世を補佐して、佛國の利を圖りぬ。佛國の強盛時代（ルイ十四世の朝）は、これより初まれり。マザランは貴族黨の反對を受けて、一たび國外に逃れたれど、皇太后アンの信任により、再び朝に入り、内亂を鎮壓して、國威の伸張に盡したるを多かりき。彼れは一六六一年を以て身退りしかど、此の時、ルイ十四世既に成長したれば、國家の憂はあらざりき。

三四　コルベーとは何人ぞや

答　ルイ十四世の財政を助けたる理財家なり。彼れは實業商業の發達を計り、海外貿易を隆盛にし、佛の財政を裕にすると共に、歐洲全國の最大強國は、佛なるべきを望めり。其の一代には、東西印度商會の二會社を起し、亞非利加、加奈陀に通商を開き、更に加奈陀を通じて、日本と交通を開かむとをさへ企てたり。

三五　ルイ十四世一生の目的は如何

答 ルイ十四世は、佛國をして全世界の最大強國たらしめむことを目的とせり。リシエリウ、マザランの目的亦之れにして、王は其の意志を實行したり。されば其の一代は、佛國の勢力駸々として進み、歐洲の最大強國として畏敬せられたり。

三六　ニムエゲンの條約とは何ぞや

答 ルイ十四世の妃マリアは、西班牙王フエリーペ四世の女なりしかば、西王の死するや、佛王はニーデルランドの地を占領するの權利ありと稱して兵を動せり。然るに英國と瑞典とは和蘭を助けたれば、一先づ和を結び、更に瑞典の歡心を買ひ、之れを味方として和蘭を攻めたり。時の和蘭盟主は、オランヂ侯井ルレムにして、國民は自由を失はむよりも國土を滅すは優れりと覺悟して、佛の大軍を引き受け、海水を引いて防禦せり。英吉利と西班牙とブランデンブルク侯フリードリヒとは和蘭を助けたり。されば佛王も長く戰ふの不利なるを知り、一六七八年を以てニムエゲンの條約を結んで和を媾ぜり。此の條約によりて、和蘭は侵畧せられたる土地を恢復し、佛は西領ニーデルランドの一部を占領したり。

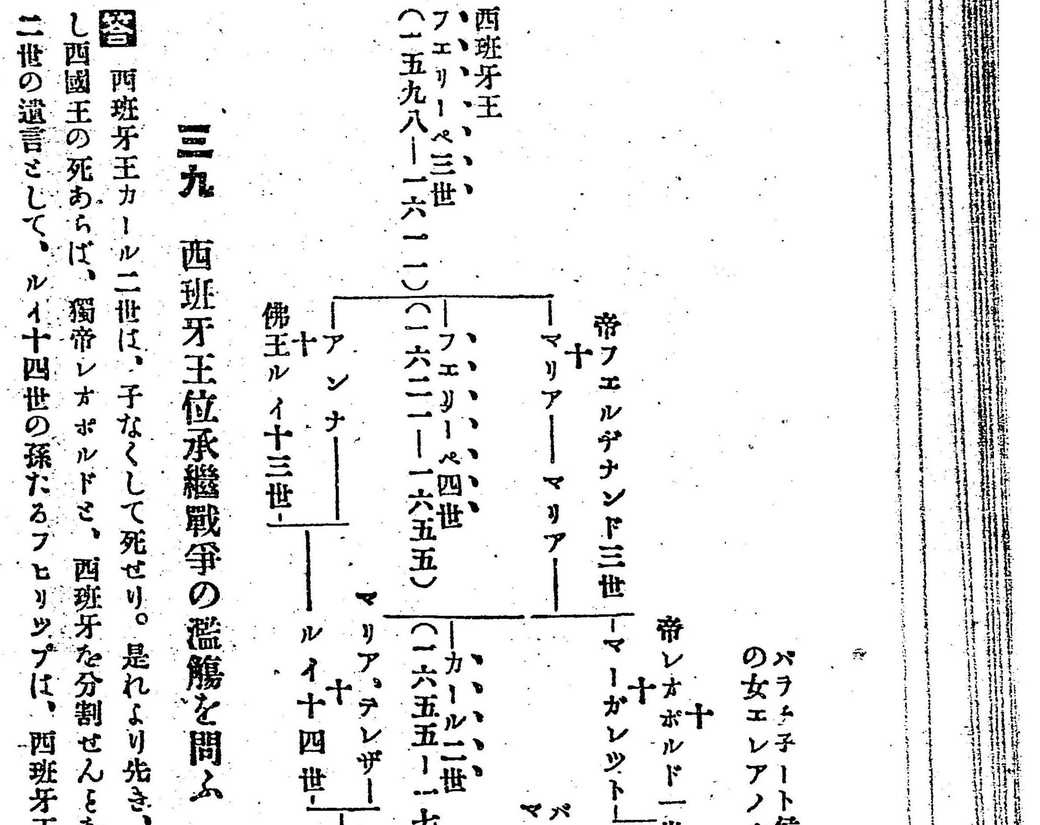
三七　リスウイック條約を問ふ

答 ニメゲン條約の以後は、ルイ十四世の慾望愈よ強り、ストラスブルグ、ルクサンブルグ等を奪ひ、他國の兵は皆な虚弱なりしと見做して、暴威を逞うせり。此の擧動に對しては、此の頃英國王に迎へられたるオランヂ侯井ルレム中心となり、瑞典、和蘭、獨逸、西班牙等と大同盟を結べり。さてルイ王は一六八九年を以て、パラチ子ートを併呑せむとするや、同盟軍大擧して之れに當れり。これより戰亂起り、一六九七年リスウイック條約を以て局を結べり。此の條約に因りて、佛は井リアム（井ルレム）の英王たるを承認し、ストラスブルグ及びアルサスの外に、ニメゲン以後に侵畧したる土地を還したり。

三八　西班牙王位繼承戰爭の血統上の關係を問ふ

答 これ歐洲の大亂なり、その戰爭の原因を明かにせむには、先づ血統上の關係を闡明せざるべからず。左に系統を掲ぐ。

◎注意　圈卷あるは西班牙國王にして（十）印を附したるは結婚の徽なりと知るべし



三九 西班牙王位承繼戰爭の濫觴を問ふ

答 西班牙王カール二世は、子なくして死せり。是れより先き、佛國ルイ十四世は、若し西國王の死あらば、獨帝レオポルドと、西班牙を分割せんとを約しぬ。然るにカール二世の遺言として、ルイ十四世の孫たるフヒリップは、西班牙王たるべしと有りければ

ルイ十四世は、これを機として、西班牙を併呑せむとせり。されど列國は、之れを傍觀せざりき。何となれば、フヒリップは幼少なるが故に、一朝國王となる時は、實權はルイ十四世の掌中に歸して、國力の平均失はるべし。是に於いか、英吉利、和蘭、サヴオヤ、葡萄牙の諸國は、獨逸に左祖して佛國に當れり。

四〇 ウトレヒトの條約を問ふ

答 西班牙王位承繼戰爭の、一七〇〇年を以て開始せらるゝや、英の將軍マルボロー、サヴオヤの將軍ユーゼーン、共に善く兵を用ゐて、佛軍を惱ませり。さればルイ十四世は、一たび和を申込みき。然れども同盟軍は、之れに應ぜざりき。然るにマルボローの國内に於ける信用を失ひ、且つ獨帝死して、カールの即位するや、列國は此の次にカールにして西班牙王とならば、結局フエリーペの四王たるが如く、國力の平均を失ふべしと思うて、同盟の誓を破りぬ。是に於いてか獨逸は一七〇四年を以て佛と和睦し、列國は、一七〇三年を以て佛と和を媾ぜり。これをウトレヒトの條約といふ。此の條約によりて、フエリーペは西國王と見認められしかど、西佛の合併は許されず、英は佛領ニューフアウンドランド、ノヴアスコチア、ハドソンを得、西班牙よりジブラルタル、ミノルカを奪へり。更にアッシント條約（西英間）によりて、英は爾來三十年間、毎年四千八百の黒奴を、亞非利加より米國西班牙領に輸入するの權利を得たり。次に獨逸は、ニーデ

ルランド、サルヂニア、ナポリ、ミラノの一部を占領し、サヴオヤ侯國は、シーリーを得て一王國となれり。

四一 ルイ十四世が内治を問ふ

答 ルイ十四世は、其の内治に向つては、國王即ち神なりとの主義を實行せむとを企てたり。これが爲には、貴族の勢力を鎌さ、宮中の儀式を壯嚴にし、勉めて無上權を有する者たらむとを計りぬ。亦文藝を奬勵し、佛國文學を以て、世界の文學たらしめむとせり。故に其の影響によりて、交際社會の言語は、佛語を以て基とし、禮儀の本は、佛式を用ふるに、歐洲の一般の習慣たるに至れり。

四二 ルイ十四世と宗教との關係を問ふ

答 ルイ十四世は、佛國全土を擧げて、舊教徒たらしめむとし、一六八五年にはナントの條令を撤回して、新教徒を困め、且つ其の外國に遁走するを禁じたり。されば新教徒等は窃かに國外に走りて、安全なる地位を覓めたり。當時佛國に於ける新教徒とは、多くは進歩主義の者なりしかば、此の條令の撤回と共に、國家の進歩に力を盡すべき人物は漸次に國土を見捨てたり。これ佛國が、ルイ十四世の以後に至りて、漸く衰退せる原因なりとす。而して遁走せるユーグノー徒を利用せるは英國なり。

四三 英國ゼームス一世と國會との衝突を略記せよ

答 一六〇三年を以て、エリサベス女皇の逝くや、蘇國のゼームス即位して英吉利王となれり。ゼームス一世是れにして、スチユアート王統これより起る。王は王權の擴張を計り、國會の權威を減殺せむがためには、種々の計策を用ひ、遂に國王神權説を以て國民に望めり。而して舊教を助けて、新教徒なる清淨教徒並に蘇格蘭に行はれたる長老教會徒を壓制したり。加之奢侈に耽りて、皇室費多額に上つて、下民其の負擔に困みしかば、國會は一六一四年を以て、王の歳入を否決せり。是に於いてか國會は解散を命ぜられき。これを無能國會といふ。さて王は獨裁を主張し、國會員は、人民に自由の權利ありと稱して、やがて一大衝突起らむとせしが、王の一六二五年を以て他界するや、衝突も一時は停熄したり。

四四 チャールス一世と國會との衝突を問ふ

答 ゼームス一世に次いでチャールス一世即位し、舊教を援け、且つ不正手段を以て歳費を徴收し、剩へ國王神權説を主張せしかば、國會は、其の協賛なくして國債を募集すべからざると、並に租税を課し、反對黨を捕縛すべからざるとを承認せしめたり。これを權利請願といふ。さて是れによりて、一年間王は頓税及び榜稅を納むるを得たれど期

限後に至りても、尙は之れを收めしかば、國會は之れを責めたり。然るに王は平然として是れに從はず、剩へ近衛兵を遣はして、議場に亂入せしめ、遂に國會を解散せり。時に一六二九年。これより國會を召集せざること十有一年間なりき。

四五　英國の長期議會とは何ぞや

答　チャールスは國會を召集せざること十一年なりしかど、三十年戰爭のために、幾多の問題生じたれば、已むを得ずして一六四〇年を以て國會を召集せり。この國會こそ十三年の長月日に亘りたれば、世に稱して長期議會といふ。

四六　チャールス一世と國會との戰爭の發端を問ふ

答　長期議會は、王が長日月間、國會を召集せざりしを咎め、且つ爾來は、國會の意向を問はずして其の解散を命ずべからざることを申出でたり。チャールス一世は、軍費の缺乏のため、已むなく是を諾したれど、直に國會の硬派の主領五名を捕縛せむとて、兵を議場に送りぬ。人民大に怒りて、議場を守り、チャールス王はヨークに走れり。此のとき王に組したるは、貴族、僧侶等にして、國會に左祖したるは、淸淨敎徒なりき。前者は騎黨と稱せられ、後者は、時流に反して頭髮を短く切り居たるが故に、圓顚黨と稱せられたり。

四七　チャールス一世の末路を問ふ

答　淸淨徒の首領には、クロムエル現れき。彼れは一六四五年ナスビーの一戰を以てチャールス一世の勢を拉ぎ、次いで國會內の獨立派の首領となつて、共和政躰を造らむことを主張し、且つ其の反對黨を斥けて全權を握れり。是れより先き、王は蘇國に遁れたれど、捕はれて國會に送られ、クロムエルは、王が罪を數へて、一六四九年一月三十日を以て、王を死刑に處せり。

四八　クロムエルの議會改正は如何

答　上院を廢し、五六十名許の議員を殘せる下院を造り、別に議政院を置けり。議政院議員は、多く下院議員の兼ぬる所にして、員數四十一名なりき

四九　クロムエルの發せし航海條令とは何ぞや

答　クロムエルの國王を殺したる報傳はるや、歐洲列國大に驚愕し、直に公使を召還せり。就中和蘭は、クロムエルの組織せる共和政躰に反對したり。時しも愛蘭人は、故チャールスの王子チャールス二世となる）を援けて叛旗を飜しかば、和蘭之れに應援せり。クロムエル怒つて航海條令を出せり。こは英國及び其の殖民地の

船舶に依るに非んば、亞非利加、亞細亞、亞米利加等の産物を、英國に輸入するを禁じ、且つ歐羅巴諸國の産物を英國に輸入する場合には、英船か或は産地の船舶に依るべきを定めたるものなり。これが爲に和蘭は大なる不利を蒙れり。

五〇　ベヤーボーン國會（小人國會）とは何ぞや

答　クロムエルの勢力進むに從つて、國會は彼れを忌めり。彼れ直に之れを解散し、新に英吉利、蘇格蘭、及びアイルランドの三國より成れる國會を組織せり。これをベヤーボーン國會といふ。但し其の議員は多く彼れの部下にして、やがて國會より彼れに共和政躰保護者の稱號を贈れり。かくて全權は彼れが掌中に歸せり。

五一　クロムエルの政略を問ふ

答　彼れは武斷的政畧を用ひたり。何事も兵力を以て裁斷し、外交策に於いても亦強硬の態度をとれり。其の一代には西班牙よりジヤマイカを奪ひ、ローマ法王に對抗し、舊教徒を罰し、演藝遊戯を嚴禁したり。

五二　チヤールス二世の即位を問ふ

答　クロムエルは一六五八年を以て死し、其の子リチヤード嗣ぎけれど、無能にして軍

隊及び國會を統治すること能はざりしかば、軍隊は放逸に流れ、國内騒然として、世人漸く王政を慕ふに至りぬ。かくて一六六〇年便宜國會（コンプエンション）は、チヤールスを迎へて王とせり。チヤールス二世これなり。

五三　チヤールス二世の治世を問ふ

答　チヤールスの歸國せむとするや、信教の自由を許し、且つ大赦を行ふべしと云ふにありしが、即位後は約に背きて清淨教徒を壓迫し、ルイ十四世の賄賂を受け、或は和蘭と戰ひ、且つ娯樂に耽りしかば、國會大に怒りて、審査令（テスト、アクト）及び人身保護令を制定せり。而して英人の道徳は、先代に反して甚しく腐敗せり。

五四　ホイグ及びトーリ兩黨の起源を問ふ

答　英王位の相續に關して、國教と民權とに重を置ける國會中の一黨をホイグといひ王室の血統を論據とせるをトリー黨と稱す。前者は王黨、後者は民黨なり。

五五　名譽革命とは何ぞや

答　チヤールス二世に次いで、其の弟ゼームス二世即位せり。王は舊教を保護し、清淨教徒を苦めむが爲に、宗教裁判所を設け、且つ兵力を濫用して、人民に望みしかば、王

黨と民黨とは、共に彼れを悪み、王女メリーの夫たる和蘭のオランヂ侯ヰルレムを迎へて王となさむことを決議せり。ヰルレムは一六八八年を以て入英し、ゼームスは佛國に走りてルイ十四世に寄れり。これを名譽革命といふ。

五六 英國民權の確立を問ふ

答 國會はヰレルム即ちウイリアム三世を王として、一六八九年權利條令を通過せり。其の要點は、國會の協賛なくして法律を定め、租稅を課し、軍隊を設くべからざる事、國會は討論請願、議員撰擧の自由を有する事、宗教裁判所を置くべからざる事等なり。これに因りて民權確立せり。

五七 相續令とは何ぞや

答 ウイリアム三世の朝に當りて、ゼームスは愛蘭に上陸し、其の北部を占領して、新王を倒さむとせり。其の徒黨を呼んでジヤコバイトといふ。去れど幾許もなくウイリアム王のために破られたり。かくて一七〇一年に至りて、國會は今後の英國王たるものは、必ず新教徒たるべく、且つウイリアムに嗣ぐものは、王妹アンにして、其の後はハノーフエル（ハノーヴアー）家なるべしと決議せり。是れを相續令といふ。

五八 大不列顛の一統を問ふ

答 ウイリアム三世に繼ぎて、王妹アン即位せり。女王の世、英吉利及び蘇格蘭は全く合併して大不列顛となれり（一七〇七年）。かくて國會は唯一となりぬ。（此の以前には蘇格蘭の國會ありき）

五九 ハノーヴアー王家の始を問ふ

答 アン女王嗣子なくして死せしかば（一七一四年）國民は獨逸の選擧侯ハノーヴアーのジヨーヂを迎へて國君となせり。ジヨーヂ一世これにして、是れよりハノーヴアー王系起つて、今王に至る。ジヨーヂ一世及び二世は共に英語に通ぜず、故郷を念ふこと厚かりしかど、宰相ウルポール、ジヨーヂ二世の妃カロラインありて國政を助け、ジヨーヂ三世の朝には老ヒット出でしかば、英國の勢威大に昂れり。

六〇 ピートル大帝以前の露國を問ふ

答 露國は一五三三年のイヴアン四世の時にカザン及びアトラスカン（共に土領）を奪ひ、コーカサスの山間に居住せるコサック人を征服せり。其の人種の王イルマックは、部下の兵を率ゐて、ウラル山脈を踰え、オビ河畔迄を平定し、これよりコザック人陸續

西比利亞に侵入せり。而して玉よりツアールの稱號を用ひたり。かくて一六一三年を以て、ミカイルの王となるや（一六一三年――一六四五年）ロマノツフ王家始まれり。ミカイルの子アレキシス（一六四五年――一六七六年）に至つて國土を擴め、國威を揚げり。次でペートル大帝即位するや、露は北歐の強國として現れたり。

六一　ペートル大帝の目的を問ふ

答　ペートル大帝は、海軍の擴張を大目的として、これが爲にバルチツク海に良港を得むことを計れり。而して船艦の製造術をも奬勵せむか爲に、親しく普魯西、和蘭、英吉利、ザクセン、墺太利等を漫遊して造船術を究め、且つ工匠を招聘して、船艦の製造を托せり。按ずるに彼れは、露を以て歐洲、否むしろ世界の最大強國たらしめむことを願ひ、其の準備として海事の擴張を圖りたるなり。

帝は露國舊來の制度を嫌つて、何事も外國に倣ひければ、國粹保存主義の者は、帝の漫遊中に、帝の姉ソフヒアを擁立せむことを勸め、機會を見て土耳古と戰ひ、一六九に幽閉せられ、叛徒は誅せられたり。

六二　ペートル大帝と土耳古との衝突を問ふ

答　ペートル大帝は、其の理想を實行せむことを勸め、機會を見て土耳古と戰ひ、一六九八年を以て、アゾーフを取れり、これに依りて黒海に通ずる路は開かれたり。

六三　露帝と瑞典王との衝突を問ふ

答　ペートル大帝は、既に南方黒海に通ずる道を開きたれば、轉じてバルチツク海に土地を得むとして、機會を窺へり。一六九五年に瑞典王死して幼王カール十二世即位しければ、ペートルは奇貨置くべしとなし、丁抹及び波瀾と同盟して、瑞典を分割せむとせり。然るにカール十二世は、十五才の少年なれど、歷山大王に私淑する程の人物なりしかば、何ぞペートルを畏るべき。直に兵を率ゐて、丁抹及び波瀾の軍を破り、連戰連勝、破竹の勢を以て露西亞に入れり。これ北方の大戰爭にして、頃は西班牙王位承繼戰爭の最中なりしかば、列國は此の戰に干渉するの余裕あらざりき。さてカール十二世は、モスコウを衝き、コサックの酋長マゼツパを味方として、ペートルを困めむとを企てたれど、コザックの助力足らざるのみならず、氣候寒冷のために、兵力衰へ、一七〇九年のプルタワの戰に大敗して、身を以て土耳古に遁れたり。

六四　ニスタツトの條約を問ふ

答　カール十二世の土耳古に在ること三年。微行して歸國するや、直に諸威を衝きしかど、不幸にして戰死せり（一七一八年）是に於いてか北方の一星地に墜ち、王妹瑞典女王と

なり、一七二一年を以てニスタットの條約を結べり。是れによりて丁抹は侵畧せられたる土地を恢復し、波蘭は瑞典より百萬弗の償金を取り、露はインゲルマンランド、エストランド、及びリヴランド（孰もバルチック海に臨める地）を得て、ペートル大帝の希望は達せられ、瑞典は大に衰微したり。

六五 ペートル大帝の改革の大要を問ふ

答 大帝は何事も外國の長所に倣はむとし、而も急激の改良策を採れり。先づ元老院議員を增加して、樞密官、及び高等裁判官をも置けしめたり。全國を十二省四十三州に分ち、各州に知事を置けり。陸軍を二十一萬人と定め、大艦四十八隻、小艦八百隻、海兵二萬八千を備へたり。又人頭稅を徵收し、居留外人よりは其の財產の十分の一を納めしめて權利を與へ、婦人の覆面を禁じ、結婚に家長の干涉するを禁じたり。次に敎育に就いて、若し一他國語を知らざる貴族あらば其は實際的學藝を奬勵し、外國語の研究を薦めて、新しくも異議を挿む者あの爵位を剝奪すと規定したり。而して此れ等の改革に對して、新しくも異議を挿む者あれば、親疎を問はず、これを重刑に處したり。帝は一七二五年を以て崩じ、其の相續者善く大帝の志を守り、エカテリナ女帝の世に至つて、露國の勢力、愈〻强大となれり。

六六 フリードリヒ大王以前の普魯亞王國史を略記せよ

答 普魯西が王國となりしは、フリードリヒ一世（一六八八年——一七一三年）の時なりき。王は富國强兵を目的とし、且つ文藝を奬勵したり（此の王の時にベルリンを首府と定めたりし）次でウイルヘルム一世の即位するや、富國强兵を目的としたるは、前王に異らざりしかど、文藝に關する事は、いたく卑めて之れを顧さりき。去れば王子フリードリヒの如きも、文學を好みたるが爲に、王の怒を買へるもありき。然れども王の節儉勇剛なる、大に國勢を進步せしめ、其の死する頃には、國庫には三千萬金を財へ、精兵八萬を備へたり。王に嗣いでフリードリヒ大王即位せり（一七四〇年）

六七 カール帝六世の發せしプラグマチック、サンクションとは何ぞや

答 セルマン帝カール六世は、プラグマチック、サンクションを發して、其の世襲の領土なる墺太利、匈牙利、シレーリー等を、王女マリア、テレザに傳ふべしと定めり。此の頃波瀾に王位相續の爭生じ、佛、西、サルヂニアと、獨逸及び露西亞との間に戰爭ありき。又ローレン侯はタスカニー侯となり、墺は子ープルスとシレーリーとを、西班牙のパルマー及びピアチエンザと交換したり。

六八　第一シレジア戰爭を問ふ

答　カール六世に次いで、マリア、テレザの王位に上るや、バヴリヤ侯アルバート、西班牙王フヒリップ五世、サクソン侯オーガスタス三世は、何れも墺國王位相續の權利ありと稱して、女王に迫れり。此の頃フリードリヒ大王は、少しにても領土を擴張せむとを計りつゝありしかば、何等血系上の關係はあられども、曾て普魯西が、墺國のために恥辱を蒙れるとあれば、其の復仇なりとて、列國の意をも顧ず、一七四〇年を以て、突然墺國のシレヂアを占領せり。これを第一シレヂア戰爭といふ。女王は賢明の女丈夫にして、赤心を以て匈牙利人に訴ふる所ありしかば、此の國難に際して、よく墺國の名譽を全うしたるなり。此の年プレスローに於いて、普墺間に和議結ばれ、普はシレヂアを領するとゝなりぬ。

六九　第二シレジア戰爭を問ふ

答　第一シレヂア戰爭中、カール七世即位せり。然るに普王フリードリヒ二世は、シレヂアを失はむとを恐れ、再び兵を用ひてシレヂアに戰へり。普の同盟はカール帝及び佛國にして、墺には英、蘭、サクセン等左袒せり。此の役中、カール帝死して、マリアテレザの夫レオポルド一世即位しき。而して一七四八年を以て、普墺はエークス、ラー、

シヤペルの條約を結べり。

七〇　七年戰爭を略述せよ

答　アリア、テレザは、如何にしても國辱を雪がむとを欲し、先づ露の女帝エリサベスを味方とせり。エリサベスはフリードリヒ大王を忌みければ直に之に應じたるなり。次にザクセン、瑞典波蘭も、シレヂア戰爭以來、武名を轟かしたる大王を惡みければ、皆墺國に左袒したり。かくて一七五六年を以て、普王のザクセンを襲ふや、聯合軍彼れに當り、普魯西は英國を後援として戰へり。當初は利ありしが、漸次に逆境に陷り、今や運命盡きむとするに際して、露の女帝崩じてペートル三世即位せり。ペートルは大王の親友なりしかば、先づ墺との同盟を解き、次で英佛和を結びしかば、戰鬪は墺普間のみとはなりぬ。是に於いてか兩國、互に將來の苦境を念ひ、一七六三年を以てフーベルツブルグ條約を結べり。これに依りて、プレスロー條約は確認せられ、フリードリヒ大王の武名益高かりき。

七一　フリードリヒ大王の內政を問ふ

答　大王の事業甚だ多し。其の重なる者を擧げむに、

（一）兵士の訓練を嚴にし、賞罰を明にしたるも。（尙ほ王の死せし時には十三萬の精

兵を備へたりといふ）

（二）行政部と司法部とを分離し、以て人民の訴訟を自由にせるも。拷問を廢したるも。

（三）實業の奬勵

（四）文藝の奬勵

等なり。王は亦仁愛に富み、七年戰爭後の如きは、國力の疲弊したるにも拘らず、貧者戰死者を憐みて、民力の恢復を計り、又時々地方を遍歷して民情を察せり。げに當代に於ける明君たるを失はず。王は一七八六年を以て死す。

七二 十七八世紀に於ける在米歐洲殖民地の變遷を問ふ

答 三十年戰爭以來、英國殖民地の勢力大に進み、之れに反して西班牙の殖民地は衰退したり。葡萄牙はデラエヤ灣沿岸に大なる領土を有しけるが、チヤールス二世の時、英に占領せられて、其の大都ニユーアムステルダムはニューヨークと改名せられき。英は亦カロリナ、ニユージーランド、ペンシルヴアニア等に殖民地を造り、佛はミスシツピー沿岸にヌーヴエルオルレアン市を開けり。然るに七年戰爭の起るや、在米の殖民地亦互に干戈を交へり。當時フロリダは西領、加奈陀、ルイジアナは佛領なりしが、英佛の殖民人戰つて、英人勝利を占め、一七五九年に至りて、全加奈陀は、英領たると公認せられき。次で西班牙はフロリダを英に讓り、ルイジアナは英と西との分割する所となれり。是れにて北米の佛國勢力全く絕えたり。

七三 印度に於ける七年戰爭の影響を問ふ

エリサベス女皇の世より英は印度と交通を開き、一六〇〇年には東洋印度商會の設立ありき。されど商館は、或は土人或は競爭者のために、不利を蒙ること多かりしかば、勢兵備た具ふるに至りぬ。殊に英人の領土擴まるに從つて、其の必要、いよ〳〵大なりき。

答 印度に於ける英佛の二殖民地は、本國に戰爭ある毎に、開戰せり。而して七年戰爭の起るや、先づ佛人起つて英人の都カルカツタを圍んで虐殺を行へり。其の由來を尋ぬるに、其の頃印度の君主たりしは帖木兒の後裔モグル家なりしかど、其の勢力衰へて土着の酋長のみ權を專らにせり。されば兩殖民は此等の酋長を援くと稱して、實は自國の勢力を樹立せむと計りぬ。カルカツタを圍みたるは佛人ダエプレー（ポンヂツシエリーの總督）なりき。然るに東洋印度商會の書記クライヴなる者、一七五七年を以て佛人に當り、土人を征服して英國々威を伸張し、次でヘスチングスなる奇傑、一七七二年を以てクライブが志を次ぎ、これより英國の印度に於ける勢力は、駸々として進めり。因に言ふ。ヘスチングスは壓制を行ひたりとの件を以て、彈劾せられたり。事件の訊問七年間に

亘り、漸く彼れは無罪放免となれり。

七四 合衆國獨立戰爭の原因を問ふ

答 一言以てすれば、本國英吉利が納稅の義務を殖民地に負はしめんとし、殖民地は之れを承認する以上は、代議士を出すの權利ありと主張し、本國は之れが必要を認めずと言ひしが故に、遂に此の大戰爭起りたるなり。そも〳〵加奈陀の佛領たるや、在北米の英人は、本國の保護を仰がざるべからざりしかど、其の英領となるや、勢力增進して獨立の處置を行ふを得たり。一方に於いて本國は七年戰爭以來、國庫缺乏を感ぜしかば、先づ印紙條例（一七六五年）を發して、殖民地の書類には必ず印紙を貼用すべしと命ぜり。殖民地大に反對せしかば、政府は此の令を撤回し、更に一七六七年を以て輸入品に關稅を課せり。是に於いてか殖民地人民大に怒り、フヒラデルフヒヤに大陸會議を開きて、殖民地が自治權を得るまでは、本國と通商せざるべしと約しぬ。然るに本國は、飽く迄も彼れ等を服從せしめむとて、兵を派遣せり。其の軍隊のレキシントンに於いて殖民地人と衝突するや、愈〻獨立戰爭の緒は開かれたり、（一七七五年）

七五 宣言書の發表を問ふ

答 英國の兵力を以て、北米殖民地を威嚇せむとするや、殖民地は二萬の義勇兵を募集し。英傑ワシントン之れに將として、各州委員五十五名の調印ある獨立宣言書を發表せり（一七七六年七月四日）次で同盟規約を造り、十三州之れに加はれり。北米合衆國の名此の時より初る。

七六 合衆國に應援せし名士を問ふ

答 ワシントンは、學者連に愛國者として名高きフランクリンを使節として佛國に送り、其の扶を請はしめたり。佛政府は暗に其の要求を容れたり。而して當時個人として、合衆國を援けたる人多し。就中佛人ラファエツト、波蘭人コシアスコ、普魯西人ストイベン等は有名なり。此れ等は何れも義俠心に基きたるものなりと雖も、別に當時の一部に行はれたる理論が、米人の意見に合し居たるが故に、好奇心ある者は、此の處にて學理の實現を眺めむと欲したるなり。

七七 獨立戰爭の經過を略述せよ

答 バンカー山の戰より、自由のために身命を犧牲に供したる米人は、ワシントンを元帥として英軍に當れり。米軍多く勝ち、一七七七年十月には、英將バルゴイン、六千の兵を以て降服したり。是に於いてか歐洲諸國驚嘆し、佛西共に援兵を米國に送れり。此れ迄のワシントンの經營實に一方ならざりき。次で一七八一年に至つて、英將コーンワ

リスの七千の兵を以て降服するや、和、瑞典、露、丁抹等皆米人に左祖して、其の獨立を承認したり。げにワシントンの功大なりと謂ふべし。

七八　獨立戰爭の終局を問ふ

答　英軍不利なるのみならず、歐洲列國の米人に同情を表するありしかど、ジョージ王は剛情にして宰相ノース卿の諫言をも聽かず、長く戰鬪を續けたり。然るにノース卿去つて小ピット内閣に入り、一七八一年の報來るや、最早英に米國を征するの力なく、遂に佛國巴里及びヴエルサイユに於いて和議を結び、米國は獨立自治の國となれり（一七八三年）是れと共に英國は、フロリダ、ミノルカの二を西班牙に割讓せり。

七九　合衆國憲法の發布及び其の要點を問ふ

答　一七八七年九月十七日を以て是れを發布せり。大統領と議會とを政府の中心とし、議會を元老院及び代議院に分ち、元老院議員は、各州より二名を出し其の任期を六ヶ月とす。代議院議員の任期は二ヶ年にして、各州の人口に應じて之れを選出す。公民は皆な選擧權を有し、奴隷は公民の其の五分の二の權あり（公民四萬人中より一人を出すときは奴隷六萬六千六百六十六人中より一人を出す割合なり）大統領の任期は四年にして、複選擧法による。其の第一大統領はワシントンなり。かくて第一期國會を一七八九年三

月四日を以て紐育に開けり。因にいふワシントン市の首府と定められたるは、一八〇〇年なりとす。

八〇　第一回波瀾の分割を問ふ

答　波瀾は古より文明の進みたる國なりしが、貴族等の私利を計ること甚しかりしが故に下民との衝突起り、國内常に不穩なりき。然るにアウグスト三世死して、王位空居なるや、國内いよ〳〵亂れしかば、露の女帝エカテリナは、嬖臣をして之れを襲はしめ且つ國王を選定して、暗に内治改良の道を斷ちたり。此の頃普魯西は、地勢上波瀾を中間に置きて、甚だ不便なりしかば、機を見て、兩部の連絡を計らむとせり。恰も好しエカテリナの擧ありしかば、墺太利のヨセフ二世帝と露帝と同盟して、第一回の波瀾分割を行へり（一七七二年）

八一　第二回の波瀾分割を問ふ

答　エカテリナは尚ほも波瀾を占領せむと欲して、策を廻らし、同國貴族等の衝突を起さしめたり。憂國の士は大に勉むる所ありしかど、頑迷なる貴族は露帝の術に陷りて國内紛擾を極めき。是れを機として普魯西と露西亞とは、第二回の分割を行へり。（一七九三年）

八二　第三回の波瀾分割を問ふ

答　昔つて米國の獨立戰爭に赴きたるコシアスコの歸國するや、國運の衰退を見、且つ露普の暴を憤りて兵を擧げり。されど普露の軍に破られて、自身は捕虜となれり。是に於てか兩國は第三回の分割を行へり（一七九五年）これにて波瀾は滅亡せり。

八三　墺國ヨセフ二世の治を問ふ

答　マリア、テレザの子、ヨセフ二世は、專心內政の改良を企て、或は猶太人を保護し、或は偶像を破棄し、或は教科書を選定する等、大に舊弊を破りたれど、其の改良急激なりしが爲に、却て僧侶貴族の反對を受けて、成功せるは尠かりき。然れども窮民救助の道は大に進めり。

八四　エカテリナ女帝と土耳古との關係を問ふ

答　土耳古はマームードの時に、黑海沿岸の露領を奪ひけるが、露のエカテリナ女帝出づるに及びて、クリミアを露國に占領せられ、且つ一七九二年のヤッシーの條約に由りて、ダニエスター河以南に跼蹐せざるを得ざるに至りぬ。並に尙一の注目すべきは女帝の力として基督教徒が、土耳古に反抗しそめたる事是れなり。げに女帝は知謀に富み大

なる抱負を以て、歐洲全土を露西亞化せむとしたり。但し其の私行には非難多し。

八五　十八世紀後半の英國々勢を問ふ

答　航海貿易の業大に進み、工藝起り、憲法政治の運用進歩したれば、たとひ米國を失へりと雖も、國力は依然として強大なりき。但し此の頃より國會には、腐敗分子の混入したるを見る。之れに反して、財政紊亂し、王權の衰退したるは佛國なりき。

八六　文藝復興期以後佛國大革命に至る間の文藝を問ふ

答　文藝の復興は、古典の研究を呼び起したりと雖も、單に訓詁註釋の僞を生じて、創出の才能を發揮せしめざりき。然れども十六世紀に至りては、文運再び勃興して、伊太利には詩人タッソー（一五四四年——一五九五年）、散文家マキヤベリー（一四六九年——一五二七年）出で、繪畫亦大に進歩せり。

（イ）此の間の英國文豪の重なる者を擧げよ

スペンサー（一五五三年——一六一六年）空前絶後の大詩人と呼ばるゝ人なり。其の作三十余篇ありて、就中有名なるを「ハムレット」「レヤ王」「オセロ」「マクベス」の四大悲劇とす。

シエークスピヤー（一五六四年——一六一六年）「神女王物語」なる詩を傳ふ。

ミルトン（一六〇八年——一六七四年）亦有名なる詩人なり。清淨教徒にして、クロムエルを補けて、正義のために筆を振へり。其の大作には「失樂園」あり。

バンヤン（一六二八年——一六八八年）「天路歷程記」を著せり。

倘ほ十八世紀に入りては、アヂソン（一六七二年——一七一九年）スヰフト（一六六七年——一七四五年、ガリヴアー漂流記の作者）ポープ（一六八八年——一七四四年、詩人）ドライテン（一六三一年——一七〇〇年、詩人）等の名家輩出せり。

（ロ）此の間の英國に於ける哲學者の重なる人を擧げよ

哲學者には、歸納法論理の開祖と稱せらるゝベーコン（一五六一年——一六二六年）ホツブス（一五八八年——一六七九年）ロック（一六三二年——一七〇四年）ベルケレー（一六八四年——一七五三年）ヒユーム（一七一一年——一七七六年）等の名家を出せり。

（ハ）獨逸に於ける哲學者及び文學者の重なる人を問ふ

レツシング（一七二九年——一七八一年）はフリードリヒ大王が奬勵したる似而非擬古主義に反對して、眞正の古文學を研究せり。

ヴインケルマン（一七一七年——一七六八年）は古美術を研究せり。

ライプニッツ（一六四六年——一七一六年）は、近代のアリストートルと稱せられたる博識の哲學者なり。

（ニ）佛國の哲學者を擧げよ

デカルト（一五九六年——一六五〇年）は近世唯心哲學の祖と言はるゝ人なり。

コンヂラック（一七一五年——一七八〇年）は英のロックが說を本として、極端なる經驗說を述べたり。

（ホ）佛國の文豪を問ふ

佛國にては、ルイ十四世の時、リシエリウが、學士會院を置きて、文藝を奬勵したるより文運進みて、多くの文豪を出せり。其の重なるは左の如し。

悲劇作家コルヂイユ（一六〇六年——一六八四年）ラシーヌ（一六三九年——一六九九年）共に名あり。

喜劇作家にはモリエル（一六二二年——一六七三年）あり。

譬喩談作家にはラ、フオンテーヌ（一六二一年——一六九五年）あり。

フエヂロン（一六五一年——一七一五年）は「テレマック」の作者なり。

偖て十八世紀に入りては、宗教政治を非難する者漸く多く、ヂデロー（一七一三年——一七八四年）は百科全書を印行して、盛に自由研究を唱導せり。

モンテスキユー（一六八九年——一七五五年）は近世政治學の祖なり。

ヴオルテール（一六九四年——一七七八年）は迷信者攻擊を以て名あり。

ルーソー（一七一二年――一七七八年）は、虚偽諂諛の社會を罵り、人は原始の狀態に復歸して、平等なる社會を造るべしと論ぜり。「民約説」の著あり。

（ハ）前記以外に於ける文人學者を問ふ

葡萄牙には カエモン、がマの二文人を出せり。

西班牙には「ドンキオテ」の作者セルヴアンテス（一五四七年――一六一六年）を出せり。

和蘭には、デカルト派の哲學者スピノザ（一六三二年――一六七七年）あり。

八七　近世に於ける佛國革命以前の科學の進歩を問ふ

答　當時の科學者は左の如し。

英人ニユートン（一六四二年――一七二七年）は引力を發見して名あり。

獨人コペルニカス（一四七三年――一五四三年）は太陽中心説を唱へり

仝ケプレル（一五七一年――一六三〇年）は遊星廻轉の三大則を發見せり。

伊太利人ガリレオ（一五六二年――一六四二年）は、望遠鏡を發明し、是れより天文學の研究大に進めり。

白耳義人ヴエサリユース（一五一二年――一五六四年）は解剖學を創始せり。

英人ハーヴエー（一五七八年――一六五七年）は血液循環を唱へり

此の他伊人ヴオルタ（一七四五年――一八二七年）米人フランクリン（一七〇六年――一七九〇年）は電氣學上に功を著はし、動物學には佛人アツフ、ボン（一七〇七年――一七八八年）出でたり。植物學には瑞典人リンチーウス（一七〇七年――一七七八年）出でたり。佛人ラプラーヌは天文學に、仝じくラデアジエーは、化學に一派を立てたり。次に理學の應用としては、蘇國人ゼームス、ワット（一七三六年――一八一九年）の蒸汽機關の發明あり。アクーライト（一七三二年――仝九二年）は紡績を發明せり。此の他電信機、顯微鏡、時計、喞筒等の發明、皆な此の時代なりき。

八八　改革と革命との別を問ふ

答　改革とは、從來ありし者の根本を破壞せず、たゞ其の惡弊のみを去るをいふ。ルーテルの宗教改革の如き其の例なり。革命とは、從來ありしものゝ、根本迄をも變革するをいふ。佛國大革命は、其の好例なり。

八九　佛國大革命の原因を問ふ

答　此の一大變亂の原因に就きては、列記すべきもの多しと雖も、要點は次の如し。

（一）貴族及び僧侶等は、多く巴里に在りて、奢侈に耽り、其の結果財政缺乏を生じたるが故に、下民を困め、下民は之れがために、非常なる苦境に沈みたるも。

ルーソー（一七一二年――一七七八年）は、虚偽諂瞞の社會を罵り、人は原始の狀態に復歸して、平等なる社會を造るべしと論ぜり。「民約說」の著あり。

（ハ）前記以外に於ける文人學者を問ふ

葡萄牙にはカエモン、ガマの二文人を出せり。

西班牙には「ドンキホテ」の作者セルヴアンテス（一五四七年――一六一六年）を出せり。

和蘭には、デカルト派の哲學者スピノザ（一六三二年――一六七七年）あり。

八七　近世に於ける佛國革命以前の科學の進歩を問ふ

答　當時の科學者は左の如し。

英人ニユートン（一六四二年――一七二七年）は引力を發見して名あり。

獨人コペルニカス（一四七三年――一五四三年）は太陽中心說を唱へり

仝ケプレル（一五七一年――一六三〇年）は遊星廻轉の三大則を發見せり。

伊太利人ガリレオ（一五六二年――一六四二年）は、望遠鏡を發明し、是れより天文學の研究大に進めり。

白耳義人ヴエサリユース（一五一二年――一五六四年）は解剖學を創始せり。

英人ハーヴエー（一五七八年――一六五七年）は血液循環を唱へり

此の他伊人ヴオルタ（一七四五年――一八二七年）米人フランクリン（一七〇六年――一七九〇年）は電氣學上に功を著はし、動物學には佛人アツプホン（一七〇七年――一七八八年）出で、植物學には瑞典人リンネーウス（一七〇七年――一七七八年）出でたり。佛人ラプラーヌは天文學に、仝じくラデアジエーは、化學に一派を立てたり。次に理學の應用としては、蘇國人ゼームス、ワツト（一七三六年――仝九二年）は紡績を發明せり。此の他電信機、顯微鏡、時計、喞筒等の發明、皆な此の時代なりき。

八八　改革と革命との別を問ふ

答　改革とは、從來ありし者の根本を破壞せず、たゞ其の惡弊のみを去るをいふ。ルーテルの宗教改革の如き其の例なり。革命とは、從來ありしものゝ、根本迄をも變革するをいふ。佛國大革命は、其の好例なり。

八九　佛國大革命の原因を問ふ

答　此の一大變亂の原因に就きては、列記すべきもの多しと雖も、要點は次の如し。

（一）貴族及び僧侶等は、多く巴里に在りて、奢侈に耽り、其の結果財政缺乏を生じたるが故に、下民を困め、下民は之れがために、非常なる苦境に沈みたるも。

(二)王室の財政も亦紊亂したるを(以上はルイ十四世の驕奢の遺風より生じたる自然の結果なり)。
(三)最下級の人民は、生活に困難なるほど、重稅を負はされたるため、他國に逃れ或は政府を怨みたるを。
(四)學理にはヴオルテールの耶蘇教攻撃、ルーソーの復初主義等ありて、多數の人心を感化したるを。
(五)米國に共和政治實行せられたるより、多數の排政府黨は、理想的政治の實施せらるべきを悟りたるを。
以上は重なる原因なり。

九〇　ルイ十六世の財政整理を問ふ

答　ルイ十六世の一七七四年を以て即位するや、王室の財政愈よ亂れければ、王は理財家ツルゴーを登用して、財政の改革を企てたり。ツルゴーは貴族及び僧侶等に課稅する策を立てしが、却て彼れ等の反對に遭うて、一七七六年に辭職せり。次いで端西の銀行家子ツケル此の任に當りぬ。子ツケルは地方集會を造つて、地方收稅吏が、中央政府に送るべき金錢を窃取するを防ぎたり。然れども彼れは外人にして且つ新教徒なりしかば、亦貴族僧侶の反對を受け、優柔不斷のルイ十六世は、一七八一年を以て、彼れを免職せり。次いでカーロン其の職に就き、名士會議を開きて(一七八七年)加稅法案を提出したるが、亦保守黨の貴族僧侶のために排斥せられき。

九一　ルイ十六世の國會召集を問ふ

答　カーロンに次いで、プリーヌ財政整理に當りしが、力足らずして退き、子ツケル再び登用せられたり。子ツケルは國會組織に就いて、全國民の意見を問へり。此の時アベ、シエーなる者、「平民とは何ぞや」との論題の下に、平民即ち第三級民の値打を論じて、國會にも其の代議士を出すべきを說けり。かくて子ツケルは國會の組織を定め、一七八九年を以てヴエルサイユに議員を召集せり。選擧の結果、貴族二百九十一人、僧侶二百七十人、平民五百七十八人の議員を出し、仝年五月五日開院せり。

九二　國民議會とは何ぞや

答　一七八九年の國會には、貴族と僧侶とは、平民と別に會議を開くべしと主張しければ、平民は平民にて國民會議(ナショナル、アセムブリー)を組織せり。ミラボーとシエーとラファエット等は其の主領なりき。議員は强硬の態度を示しければ、王は已むを得ず貴族僧侶をも、之れに加はらしめき。これを立憲會議といふ。

九三　バスチールの破壞とは何ぞや

答 ルイ十六世は、國民議會の增長を忌み、巴里及びヴエルザイユに兵を集めて、平民を威嚇せむとせり。國民大に怒り、直に國民軍を組織して、先づ國事犯罪者を投ずるバスチールの牢獄を圍みて、其の守備兵を殺せり（一七八九年七月十四日）此の擾動は、王の慰諭によりて鎭定せられたるも、貴族等にして、難を國外に避けたる者多かりき。

九四　國民議會の進行を問ふ

答 バスチールの暴動に因りて、貴族僧侶の勢威衰へ、八月四日の議會に於いて、其の特權を放棄せむことを約し、國民は第三級民こそ國家の基礎たるを宣告せり。

九五　貧民の暴動を述べよ

答 貴族富豪等の巴里を去るや、貧民は生活の道を失へり。加ふるにルイ十六世が召集したるフランダーの兵士は、公會の席にて平民黨の徽章を蹂躙せしとの報ありければ、平民黨大に憤り、貧民は隊を造つて、ヴエルサイユ宮殿を襲ひ、パンを與へよと叫びつゝ、王を擁して巴里に歸れり（十月六日）

九六　ミラボーの改正案を問ふ

答 ミラボーの改正は次の如し。全國を八十三縣五百七十四郡、四萬千鄕に區分し、國民議會、地方官、裁判官は人民をして選出せしめ、國會には宣戰媾和の權を置き、又所謂國會（高等裁判所）を廢して、地方裁判所と巴里の高等裁判所とを設立せり。次に寺領を沒收し、之れを證として紙幣を發行し、寺院は一縣一寺と定め、僧侶には年金を與ふることとし、別に僧侶は國法と國民とに忠實に、且つ憲法を遵奉すべきを命ぜり。此の他工場を開きて窮民を救ひ、貧民には減價を以て食物を賣る等、大に第三級民のために盡力したり。されば一七八九年十月より、一七九一年迄は、國內稍平穩に復したり。

九七　ルイ十六世の逃走を問ふ

答 一七九一年を以て、ミラボーの死するや、王は墺國に遁れて、其の地に露れたる佛國貴族と結んで、事を計らむとせり。然れども事露はれて、中途より巴里に護送せられ、且つ王權を剝奪せられき。

九八　國民議會の解散を問ふ

答 國民議會は、新憲法を修正批准し、王の位を復したれば、今や事務を終りて、一七

九一年九月二十九日を以て解散せり。代つて立法議會は開かれむとす。但し國民議會の決議によりて、從來の議員の再選を許さゞりき。

九九　立法議會と三黨派とを問ふ

答　一七九一年十月一日を以て、立法議會組織せられき。新憲法は議員の財産に重を置かざりしが故に、選出せられたる者は、何れも貧しき人なりきと傳ふらく一年の收入百磅以上なりし者は、僅に四十人許なりきと。而して此の時三黨派現れたり。

（一）立憲黨　憲法擁護を主張せり。官吏之れに屬せり。

（二）共和黨　溫和なる共和主義を採り、佛國南部の人多し。

（三）過激黨　極端なる共和論者にして、其の中二種あり。ジヤコビン黨とコルデリールと是れなり。共に集會せる寺院の名より來れり。前者はロベスピエールを首領とし、後者はマーラー、ダントンの二人を首領とせり。

國會場の右方は立憲黨、左方は共和黨（ジロンド）及び山岳黨（ジヤコビンとコルデリール黨）を以て占めたり。

一〇〇　墺普開戰の宣告始末を問ふ

答　佛國に革命の變動起るや、墺普は同盟して、佛國に向ひて、其の秩序を恢復し、且つ王の自由權を再興すべしと申込めり。此の時立法會議開かれ。共和黨は、王に迫りて開戰を宣告せしめき（一七九二年四月二十日）これ彼れ等は、戰爭によりて、目的を遂行し得べしと信じたるが故なり。然るに戰利あらざるのみならず、國會より請求したる二萬人の兵士召集は、ルイ十六世の許さゞる所となりしかば、人心大に動搖せり。

一〇一　トイレリース王宮の騷動を問ふ

答　墺國と開戰して利あらざるや、佛人動亂して、トイレリース王宮に亂入して、憲法を遵奉せざる僧侶を國外に放逐し、且つ兵士召集の件を裁可せむことを迫れり。去れど王は斷乎として是を斥けたり。此の事件は、市長ペチオンの煽動に出でたり。

一〇二　國王ルイ十六世の幽閉始末を畧記せよ

答　一七九二年八月を以て、墺太利王レオポルド二世と、普魯西王ヘルム二世と同盟して、ピルニッツの宣告を發表して、佛國王位の自由權を恢復せむとするや、露、西班牙、瑞典の諸國之れに左袒したり。是れを聞きし佛人、更に王を怨み、示威運動として、マルセーユより千餘の兵士を巴里に召集せり。此の時兵卒の歌ひし曲は、今日マルセーユの名を以て知らる。さて兵士は、過激黨及び共和黨の使嗾に因りて、王室に亂入し、王の護衛兵を殺し、器具裝飾品を破壞する等、亂暴を極めたりル。ルイ十六世は難

を國會に避け、國會は王の面前にて、王權を剝奪し、次いで王族をテムプル城中に幽閉したり。此の時立憲黨は既に勢力を失ひ、其の首領ラファエットは捕はれたり。

一〇三 ギロチンとは何ぞや

答 國王を幽閉したる過激黨及び共和黨は、革命裁判所を開きて、苟しくも革命に反對する者あれば、之れを死刑に處せり。此の時、藥種屋にして議員たりしギロチンなる者從來の斷頭機械に改良を加へて、甚だ便利なる斷頭臺を造れり。これより其の斷頭臺をギロチンと呼べり。

一〇四 ルイ十六世の末路を問ふ

答 過激黨と共和黨とは、奧普の同盟軍に當ると共に、王政を廢して共和政治を立て、國會は全權を握りぬ。次いでルイ十六世を裁判に附し、出席議員七百人の內六百八十三人の多數を以て、王を有罪と判決し、更に二百六十九人に對する五百十人の多數を以て死刑を宣告したり。但し王は種々辯明する所ありしかど、外國と通じたりといふ嫌疑を十分に辯解する能はざりしと傳ふ。かくてルイ十六世は狂暴なる過激黨及び共和黨のために、斷頭臺上の露と消えたり。時に一七九三年一月二十一日。是に於いてか王政全く破壞せられたり。

一〇五 佛國に對する第一回の列國同盟と佛の之れに對せる軍制とを問ふ

答 國王を死刑に處せりとの報あるや、列國皆な佛國民の暴を惡み、英の宰相ピットは斷じて其の根源を斷つべしとて奧普同盟に加はり、尋で和蘭、西班牙も公然加入しき。偖て佛國は、之れに對應せむが爲に、軍制を改めて、十八才以上、四十歲以下の者は悉く兵役の義務ありと定め、又別にサンキュロットと呼ばれたる無賴の徒を民間に派遣して軍費を徵收せしめたり。

一〇六 共和黨の衰退を問ふ

答 共和黨員の同盟軍に當るや、戰利あらざりき。加ふるに和蘭に在りし共和黨の一將が、國王の最後を聞き、其の餘りに無道なるを憤りて叛旗を飜して、失敗するや、共和黨の勢力衰退し、國會內にはひとり過激黨のみ勢力を握り、一七九三年五月を以て、共和黨を殺すべしと決議せり。

一〇七 恐怖時代とは何ぞや

答 一七九三年六月の頃より、翌年夏期に至る間を云ふ。此の間過激黨のみ暴威を逞う

し、苟しくも革命に反對する者あれば、有罪無罪を問はず、罪の輕重を論ぜず、遂には敵黨たるものは、老若男女たるを問はず、之れを殘酷なる刑に處したれば、世人稱して恐怖時代といふ。是れより保安委員會及び革命裁判所、設けられ、今は其の役員は、過激黨のみより拔擢せられたり。

一〇八 ロベスピヤアー及ダントンの角逐を問ふ

答 一七九三年七月を以て、革命黨の首領マーラーは、一少女の爲に暗殺せられたり。是れより勢力の爭は、ダヤコビン黨のロベスピヤーと、ゴルデリール黨のダントンとの間に生ぜり。ダントンの無神論を唱へ、曆數を改め、平等自由を主張して建築の樣式までに立ち到るや、ダヤコビン黨の彈劾する所となりて、其の身殺され、黨員亦屠られき。爭いでロベスピヤーの、權謀を以て、自家の勢力を增進せむとするや、保安委員の反對する所となりて、亦斷頭臺上に死せり。而して其の部下は三日間に殺戮せられき。かくて一七九四年八月一日を以て、革命裁判所を閉ぢ、數萬の囚徒は放免せられき。これを恐怖時代の終とす。

一〇九 佛國と同盟軍との戰爭を問ふ

答 佛人善く戰ひ、和蘭は破れて、バタヴイヤ共和國とせられ、普魯西は一七九五年を以て、ライン左岸の地を割きて和を結べり。按ずるに佛軍の勝利を得たるは、革命裁判所閉鎖後、政府が壯士、無賴漢などの分捕を默許したればなるべし。

一一〇 一七九四年の新憲法を問ふ

答 殺伐なる革命に厭きたる佛人は、溫和主義の有力家が制定せる新憲法（一七九四年九月）發布を承認せり執政官五人は、行政を司り、元老院及び五百人議會は立法部となれり。執政官の任期は五年、元老院議員は二百五十人にして皆四十才以上、五百人議會員は三十才以上の者より成れり。かくて政府は兵力を以て反對黨を鎭め、無事に此れ等役員議員の選擧を終りたり。此の頃同盟國も佛の稍平穩に歸したるを見て、其の契約を解けり。

一一一 ナポレオンの伊太利攻擊を問ふ

答 執政官の選ばれたる頃には、佛に反抗したるものは、墺英の二國のみなりき。佛國政府は、先づ墺國を攻擊せむため、ナポレオンなる士官を派遣せり。ナポレオンは先づ北伊太利を征服し、轉じて維也納を衝かむとせしが、他方より向ひたる佛軍の不利を聞き、一七九七年カムポー、フオルミオー條約を結べり。墺はヴエニス諸領を取り、佛は

塡領ニーデルランドを取りぬ。此の時シサルパイン共和國（ミラン、モンデーナ等）リギュリア共和國（ジェノア）ローマ共和國（法王領）等建造せられて皆な佛國に隷屬せり。

一一二　ナポレオンの埃及征略を問ふ

答 此の時、佛國に反抗せるは英國のみとなりぬ。ナポレオンは、英の勢力を鏃がむと欲し、先づ土耳古領なる埃及を略し（一七九八年）是れを根據として英領印度を衝かむとせり。然れども其埃及に在る間に、英の海將子ルソンは、地中海にて佛艦を破壞せしかば、ナポレオンはシリアに向ひ、アークルを圍みたれど、英軍のために防害せられ、志を得ずして引き返せり。これナポレオンが終生の恨とせる退軍也。

一一三　第二回の列國同盟を問ふ

答 ナポレオンの到る處に勝利を得て共和國を造るや、露、墺、土耳古、葡萄牙等英國と第二回の同盟を作つて、佛に當れり。佛軍利あらず、執政官の名聲地に墜ち、人心亦もや動亂せり。

一一四　執政官政治の最後を問ふ

答 ナポレオンの到る處に勝利を得て共和國を造るや、露、墺、土耳古、葡萄牙等英國及び弟ルシアンと結んで、政府顚覆を企て、先づ兵力を以て元老院、及び五百人議會を壓倒し、自ら十年の期限を以て、首領の筆頭となれり。

一一五　ナポレオンの首領政治を說明せよ

答 ナポレオンは執政官政治を廢して、シエーの案に成れる首領（コンシユール）政治を行へり。首領三人ありて、內一人を長とし、他の二人を顧問官とす。任期は十年也。元老院は八十名よりなり、高等官を任命するの權あり。國會は議政院（トリビユナート）及び立法院（レヂスラチーヴ）に分る。而して議員の選擧法も改正せられたれど、實際はナポレオンの幕下のみ選出せらるゝ樣の組織なりき。

一一六　英露の角逐を問ふ

答 ナポレオンは露帝ポールを說きて、同盟を脫せしめ、ポールは丁抹及び瑞典と結んで英に當れり。又ポールは印度の英の勢力を減殺せむとしたれども果さず、却て英の勢力進んで、佛の勢力衰へり。丁抹瑞典亦英の爲に苦めり。

一一七　アミアン條約を問ふ

答 一八〇〇年ナポレオンはアルプスを踰えて伊太利を伐ち、次で墺國に當りぬ。墺國戰利あらず、一八〇一年を以て、リユーヂヴイル條約を結べり。此の條約によりて、佛は西班牙よりルイヂアナを取り（後幾許もなく米國に賣れり）墺國よりライン左岸の地を取り、墺國のために破れたる伊國共和國を再興せり。翌年英國とアミアンの條約を結べり。これにて歐洲の天地一たび平穩に復せり。因に言ふ愛爾蘭は一八〇一年英に合す。

一一八 ナポレオンの帝位に昇りし次第を問ふ

答 ナポレオンは一八〇二年八月を以て、終身の首領となり、次いで一八〇四年を以て羅馬法王より帝冠を受け、伊太利王を兼ね、其の子に羅馬王の稱號を與へり。

一一九 ナポレオンの内政を答ふ

答 アミアン條約以來、ナポレオンは内政に意を用ひたり。其重なるものを擧げむに、地方に裁判所を置き、縣にプレフエクトを置き、官吏に等級を定め（局長課長等の制之れより起る）舊教を國教とし、別に信教の自由を許し、僧侶の任命を首領の權に屬して、彼れ等の土地を奪ひたる代りに年金を與へり。げに彼れが法典の編纂は、今日の歐洲諸國の參考する所なり。又教育には尤も意を用ひ、殊に實際的學藝を奨勵せり。殖産興業も彼れに因りて大に進み、一七九八年には博覽會なるもの開かれき。次に貴族の階級再

興せられて、ナポレオンの親族皆なそれ〴〵に封ぜられたり。

一二〇 プレスブールグの條約を問ふ

答 ナポレオンの帝位に上るや、英、露、墺は之れを承認せずして、第三回の同盟を結べり。然れどもアウステルリツクの戰（一八〇五年）に於いて露墺の軍破れて、墺はプレスブールグの條約を結べり。ナポレオンはヴエニス及び伊太利の數地をとれり。其の翌年に至りて、獨逸諸侯はライン聯邦を造りて、佛帝を保護者と仰ぎ、墺のフランシス二世は神聖羅馬皇帝の位を退きて、墺太利帝と稱するの已むを得ざるに至りぬ。

一二一 トラフアルガーの大海戰を問ふ

答 ナポレオンは英國を伐たむと欲して、海軍を組織したり。然るに英の海將ネルソン烟眼を以て、ナポレオンの進退を窺ひ、トラフアルガーの海戰（一八〇五年十月二十五日）にて佛艦を破り、これより佛の海上權は全く失はれたり。此の大攻撃によりて遺のナポレオンも英に對抗するの念慮を一時中止したりといふ。

ネルソンは一七五八年を以て生れたる海將なり。英人は彼れを海軍の祖先として敬ふ。